多賀城市文化財調査報告書第108集

# 多賀城市内の遺跡2

—平成23年度発掘調査報告書—

平成24年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第108集

# 多賀城市内の遺跡2

—平成23年度発掘調査報告書—

平成24年3月

多賀城市教育委員会

# 序　　文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの文化財は連綿とした月日の中で、守り引き継がれてきたものであり、本市が歴史のまちである所以はここにあります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務であります。そのため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところであります。

本書は平成23年度の国庫補助事業として実施した29件の発掘調査の成果を収録したものです。縄文時代では、大代貝塚において残存状況の良好な貝層が発見されました。古墳時代では、山王遺跡において4世紀の水田跡が発見され畦畔による区画が明らかとなりました。中世では、新田遺跡の各調査において溝で区画された武士の屋敷跡を広範囲にわたって確認することができました。近現代では、高崎遺跡で多賀城海軍工廠にかかわる建物跡、地下施設が発見され、また、文化財レスキューに伴う多賀城海軍工廠機銃部機銃発射場の調査では、建物基礎の確認と現存する建物の測量調査を実施いたしました。いずれの調査も多賀城市の近現代の歴史を解明するうえで貴重な成果となりました。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より深く感謝申し上げます。

平成24年3月

多賀城市教育委員会
教育長　菊地　昭吾

# 例　言

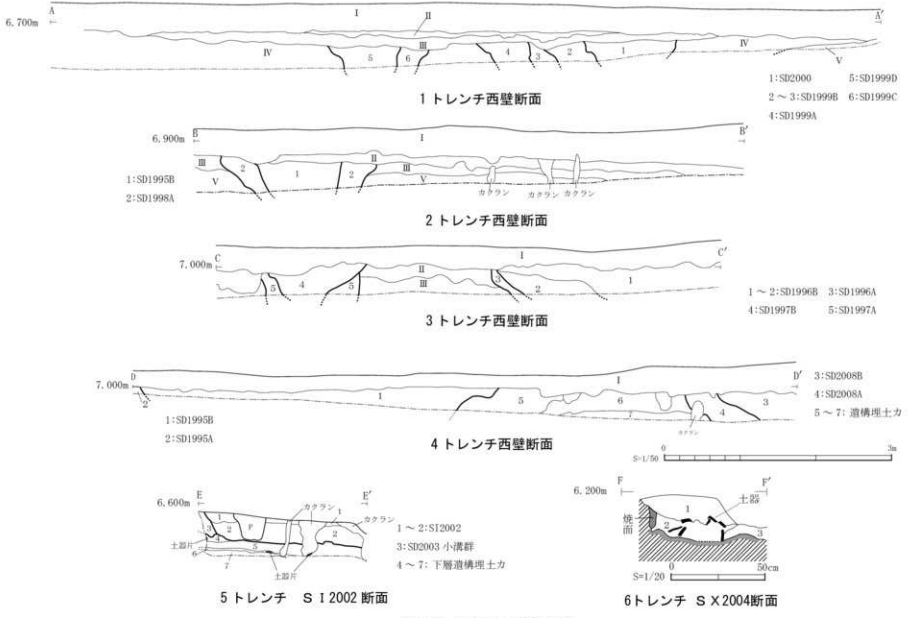
1　本書は、平成23年度の国庫補助事業として実施した発掘調査36件の内29件の成果をまとめたものである。
2　遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
3　測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
4　挿図中の高さは、標高値を示している。
5　土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
6　調査一覧で●印の付いた調査については、文化庁通知「東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて（23庁財第61号）」に基づき緩和措置が取られることになったものである。
7　新田遺跡第69次調査については、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て実施した。
8　黒曜石製石器の使用痕については、東北大学大学院文学研究科考古学研究室所有のデジタルマイクロスコープシステム（キーエンス VHV-1000）を使用して小原一成が観察・記録した。
9　本書の編集は相澤清利が担当した。執筆担当は調査一覧に別記した。図版作成等は各担当者と鈴木琢郎・畠山未津留・四家礼乃・高橋純平が行った。また、遺物の写真撮影は鈴木、畠山が担当した。
10　調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

# 目　次


遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
新田遺跡第69次調査 …… 3
新田遺跡第70次調査 …… 9
新田遺跡第71次調査 …… 10
新田遺跡第72次調査 …… 17
新田遺跡第73次調査 …… 23
新田遺跡第74次調査 …… 36
新田遺跡第75次調査 …… 37
新田遺跡第76次調査 …… 41
新田遺跡第77次調査 …… 49
新田遺跡第78次調査 …… 57
新田遺跡第79次調査 …… 63
新田遺跡第80調査 …… 71
新田遺跡第81調査 …… 77
山王遺跡第89調査 …… 81
山王遺跡第90次調査 …… 83
山王遺跡第91次調査 …… 88
山王遺跡第92次調査 …… 93
山王遺跡第93次調査 …… 98
高崎遺跡第86次調査 …… 103
高崎遺跡第87次調査 …… 105
高崎遺跡第88次調査 …… 107
小沢原遺跡第18次調査 …… 127
小沢原遺跡第19次調査 …… 128
大代貝塚第5次調査 …… 129
高原遺跡第9次調査 …… 131
大日南第10次調査 …… 132
西沢遺跡第21次調査 …… 136
法性院遺跡第2次調査 …… 142
多賀城海軍工廠機銃部機銃発射場跡の調査 …… 144


# 調査要項

1　調査主体　　多賀城市教育委員会　　教育長　菊地昭吾
2　調査担当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所　長　加藤佳保（～平成23年10月）
　　〃　　鈴木典男（平成23年11月～）




第３図　各トレンチ他断面図

4　協力調査員　村上裕次　齋藤圭一　須藤貴宏　清水上政憲　武田裕光（宮城県教育庁文化財保護課）

5　調査協力者　伊東信久　伊東奈々子　柳原しん　柳原 清　管野隆市　佐藤 努　熊谷米子　中川 悟
中川 美佳　長澤典子　吉川 章　吉川謙一　小澤良一　伊東嘉二雄　浦山 淳　佐々木
新太郎　佐々木敏恵　大友博美　浦山榮夫　熊谷俊彦　佐藤昌史　大和仁史 黒崎勝男
阿部公雄　佐藤雅俊　鈴木英磨　御前直也　山形雪子　車塚利彦　藤川 潤　佐藤一芳
阿部芳広　志賀孝一　志賀久造　佐藤榮夫　中村隼人
小山祐司 小野智希　佐藤　諒（東北工業大学）　茂木裕樹（塩竈神社博物館）
鹿又喜隆　傳田惠隆（東北大学文学研究科考古学研究室）
社会福祉法人 銀杏の会　㈱山陽住宅販売　㈱東北セキスイハイム不動産　㈲上野商店
㈱王子チヨダコンテナー　㈱タクトホーム　㈱エム・アール・ディー仙台　㈱我妻商店

6　調査従事者　阿部信夫　渥美静香　市川昌暁　小川勝彦　小野玉乃　大江かおり　加藤義宏　加藤
克夫　亀山昭子　川村善蔵　片倉 忠　岸柳あきら　菊地清喜　木村ひろ美　小松まり
今野和子　小出博秋　輿 清志　佐々木奈美　佐藤 正　佐藤十五　佐藤有佳利　桜井
良博　西條金三　齋藤勝彦　重泉昌志　清水 亮　鈴木幸夫　高橋正行　瀧澤恵子
千葉美恵子　戸枝瑞恵　中村敏雄　中島 弘　橋沼茂二　早坂美代子　芳賀かずみ　平
塚孝志　平塚武慶　藤田恵子　星 彰　山田 理　渡邉祐子

7　整理従事者　丑田明希　菅野良子　佐々木清子　千葉郁美　宮城ひとみ　村上和恵

# 凡　例

1　本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＡ：柱列跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土壙
Ｐit：柱穴及び小穴　ＳＸ：その他の遺構

2　奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」（多賀城市教育委員会　2003）に従った。

3　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

4　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平４年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915年）７月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10Ｃ頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

# 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高 40 ～ 70 mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高 5 ～ 6 mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40 を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

以下、今年度に実施した発掘調査のうち、主な遺跡の概略について述べる。

新田遺跡は、標高 5 ～ 6 mの微高地に立地し、その範囲は東西約 0.8km、南北約 1.6kmの広さを有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では 12 世紀後半から 16 世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は、標高 3 ～ 4 mの微高地に立地し、その範囲は東西約 2km、南北約 1kmの広さを有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ 1 町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

市川橋遺跡は、標高 2 ～ 3 mの沖積地に立地し、その範囲は東西約 1.4km、南北約 1.6kmの広さを有する。多賀城跡南面に広く占地し、山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約 1.3km、南北約 1kmの広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約 80 軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

西沢遺跡は、低丘陵の緩斜面に立地し、その範囲は東西約 450 m、南北約 700 mの広さを有する。これまでの調査では、縄文時代と古代～近世にかけての遺構・遺物が多数発見されている。とりわけ平安時代に入ると、鍛冶工房を含む竪穴住居跡や掘立柱建物跡が整備されるようになる。

大日南遺跡は、標高 3 mほどの沖積地に立地している。これまでの調査では、15・16 世紀を中心とする武士の屋敷跡が発見されており、新田遺跡と同様に留守氏との関連が示唆される。

大代貝塚（橋本囲貝塚）は、丘陵南斜面から前面の砂丘にかけて立地している。本貝塚は大正 8 年に発見され、東北大学の長谷部言人によって調査が行われた学史に残る遺跡である。縄文時代晩期の土器（製塩土器を含む）のほか、骨角器、自然遺物（カキ、ハマグリ、アサリ等）が出土している。

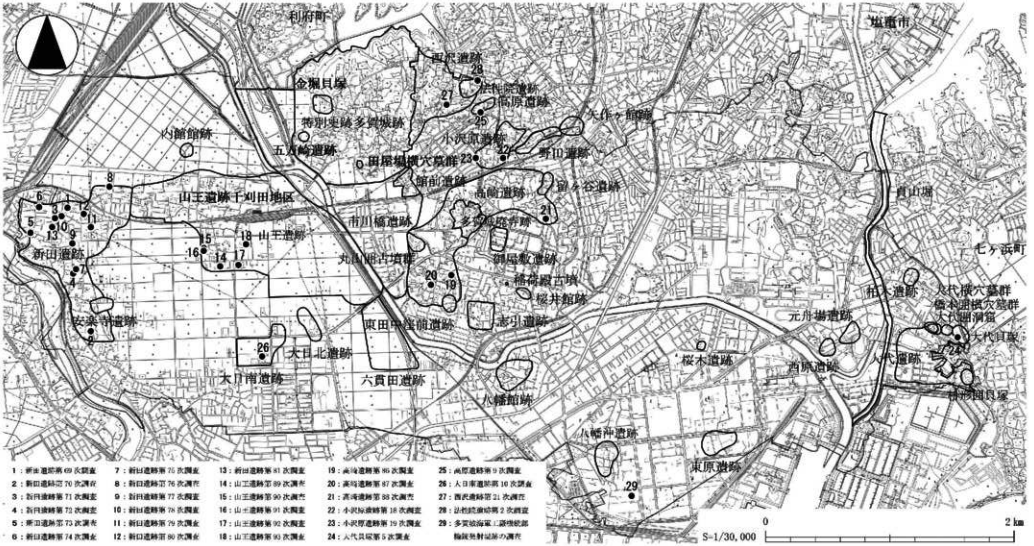
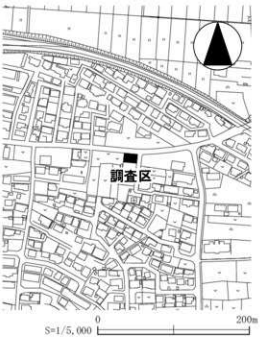

利府町
塩竈市
西沢遺跡
金堀貝塚
松作院遺跡
高原遺跡
特別史跡多賀城跡
大作ヶ館跡
内館館跡
五万崎遺跡
小沢原遺跡
野田遺跡
田屋場横穴墓群
館前遺跡
高崎遺跡
留ヶ谷遺跡
貞山堀
山王遺跡千刈田地区
市川橋遺跡
多賀城廃寺跡
山王遺跡
新田遺跡
丸田原古墳群
御屋敷遺跡
七ヶ浜町
稲荷殿古墳
桜井館跡
柏木遺跡
大代横穴墓群
橋本浦横穴墓群
大代洞窟
安楽寺遺跡
東田中窪前遺跡
志引遺跡
元舟場遺跡
大代貝塚
大日北遺跡
桜木遺跡
大代遺跡
大日南遺跡
六貫田遺跡
西原遺跡
八幡館跡
八幡沖遺跡
東原遺跡
1：新田遺跡第69次調査
2：新田遺跡第70次調査
3：新田遺跡第71次調査
4：新田遺跡第72次調査
5：新田遺跡第73次調査
6：新田遺跡第74次調査
7：新田遺跡第75次調査
8：新田遺跡第76次調査
9：新田遺跡第77次調査
10：新田遺跡第78次調査
11：新田遺跡第79次調査
12：新田遺跡第80次調査
13：新田遺跡第81次調査
14：山王遺跡第89次調査
15：山王遺跡第90次調査
16：山王遺跡第91次調査
17：山王遺跡第92次調査
18：山王遺跡第93次調査
19：高崎遺跡第86次調査
20：高崎遺跡第87次調査
21：高崎遺跡第88次調査
22：小沢原遺跡第18次調査
23：小沢原遺跡第19次調査
24：大代貝塚第5次調査
25：高原遺跡第9次調査
26：大日南遺跡第10次調査
27：西沢遺跡第21次調査
28：法性院遺跡第2次調査
29：多賀城海軍工廠機能部
極限熱射線源の調査
0
2 km
S=1/30,000

図1　調査地位置図

# 新田遺跡第 69 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成 22 年 11 月 17 日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財の係りについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径 60cm、長さ 4.75 mの杭を 34 本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、4 月 29 日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。なお、今回の調査は、3 月 11 日の東日本大震災の影響で調査を行うことが困難であったことから、宮城県教育委員会に協力を依頼し、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。



第 1 図　調査区位置図

調査は 5 月 9 日より開始した。最初に重機により表土（Ⅰ層）を除去し、その後、Ⅱ～Ⅳ層を各層の上面で遺構検出作業・写真撮影を行いながら人力で掘り下げた。Ⅳ層を除去した後、Ⅴ層面で 2 条の溝跡が検出されたが、この時点で地表面から約 1 mの深さになっていたことから、東西壁付近と調査区中央に南北方向のトレンチを設定し、溝跡の規模と遺物の出土状況の確認を行うこととした。その結果、溝跡の深さが 1 m程度あること、遺物はわずかで、出土層も上層にほぼ限られることが判明した。そのため、安全上の問題もあり、溝跡の全掘を回避し、上層のみ掘り下げて遺物の回収を行うとともに、調査区内で部分的に検出された地山での古代の遺構確認作業を行うこととした。その結果、遺構が認められなかったことから、18･19 日に写真撮影、平面図と断面図の作成を行い、20 日に器材撤収、21 日に重機により埋め戻しを行って、現地調査の一切を終了した。

## 2　調査成果

### (1) 層序

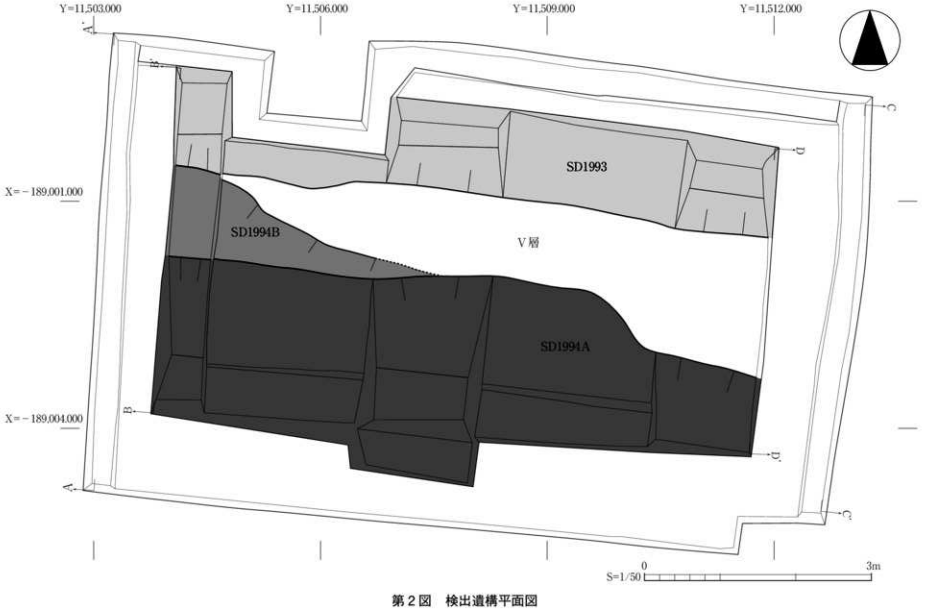
Ⅰ1 層：宅地造成時の盛土で、厚さは 26 ～ 52cm である。

Ⅰ2 層：造成前の耕作土で、厚さは 4 ～ 20cm である。

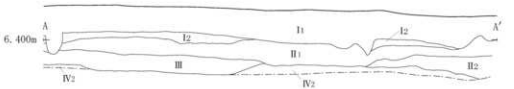
Ⅱ　層：にぶい黄褐色土で、厚さは 10 ～ 20cm である。西壁ではさらに 2 層に細分した。近世以降の陶器・土製品が出土した。

Ⅲ　層：にぶい黄褐色土で、厚さは 10 ～ 38cm である。中世の無釉陶器が出土した。

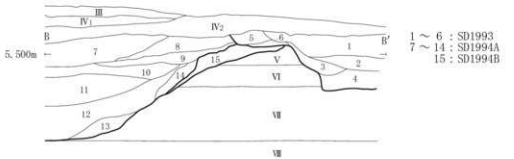
Ⅳ　層：暗灰黄色土で、厚さは 12 ～ 38cm である。西壁ではさらに 2 層に細分した。中世の無釉陶器が出土した。


Y=11,503.000
Y=11,506.000
Y=11,509.000
Y=11,512.000
X=－189,001.000
X=－189,004.000
A
B
C
D
SD1993
SD1994B
V層
SD1994A
0
3m
S=1/50

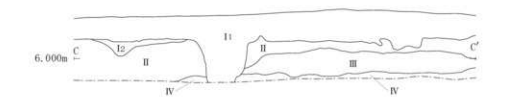
第２図　検出遺構平面図



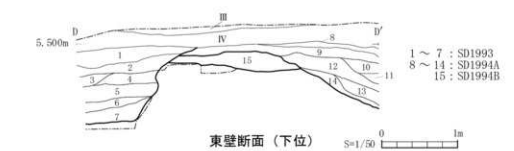

西壁断面（上位）




西壁断面（下位）




東壁断面（上位）




東壁断面（下位）

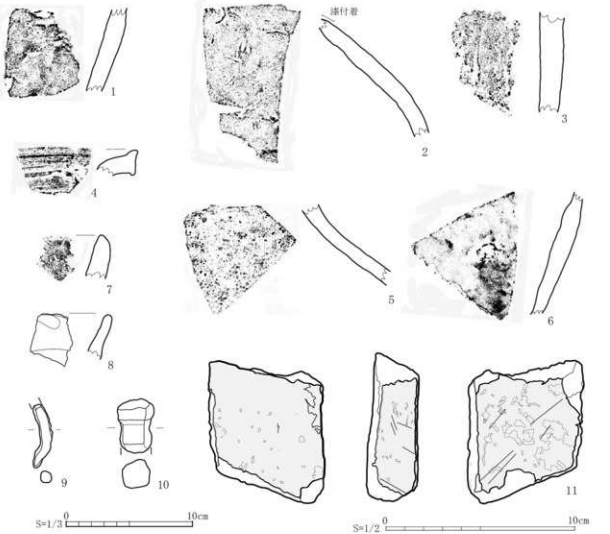
**第３図　調査区東・西壁断面図**

Ⅴ層～Ⅷ層：Ⅴ層以下が本周辺地域の基盤となる土層である。にぶい黄色土、にぶい黄色細砂、灰色粗砂、緑灰色粘質土の順にほぼ水平に堆積している。Ⅴ層上面が中世の遺構検出面である。

### (2) 発見遺構と遺物

#### ＳＤ 1993 溝跡

調査区北半で発見した東西方向の溝跡で、南半部分を検出した。ＳＤ 1994 溝跡と重複しており、それよ




単位（cm）

| 番号 | 種類 | 遺構層位 | 特徴 外面 | 特徴 内面 | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真図版 | 登録番号 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 無釉陶器 壺 | 基層 | ナデ | ナデ | — | — | — | 1 | R1 | 地元窯産 |
| 2 | 無釉陶器 壺 | 基層 | ナデ | ナデ | — | — | — | 2 | R2 | 地元窯産 |
| 3 | 平瓦 | SD1993 埋土 | 不明 | ナデ | — | — | — | 3 | R3 | 二次加熱　中世ヵ |
| 4 | 無釉陶器 壺 | SD1994B 埋土 | ヨコナデ | ヨコナデ | — | — | — | 4 | R4 | 常滑5型式に類似 |
| 5 | 無釉陶器 壺 | SD1994B 埋土 | 自然釉 | ナデ | — | — | — | 7 | R6 | 東海地方産 |
| 6 | 無釉陶器 壺 | SD1994B 埋土 | 自然釉 | ヨコナデ | — | — | — | 8 | R5 | 東海地方産 |
| 7 | 無釉陶器 すり鉢 | SD1994B 埋土 | ヨコナデ | ヨコナデ | — | — | — | 5 | R8 | 地元窯産 |
| 8 | 無釉陶器 すり鉢 | SD1994B 埋土 | ヨコナデ | ヨコナデ | — | — | — | 6 | R9 | 東海地方産 |
| 9 | 鉄製品 釘 | SD1993 西堺5層 | 長さ：(5.1)、厚さ：0.9 | | | | | | R1 | |
| 10 | 鉄製品 釘 | SD1993 西堺5層 | 長さ：(4.3)、厚さ：2.2 | | | | | | R2 | |
| 11 | 石製品 硯石 | SD1994A 埋土 | 長さ：(6.9)、幅 5.8、厚さ：2.5 | | | | | 9 | R7 | |

**第4図　出土遺物**

り新しい。方向は東で約6度南に偏しており、規模は長さ7.9m以上、上幅1.6m以上、下幅0.7m以上である。深さは調査区中央から東側が1.0mであるが、調査区西端では0.8mとやや浅くなる。底面は平坦で、壁は下位付近に段が認められ、緩やかに立ち上がる。埋土は7層（東壁断面）に分けられ、1～5層が灰オリーブ色細砂～砂が主体、6～7層が灰オリーブ色砂質土～粘土が主体となる。いずれも自然堆積である。

遺物は、土師器、須恵器、平瓦の小片及び鉄製品（釘）が出土した。

**SD 1994 A・B溝跡**

調査区南半で発見した東西方向の溝跡で、東壁付近で南西方向に屈曲する。北側部分を検出した。SD 1993溝跡と重複し、それより古い。2時期の変遷（A→B）を確認した。

**A期**：北壁の一部を確認したのみで全体の規模や方向は不明である。埋土は1層確認され、黄褐色砂質土と灰黄色砂の互層である。

遺物は、砥石が出土した。

**B期**：方向は東で約12度南に偏しており、規模は長さ7.9m以上、上幅2.5m以上、下幅0.6m以上、深さ1.4mである。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は8層（西壁断面）に分けられ、1～3層がにぶい黄橙色土～黄褐色砂質土、4～8層が灰色粘質土～灰オリーブ粘土が主体となる。いずれも自然堆積である。

遺物は、無釉陶器甕・片口鉢・すり鉢の他、古代の土師器、須恵器の小片が出土した。

**その他の出土遺物**

Ⅱ層から近世以降の陶器、土製品（堤人形）、金属製品、Ⅲ・Ⅳ層から無釉陶器甕、古代の土師器、須恵器が出土した。

## 3　まとめ

(1)　Ⅲ・Ⅳ層及びその下層で発見されたSD 1994溝跡からは、いずれも中世期の遺物が出土しており、おおむねこの時期に堆積し機能していたと考えられる。

(2)　Ⅲ・Ⅳ層は本調査区東側に位置する寿福寺地区で検出されている14世紀後半に堆積したとされている「第Ⅲ層」に相当する。

(3)　今回発見した2条の溝跡は、Ⅲ・Ⅳ層に覆われⅤ層上面で検出されたことから、12～14世紀ごろの時期と推定される。

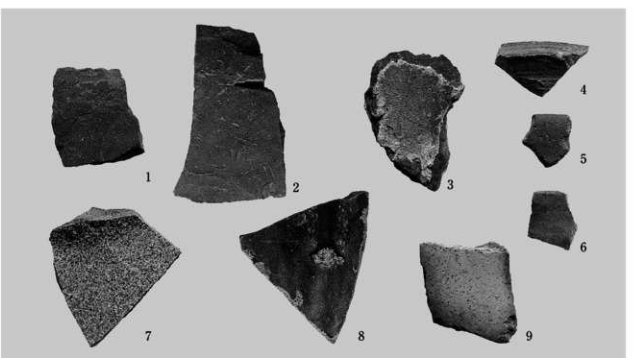
(4)　これらの溝の性格については、方向やその規模からみて寿福寺地区で発見されている溝で区画する武士の屋敷跡との関連で考えておきたい。

SD1993 溝跡検出状況（東より）

SD1993・1994 溝跡検出状況（東より）

SD1993 溝跡土層断面（南東より）

SD1994 溝跡土層断面（北東より）




出土遺物写真図版

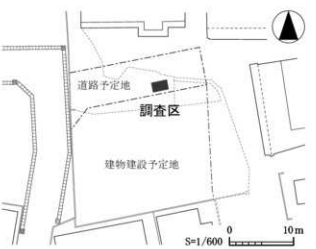
# 新田遺跡第 70 次調査

## 1　調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、新田字北関合地内における宅地造成に伴う道路建設工事を調査原因とする。平成 23 年 1 月 25 日に申請者より新田遺跡の南端部における道路建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、幅 6 m、長さ約 22 mの東西方向の道路を、開発予定地の北端に新設するというものである。このため、当該地での遺構の有無と旧地形の状況の把握を目的とした確認調査が必要であることを申請者に対し回答した。これについて、申請者から協力が得られたことから、5 月 7 日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、5 月 10 日に現地調査を実施した。なお、当該地の西側隣接地で平成 21 年に確認調査を実施した際には、粘質土層、砂質土層、砂層が厚く堆積することが確認され、遺構・遺物は発見されなかった。

第 1 図　調査区位置図

調査は、1.5 m × 2.5 mの大きさの調査区を設定して、重機により約 1.5 mの深さまで掘り下げた。その結果、遺構・遺物は発見されなかった。また、当該地には厚さ約 50㎝の盛土がなされ、その下層において、順に厚さ約 15㎝の青灰色砂質土層、厚さ約 60㎝の暗灰黄色砂質土層、厚さ約 25㎝の黄灰色粘質土層、厚さ 10㎝以上の暗灰黄色粘質土層が堆積していることが確認された。




第 2 図　調査区位置図

土層堆積状況（南より）

# 新田遺跡第 71 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、新田字後地内における個人住宅建設に伴うものである。平成 23 年 1 月 15 日に地権者より新田遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事の際に直径 600㎜、長さ 7.5 ｍの杭を 30 本打ちこむことから、地下の遺構への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が図れないか協議を行ったが、対象地の現況や地盤の強度等から考慮して、現計画での実施が最も望ましいとの理由により、記録保存のための本発掘調査を実施することに至った。その後、平成 23 年 2 月 16 日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、6 月 2 日から現地調査を開始した。

第 1 図　調査区位置図

はじめに、重機により盛土（Ⅰ層）及び旧耕作土等（Ⅱ・Ⅲ層）の除去を行い、掘削した土砂は場外へ搬出した。引き続き、現地表面から約 1.2 ｍ掘り下げた段階の黄灰色土層（Ⅳ層）上面で遺構検出作業を行った。その結果、東西方向に延びる比較的規模の大きな溝跡（ＳＤ 2022 溝跡）を検出した(6 月 4 日)。この溝跡の埋土掘り下げを開始し、並行して調査区東壁で土層堆積状況を精査したところ、これに切られる 2 条の溝跡（ＳＤ 2023･2024 溝跡）の存在を確認した。このうち、古い時期のＳＤ 2024 溝跡は、Ⅳ層より約 30㎝下層の灰色土層（Ⅶ層）上面から掘り込まれ、埋土中に灰白色火山灰を含むことを確認した。6 月 8 日には、ＳＤ 2022 溝跡の埋土掘り下げを終了し、平板測量による平面図作成を行った。なお、測量については、調査対象地内に 2 本の基準杭を任意に設置し、その後に国土座標値と標高値をこれに与えるという方法をとった。続いて、ＳＤ 2022 溝跡と同位置、同方向で重複するＳＤ 2023 溝跡の埋土掘り下げを行った。この終了後、Ⅳ～Ⅵ層を除去し、ＳＤ 2024 溝跡の平面プランを確認したところ、ＳＤ 2022・2023 溝跡と同様に東西方向に延びる溝跡であることがわかった。また、同時に行った調査区南半部のⅦ層上面での遺構検出作業の結果、南北方向に並行して延びる 4 条の小溝跡を検出し、ＳＸ 2025 小溝群とした（6 月 11 日）。その後、新たに検出した各溝跡の埋土掘り下げを行い、終了順に写真撮影、実測図作成等の一連の作業を行った（6 月 14 日）。そして、6 月 15 日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

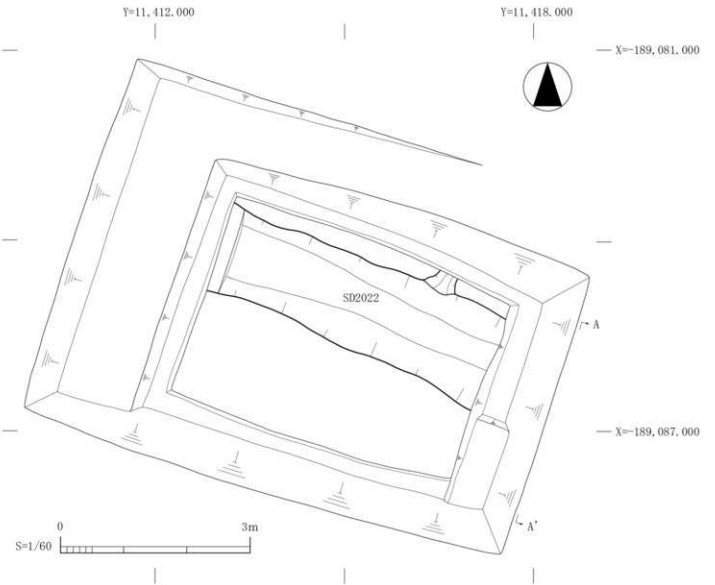
Ⅰ　層：現代の盛土で、4層に分けられる。最上層は灰オリーブ砂、他の3層は黄灰色土で、混入土の違いによって識別した。全体の厚さは、約80cmである。

Ⅱ　層：現代の耕作土。黄褐色土で、厚さは15～20cmである。

Ⅲ　層：暗灰黄色土で、厚さは10～20cmである。

Ⅳ　層：黄灰色土で、厚さは15～25cmである。暗灰黄色土を斑状及びブロック状に含んでいる。上面は、ＳＤ2022溝跡の検出面である。

Ⅴ　層：黒褐色土で、厚さは5～15cmである。調査区南半部に分布する。暗灰黄色土を斑状に含んでいる。




第２図　上層遺構平面図

Ⅵ　層：灰色土で、厚さは約 10cmである。調査区南端付近に限定的に分布する。灰白色火山灰を斑状に若干含んでいる。

Ⅶ　層：灰色土で、厚さは 40 ～ 60cmである。オリーブ灰色土を斑状及びブロック状に含んでいる。上面は、ＳＤ 2024 溝跡の検出面である。

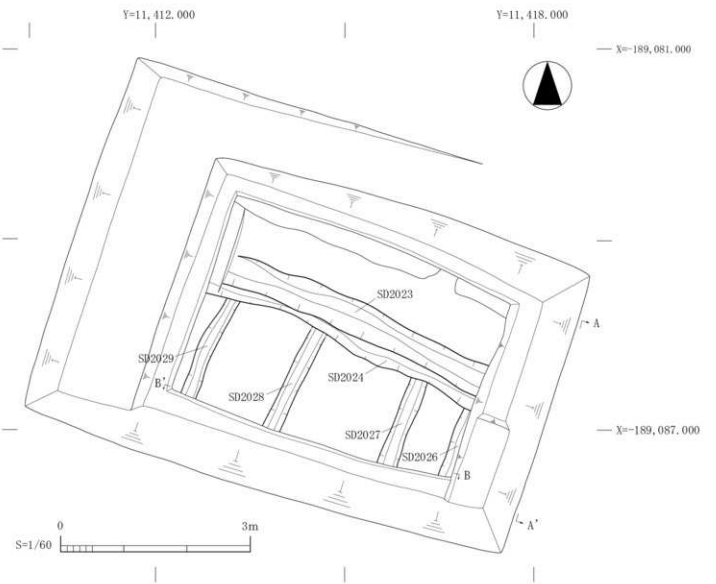
Ⅷ　層：黄灰色粘質土で、厚さは 10 ～ 15cmである。オリーブ黄色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。また、植物遺存体を若干含んでいる。

Ⅸ　層：オリーブ黒色粘質土で、厚さは 10cm以上である。

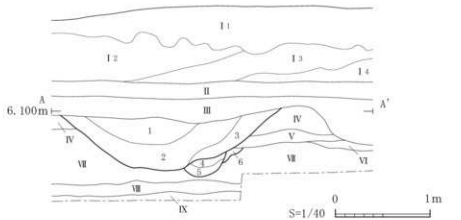
### (2) 発見遺構と遺物

**ＳＤ 2022 溝跡**（第２・４図）

Ⅳ層上面で検出した東西方向の溝跡である。ＳＤ 2023・2024 溝跡と重複し、これらより新しい。確認で




**第３図　下層遺構平面図**




**土層観察表**

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| SD 2022 埋土 | | |
| 1 | 黄灰色土 | ややグライ化。 |
| 2 | 黄灰色土 | オリーブ灰色砂質土を斑状及び小ブロック状に若干含む。 |
| 3 | 黄灰色土 | 黒褐色土とオリーブ灰色砂質土を斑状及び小ブロック状に含む。 |

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| SD 2023 埋土 | | |
| 4 | 灰色砂質土 | 黒褐色土を斑状に若干含む。 |
| 5 | 灰色粘質土 | 黒褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。 |
| SD 2024 埋土 | | |
| 6 | 灰色土 | 灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含む。 |

**第４図　調査区東壁断面図**

きた長さは約 5.5 mである。方向は、東で約 22 度南に偏している。規模は、上幅 125 ～ 152cm、下幅 42 ～ 84cmを測る。深さは、調査区東壁でみると 52cmである。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。また、北辺において、平面プランが外側へ張り出す箇所が認められるが、調査区北壁の断面観察でも深さ約 10cmの落ちが確認できることから、小規模な溝がここに取り付くものと考えられる。埋土は３層に分けられる。いずれも黄灰土で、２層と３層には黒褐色土やオリーブ灰色砂質土が斑状及び小ブロック状に含まれる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器甕、須恵系土器杯、平瓦が出土しているが、すべて破片である。

**ＳＤ 2023 溝跡**（第３・４図）

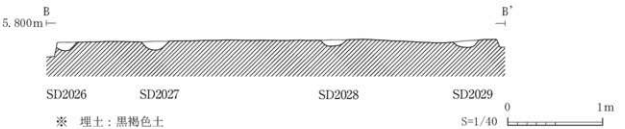
ＳＤ 2022 溝跡とほぼ同位置、同方向で重複するもので、これより古い。上部がＳＤ 2022 溝跡によって壊されているため、検出面は不明である。確認できた長さは約 5.5 mである。方向は、東で約 24 度南に偏している。規模は、下幅 14 ～ 24cmで、深さは調査区東壁でみると 26cm以上である。底面は丸みをもち、壁は湾曲しながら比較的急に立ち上がる。埋土は２層に分けられる。上層が灰色砂質土、下層が灰色粘質土で、いずれも黒褐色土が斑状及び小ブロック状に含まれる。遺物は、出土していない。

**ＳＤ 2024 溝跡**（第３・４図）

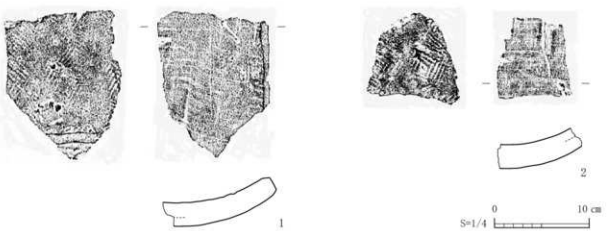
Ⅶ層上面で検出した東西方向の溝跡である。ＳＤ 2022・2023 溝跡と重複し、これらより古い。確認できた長さは約 5.5 mである。やや蛇行しながら延びるため、方向を東半部でみると、東で約 24 度南に偏している。規模と深さは、後続する溝跡に大きく壊されているため不明である。残存する南壁は、緩やかに立ち上がる。観察できる埋土は、灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含む灰色土である。遺物は、出土していない。

**ＳＸ 2025 小溝跡**（第３・５図）

調査区南半部のⅦ層上面で検出した、南北方向に並行して延びる小溝跡のまとまりである。ＳＤ 2024 溝跡と重複し、これより古い。調査区内では、４条（東側から順にＳＤ 2026 ～ 2029 溝跡）の小溝跡を確認した。確認できた長さは、1.48 ～ 2.05 ｍである。方向は、北で 21 度、21 度、26 度、24 度それぞれ東に偏している。規模は上幅 20 ～ 32㎝、下幅８～ 16㎝、深さは５～ 10㎝の数値内にすべて収まる。いずれも、底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、ＳＤ 2026 溝跡から土師器甕の小破片が出土している。




**第５図　ＳＸ 2025 小溝群断面図**




| 番号 | 種　類 | 出土層位 | 特　徴 | | 法量 | 多賀城政庁分類 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 凸　面 | 凹　面 | | | |
| 1 | 軒平瓦 | Ⅰ層 | 矢羽根状叩き | 布目 | — | 平瓦Ⅰ C 類 | 顎面がわずかに残存　２条の直線文あり<br>凹面にヘラ書き |
| 2 | 軒平瓦 | Ⅳ層 | 矢羽根状叩き | 布目 | — | 平瓦Ⅰ C 類 | １と同一個体 |

**第６図　出土遺物**

## 3　まとめ

今回の調査で発見した遺構は、溝跡３条と小溝群である。これらの年代についてみると、重複関係から一番古い時期にあたるＳＸ 2025 小溝群からは、ロクロ調整の土師器が出土している。このことから、上限年代はこれらが普及し始めた８世紀後葉と捉えることができる。性格は、周辺部で発見されている同様の遺構から、耕作に関わるものと考えられる。次に、ＳＤ 2024 溝跡は埋土上部に灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含むことから、10 世紀前葉を中心とした時期が与えられる。これを切るＳＤ 2023 溝跡については、検出面は不明であるが、調査区東壁の断面観察から、ＳＤ 2024 溝跡と同様にⅦ層上面から掘り込まれている可能性が強い。よって、古代の範疇に位置付けられると推定される。最後に、一番新しい時期のＳＤ 2022 溝跡は、Ⅶ層より約 20㎝上のⅣ層上面から掘り込まれているものである。出土遺物はすべて古代のものであるが、その形態や規模等から、周辺部で数多く発見されている中世の屋敷に伴う区画溝と同様のものと考えられる。ただし、詳細な時期については、不明といわざるを得ない。

**ＳＤ 2022 溝跡検出状況**
（西より）

**ＳＤ 2022 溝跡掘り下げ状況**
（西より）

**ＳＤ 2023 溝跡掘り下げ状況**
（東より）

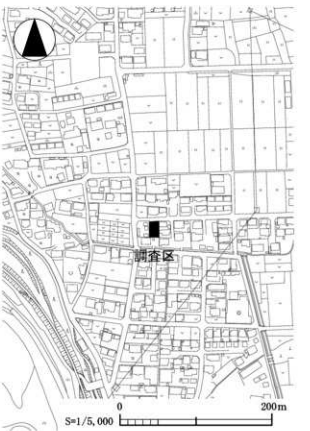
**ＳＤ 2024 溝跡・ＳＸ 2025 小溝群**
**掘り下げ状況**（西より）

**調査区東壁土層堆積状況**
（西より）

# 新田遺跡第 72 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、新田字北地内における個人住宅建設に伴うものである。平成 23 年 6 月 7 日に地権者より新田遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事の際に直径 400㎜、長さ 8.25 ｍの杭を 27 本打ちこむことから、地下の遺構への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が図れないか協議を行ったが、対象地の現況や地盤の強度等から考慮して、現計画での実施が最も望ましいとの理由により、記録保存のための本発掘調査を実施することに至った。その後、平成 23 年 6 月 23 日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、6 月 30 日から現地調査を開始した。



第 1 図　調査区位置図

はじめに、重機により盛土（Ⅰ層）及び堆積土（Ⅱ～Ⅳ層）の除去を行い、掘削した土砂は場外へ搬出した。引き続き、現地表面から約 1.6 ｍ掘り下げた段階のⅤ層及びⅥ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、調査区東半部から南半部にかけて鉤状に曲がる大規模な溝跡を検出した（ＳＤ 2030 溝跡）。この溝跡については、調査区西壁で土層堆積状況を精査したところ、Ⅲ層上面から掘り込まれていることがわかり、さらにⅢ層中から近代以降の遺物が出土したことから、これと同時代のものと判断した。7 月 6 日からは、調査区南西部でＳＤ 2030 溝跡の一部掘り下げを行った。並行して、その北側で遺構検出作業を行ったところ、南北方向の溝跡（ＳＤ 2031 溝跡）と、これに切られる東西方向の溝跡（ＳＤ 2032 溝跡）を検出した。これらは、いずれも規模が大きく、特に後者は北辺が調査区外にかかるが、調査区内だけでも幅約 2.5 ｍを測るものであった。これらの検出状況を写真撮影した後、7 月 8 日からＳＤ 2031 溝跡の埋土掘り下げを開始した。また、実測図作成にかかる測量を行い、対象地内に任意に設置した 2 本の基準杭に、国土座標値と標高値を移動した。次に、これを基に調査区内に平面図作成のための基準点を 3 ｍ方眼で設置した。7 月 15 日にＳＤ 2031 溝跡の調査を終了し、引き続きＳＤ 2032 溝跡の埋土掘り下げを行った。その後、ＳＤ 2032 溝跡については 2 時期の変遷があることを確認し、7 月 23 日の実測図作成をもって一連の作業を終了した。そして、7 月 26 日に重機による埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

Ⅰ　層：現代の盛土で、2層に分けられる。上層がにぶい黄色砂、下層が灰オリーブ色砂である。全体の厚さは0.9～1.4mである。

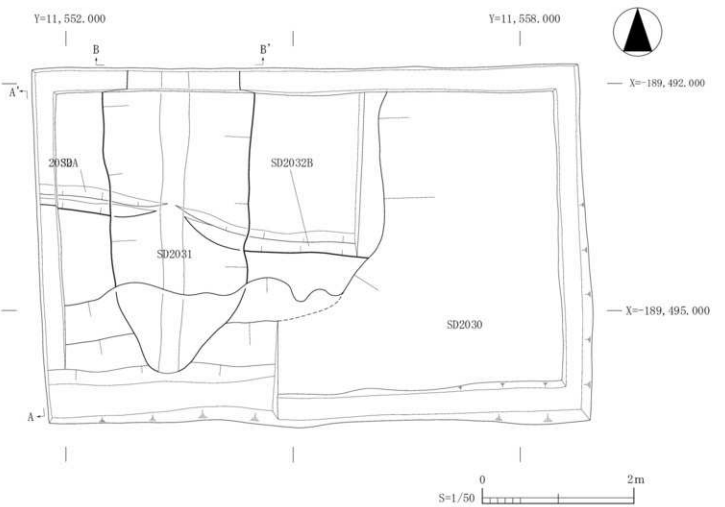
Ⅱ　層：灰オリーブ土で、厚さは15～25cmである。オリーブ黒色土と灰色土が混入している。

Ⅲ　層：暗灰黄色土で、厚さは10～25cmである。近代以降の遺物を含んでいる。上面は、SD2030溝跡の検出面である。

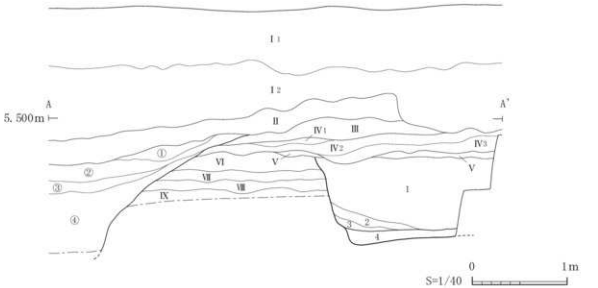
Ⅳ1層：黄灰色土で、厚さは5cm前後である。調査区西側に限定的に分布する。黄褐色土を斑状に含んでいる。

Ⅳ2層：黄灰色土で、厚さは5～15cmである。調査区のほぼ全域に分布するが、北側に向かうにしたがって薄くなり、北端部近くで途切れる。黄褐色土と黒褐色土を斑状及び小ブロック状に多く含んでいる。

Ⅳ3層：黄灰色土で、厚さは5～15cmである。調査区北側に分布する。黄褐色土と黒褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。




第2図　調査区平面図




**土層観察表**

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 | 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| S D 2030 埋土 | | | S D 2032 埋土 | | |
| ① | 灰色土 | | 1 | 黄褐色砂 | 灰色粘質土と黒色粘土を斑状及びブロック状に多く含む。B期埋土。 |
| ② | 黄灰色砂 | | 2 | 緑灰色砂 | 灰色粘質土と黒色粘土を斑状及び小ブロック状に含む。B期埋土。 |
| ③ | 灰オリーブ砂 | | 3 | オリーブ黒色粘質土 | 粘性あり。　B期埋土。 |
| ④ | オリーブ黒色粘質土 | 植物遺存体を含む。 | 4 | 緑灰色砂 | 黒色粘土を混入。　A期埋土。 |

**第３図　調査区西壁断面図**

Ⅴ　層：暗灰黄色砂で、厚さは5cm前後と薄い。調査区南西部に限定的に分布する。上面は、ＳＤ2031溝跡の検出面である。

Ⅵ　層：黄褐色砂で、厚さは15～20cmである。上面は、ＳＤ2032溝跡の検出面である。

Ⅶ　層：灰色粘質土で、厚さは10cm前後である。黄褐色砂を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。

Ⅷ　層：黒色粘土で、厚さは10cm前後である。黄褐色砂と灰色粘質土が混入している。

Ⅸ　層：青黒粘質土で、厚さは15cm以上である。暗緑灰色砂を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。

### (2) 発見遺構と遺物

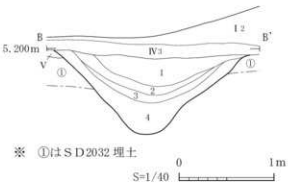
**ＳＤ2030溝跡**（第２・３図）

調査区の東半部から南半部にかけて鉤状に巡る大規模な溝跡で、Ⅲ層上面で検出した。かなりの部分が調査区外にかかると推定され、具体的な平面の形状は不明である。規模は上幅2.65ｍ以上、深さは1.25ｍ以上である。壁はやや下方で段を有し、その上部は緩やかに立ち上がる。埋土は４層に分けられ、最下層には植物遺存体が含まれる。遺物は、須恵器甕の破片が１点出土しているだけである。

**ＳＤ2031溝跡**（第２・４図）

調査区西側のⅤ層上面で検出した南北方向の溝跡である。重複関係から、ＳＤ2030溝跡より古く、ＳＤ2032溝跡より新しい。確認できた長さは、3.95ｍである。方向は、北で約１度東に偏している。規模は、

上幅 1.78 ～ 2.00 m、下幅 0.25 ～ 0.39 m を測る。深さは、調査区北壁でみると 0.88 m である。断面は、いわゆる「薬研堀」の形状を呈する。埋土は 4 層に分けられ、その状況から自然堆積と考えられる。3 層と 4 層には、植物遺存体が含まれる。遺物は、出土していない。




**土層観察表**

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| 1 | 明灰黄色砂 | 酸化鉄を微量に含む。 |
| 2 | 灰オリーブ 砂質土 | 灰色粘質土を万層に堆積。 |
| 3 | 黒褐色粘質土 | 植物遺存体を含む。 |
| 4 | オリーブ 黒色粘質土 | しまりはやや弱い。植物遺存体を若干含む。 |

**第 4 図　SD2031 溝跡断面図**

**ＳＤ 2032 溝跡**（第 2・3 図）

調査区北側の Ⅵ層上面で検出した東西方向の溝跡である。北側が調査区外にかかるため、全体の規模等は不明である。ＳＤ 2030・2031 溝跡と重複し、これらより古い。2 時期（A期→B期）の変遷を確認した。B期でみると、確認できた長さは 4.55 m、方向は東で約 6 度南に偏している。

A期は、後続するB期が南壁を拡幅したと推測されるため、底面付近が残存しているに過ぎない。壁の立ち上がり位置は、B期に対し約 10cm内側に寄っている。また、底面は 8 ～ 15cm低くなっている。埋土は、黒色粘土を混入した緑灰色砂である。

B期は、規模が上幅 2.48 m以上で、深さは調査区北壁でみると 0.77 m である。断面は、いわゆる「箱堀」の形状を呈する。埋土は 3 層に分けられるが、2 層と 3 層は底面近くにわずかに堆積するだけで、埋土の大部分は 1 層が占める。その状況から人為的な埋め戻しと考えられる。遺物は、1 層中から土師器甕の破片が 1 点出土しているだけである。

| 番号 | 種　類 | 遺　構 | 出土層位 | 特　徴 | | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 外　面 | 内　面 | | | | |
| 1 | 無釉陶器・甕 | — | Ⅴ層 | ナデ | ナデ | — | — | — | |

**第 5 図　出土遺物**

## 3　まとめ

今回の調査で発見された遺構は、溝跡３条である。そのうち、ＳＤ 2030 溝跡については、検出面である Ⅲ層中から転写技法を用いた染付の磁器が出土していることから、近代以降のものと考えられる。次に、ＳＤ 2031 溝跡はⅤ層上面から掘り込まれ、またＳＤ 2032 溝跡はⅤ層に覆われ、Ⅵ層上面から掘り込まれているものである。Ⅴ層中から中世の無釉陶器甕（第５図１）が出土していることや、形態や規模等が本遺跡内で数多く発見されている中世の区画溝と類似することから、両溝跡は中世のものと考えられる。しかし、いずれも中世の遺物が出土していないため、詳細な時期については言及できない。

**遺構検出状況**
（西より）

**ＳＤ 2031 溝跡掘り下げ状況**
（南より）

**ＳＤ 2031 溝跡土層堆積状況**
（南より）

**ＳＤ 2032 溝跡掘り下げ状況**
（東より）

**ＳＤ 2032 溝跡掘り下げ状況**
（南より）

# 新田遺跡第 73 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、専用住宅新築に伴う発掘調査である。平成22年3月9日に地権者より当該地区における専用住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では住宅基礎工事の際に最深 70cm の掘削を行うことが示されており、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、事前に遺構検出面の深さ及び分布状況を知る目的で確認調査を実施し、この成果に基づき本発掘調査に係る協議を行うこととなった。6月 28 日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

第 1 図　調査区位置図

調査は7月7日から開始した。調査区は建物建築予定地の4カ所と通路部分の2カ所に設定した。はじめに、重機を使用して表土（現代の畑耕作土）の除去を行った（～8日）。続いて3→6トレンチ、1→2トレンチの順に遺構検出作業を行い、いずれの調査区でも遺構が発見された。検出作業が終了したトレンチから随時、写真撮影、平面・断面図を作成し、必要に応じて一部の遺構については截ち割りを行った（～21 日）。22 日、補足調査、器材の撤収を行う。23 日には埋め戻しを行って現地調査を完了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。なお、4～6トレンチでは表土下が直ちに地山（基盤層・Ⅴ層）となっていた。

Ⅰ層：現代の畑耕作土層で、厚さは 15～40cm である。

Ⅱ層：暗褐色土で、厚さは5～15cm である。中世の遺構検出面。本層は新田遺跡内で確認される 14 世紀後半頃に堆積した土層に相当する。

Ⅲ層：1・2トレンチに分布する褐色砂質土で、厚さは5～10cm である。上面に灰白色火山灰粒がみられる。古代の遺構検出面。

Ⅳ層：1トレンチに分布するにぶい黄褐色土で、にぶい黄橙色土の小ブロックが混じる。1トレンチの北端から南に向かって厚く堆積する。厚さは南端で 36cm 以上である。古代の遺構検出面。

Ⅴ層：褐色砂質土で、厚さは 40cm 以上である。地山（基盤層）。古墳時代～古代の遺構検出面。

### (2) 発見遺構と遺物

**S D 1995 溝跡**

3・4・6トレンチのⅡ層もしくはⅤ層上面で発見した南北方向の溝跡である。S D 1997・2008 溝跡、S X 2006 と重複し、それらより新しい。2時期（A→B）の変遷があるが、A期は4トレンチのみで確認した。B期の規模は、長さ 30 m 以上、幅 2.2 ～ 2.6m である。埋土はA期が均質な褐色土、B期も均質な暗褐色土である。

遺物は、B期埋土より無釉陶器擂鉢（第6図1）が出土している。

**S D 1996 溝跡**

3・6トレンチのⅡ層もしくはⅤ層上面で発見した南北方向の溝跡である。2時期（A→B）の変遷があるが、A期は3トレンチのみで確認した。B期の規模は、長さ 28.5 m 以上、幅 1.6m 以上である。埋土はA期がⅤ層起源の褐色砂質土、B期は上層が均質な褐色土であるが、下層になると明褐灰色土の小ブロックを含む。

**S D 1997 溝跡**

3トレンチのⅡ層上面で発見した北東方向の溝跡である。ピットと重複し、それよりも古い。2時期（A→B）の変遷を確認した。幅はA期が0.5m以上、B期が1m、深さは30cm以上である。埋土はA期が褐色土で、B期が褐色土を斑状に含む暗褐色土である。

**S D 1998 溝跡**

2トレンチのⅢ層上面で発見した北東方向の溝跡である。2時期（A→B）の変遷を確認した。幅はA期が 0.7 ～ 1.1m、B 期が 1.1 ～ 1.5m、深さは 30cm以上である。埋土はA期が均質な暗褐色土で、B 期が褐色土を斑状に含む暗褐色土である。

**S D 1999 小溝群**

1トレンチのⅣ層上面で発見した東西・南北方向の小溝群である。4時期（A→D）の変遷を確認した。いずれも幅 20 ～ 40cmを測り、A・C期が南北、B・D期が東西方向である。埋土はⅣ層を起源としており、にぶい黄橙色土と褐灰色土が混じり合っている。

**S D 2000 溝跡**

1トレンチのⅣ層上面で発見した東西方向に蛇行する溝跡である。S D 1999 溝跡と重複し、それよりも新しい。幅は 40 ～ 80cmである。埋土はややしまりのない均質な褐灰色土である。

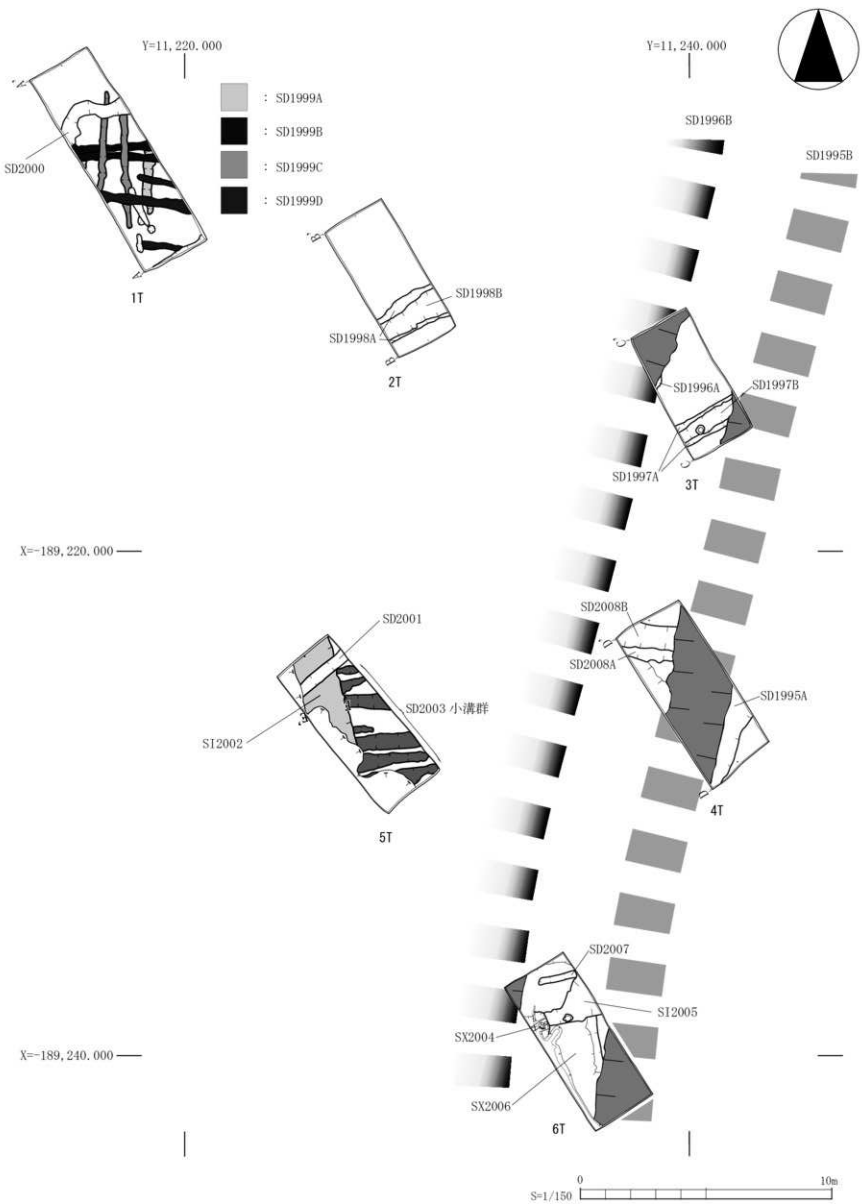
**S D 2001 溝跡**

5トレンチのⅤ層上面で発見した北東方向の溝跡である。S I 2002 竪穴住居跡と重複し、それよりも新しい。幅は 40 ～ 50cmである。埋土は暗褐色土ブロックと明褐色土を斑状に含む褐色土である。炭化物も含む。

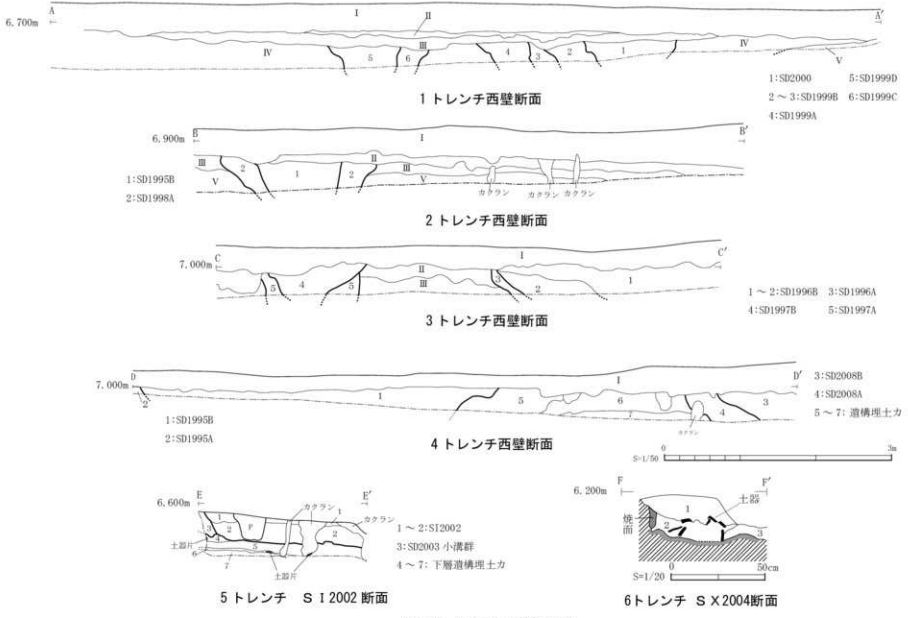
**S I 2002 竪穴住居跡**

5トレンチのⅤ層上面で発見した。重複関係からS D 2001 溝跡より古く、S D 2003 小溝群よりも新しい。規模は南北 4.5 m 以上、東西 1.6 m 以上、深さ 25cmである。床面はほぼ平坦で、壁はやや開きながら直線的に立ち上がる。埋土は2層に分けられ、1層がⅤ層起源の小ブロック・粒を含むにぶい黄橙色土、2層がⅤ層起源の小ブロック、炭化物粒を含むにぶい浅黄色土である。床面上には3 ～ 10mmの厚さで炭化物の堆積がみられた。

遺物は、土師器杯・高杯（第5図1 ～ 4）が出土している。


Y=11,220.000
Y=11,240.000
: SD1999A
: SD1999B
: SD1999C
: SD1999D
SD2000
1T
SD1998B
SD1998A
2T
SD1996B
SD1995B
SD1996A
SD1997B
SD1997A
3T
X=-189,220.000
SD2001
SD2003 小溝群
SI2002
5T
SD2008B
SD2008A
SD1995A
4T
SD2007
SI2005
SX2004
SX2006
6T
X=-189,240.000
0
10m
S=1/150

第２図　検出遺構全体図




第３図　各トレンチ他断面図

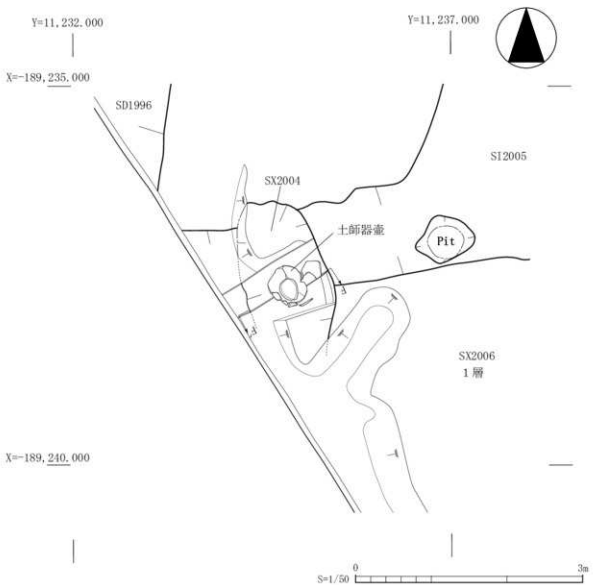
**ＳＤ 2003 小溝群**

５トレンチのＶ層上面で発見した東西方向の小溝群である。７条検出した。幅 20 ～ 30cmのものと 30 ～ 70cmのものとがある。埋土は共通しており、橙色土と暗褐色土の小ブロック、炭化物を含む褐色土である。

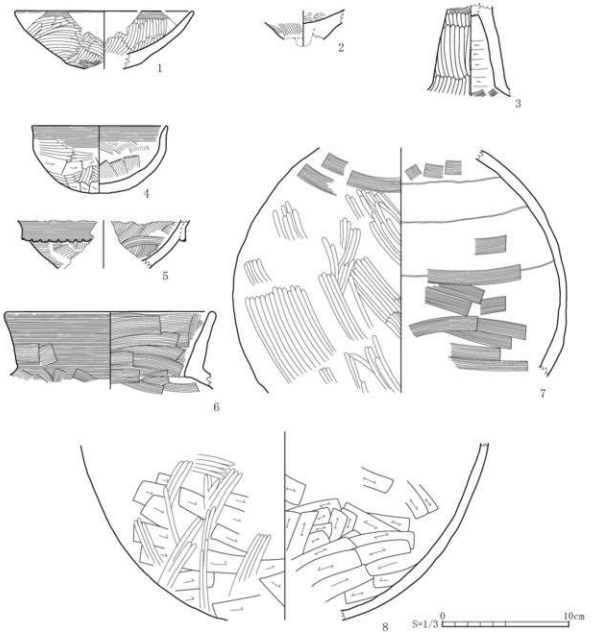
遺物は、北端の溝跡埋土（検出面）から黒曜石製の剝片（第６図４）が出土している。

**ＳＸ 2004**

６トレンチのＶ層上面で発見した遺構である。ＳＩ 2005 竪穴住居跡、ＳＸ 2006 と重複し、それらよりも新しい。平面形は南北に長い楕円形を呈していたと推定され、規模は長軸１ｍ以上、短軸 0.6 m、深さ 30cmである。底面は中央付近がやや窪み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面・壁面とも灰赤色に焼けている。埋土は３層に分けられ、１層が焼土・炭化物粒を含む均質な褐灰色土、２層が焼土粒を含む灰白色土、３層が焼土の小ブロックを含むにぶい黄橙色土である。１層を除去後、口縁部と体部下半を欠いた土師器壺（第５図７）が底面上より検出された。



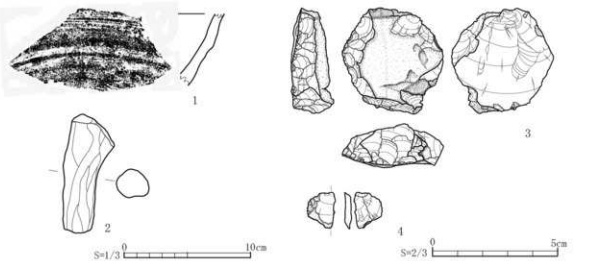

**第４図　６トレンチ ＳＸ 2004 平面図**




単位〔cm〕

| 番号 | 種類 | トレンチ<br>遺構・層位 | 特徴 | | 口径<br>残存率 | 底径<br>残存率 | 器高 | 写真<br>図版 | 登録<br>番号 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・高杯 | 5T<br>SI2002・床土 | 杯部：ヨコナデ→ヘラミガキ | 杯部：ヨコナデ→ヘラミガキ | (16.4)<br>1/24 | — | — | 3-1 | H7 | 塩屋式 |
| 2 | 土師器・高杯 | 5T<br>SI2002・床土 | 杯部：ナデ | 杯部：ヘラミガキ | — | — | — | | H8 | 南小泉式 |
| 3 | 土師器・高杯 | 5T<br>SI2002・床土 | 脚部：ヨコナデ→ヘラミガキ | 脚部：ヘラケズリ<br>脚部：ヘラナデ | — | — | — | 3-3 | H6 | 南小泉式 |
| 4 | 土師器・杯 | 5T<br>SI2002・床土 | L1縁部：ヨコナデ<br>体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ<br>底部：ヘラケズリ | L1縁部：ヨコナデ<br>体部：ヘラナデ | (10.6)<br>1/24 | 1.5<br>24/24 | 5.3 | | H3 | 南小泉式 |
| 5 | 土師器・壺 | 6T<br>1層 | L1面部：ヨコナデ、ヘラナデ | L1面部：ヘラナデ | — | — | — | 3-2 | H5 | 複合口縁、塩釜式<br>内・外面赤彩 |
| 6 | 土師器・甕 | 6T<br>SX2006・1層 | L1縁部：ヨコナデ、ヘラナデ | L1縁部：ヘラナデ | (16.2)<br>2/24 | — | — | | H4 | 南小泉式 |
| 7 | 土師器・甕 | 6T<br>SX2004・底面 | 体部：ヘラナデ、ヘラミガキ | 体部：ヘラナデ | — | — | — | 3-4 | H1 | 外面にススが付着物<br>南小泉式 |
| 8 | 土師器・甕 | 5T<br>SI2002・床土下層 | 体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ | 体部：ヘラケズリ | — | — | — | 3-5 | H2 | 南小泉式 |

**第５図　出土遺物（1）**




単位（cm）

| 番号 | 種類 | トレンチ<br>遺構・層位 | 特徴 外面 | 特徴 内面 | 口径<br>残存率 | 底径<br>残存率 | 器高 | 写真<br>図版 | 登録<br>番号 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 無釉陶器<br>すり鉢 | 6T<br>SD1995B | 体部：ナデ | 体部：ナデ、摩耗痕 | — | — | — | 3-7 | B12 | 東海地方産 |
| 2 | 足付土器<br>（脚部） | 6T<br>1層 | 外面：ナデ | | 長5：9cm以上、幅2～2.5cm | | | 3-8 | B11 | 土師質 |
| 3 | 石器<br>ラウンドスクレイパー | 5T<br>V層 | 最大長 4.1 、最大幅 4.0 、最大厚 1.7、重さ：26g | | | | | 3-9 | B9 | 灰色緻密様、万能急角度、 |
| 4 | 剥片 | 5T<br>SD999 | 最大長 3.4 、最大幅 1.1 、最大厚 0.25、重さ 3.0g | | | | | 3-10 | B10 | 灰色緻密様 |

**第６図　出土遺物（2）**

### ＳＩ 2005 竪穴住居跡

６トレンチのＶ層上面で発見した。重複関係からＳＸ 2004 より古く、ＳＸ 2006、ＳＤ 2007 溝跡よりも新しい。残存状況は悪く住居南辺付近の掘り方のみを検出した。規模は南北 1.9 ｍ以上、東西 2.8 ｍ以上である。埋土はにぶい黄橙色土粒を斑状に含むにぶい黄褐色土である。なお、南壁際で掘り方埋土上で焼土・炭化物粒を多量に含む不整形のピットを検出した。住居に伴う可能性もある。

### ＳＸ 2006

６トレンチのＶ層上面で発見した遺構である。ＳＩ 2005 竪穴住居跡、ＳＸ 2004、ＳＤ 1995 溝跡と重複し、それらよりも古い。規模は南北 3.9 ｍ以上、東西 2.5 ｍ以上である。埋土は２層に分けられ、１層がにぶい黄褐色土粒を斑状に含む黄褐色土である。２層が土器片、炭化物粒を含む黒褐色土である。竪穴住居跡の可能性もある。

遺物は、１層より土師器甕（第５図６）が出土している。

### ＳＤ 2007 溝跡

６トレンチのＶ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＩ 2005 竪穴住居跡と重複し、それよりも古い。長さは 1.5 ｍ以上、幅は 26 ～ 28cmである。埋土ははにぶい黄橙色土の小ブロックを含む褐色土である。５ＴのＳＤ 2003 小溝群の一部とも考えられる。

### ＳＤ 2008 溝跡

４トレンチのＶ層上面で発見した東西方向の溝跡である。２時期（Ａ→Ｂ）の変遷を確認した。幅はＡ期が 1.1 ～ 1.5 ｍ、Ｂ期が 0.7 ～ 1.1ｍ、深さは 30cm以上である。埋土はＡ期が暗褐色土で明褐色土の小ブロックを含む。Ｂ期が灰白色火山灰のブロックを含む暗褐色土である。

**遺構外出土の遺物**（第５図５・８、第６図２・３）

６トレンチのⅠ層より土師器壷、足付土器の脚部、５トレンチのⅤ層上面で黒曜石製のラウンドスクレイパー、ＳＩ2002竪穴住居跡埋土下層より土師器甕が出土している。

**古墳時代の黒曜石製石器について**

本調査では、古墳時代の黒曜石製スクレイパーが１点、剥片が１点出土した。ここでは、スクレイパーの観察結果を報告する。

**・石器の素材と形状**

長さ4.1cm、幅4.0cmの略円形の形状である。厚さ1.7cmの背面に自然面を残し、自然面を打面とした剥片を素材としている。石材は、灰色と黒色の縞状をなし、白色含有物を含む黒曜石である。黒曜石の原産地同定の研究成果をもとにすると（吉谷・高橋2001）、宮城県加美町湯の倉産と考えられる。二次加工は、打面以外の周縁に、腹面からの加撃によって施される。二次加工により作出された面と腹面とのなす角度は、側縁部が相対的に鋭く、素材剥片の末端部が相対的に鈍い。刃部形状の要因としては、①意図的な作り分けがされていた②刃部再生により形状が変化した部分がある③素材となる剥片の形状に影響されたなどの可能性が考えられる。

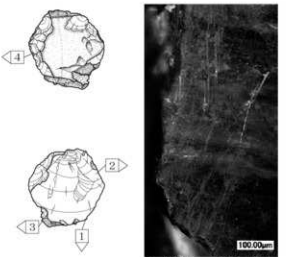
**・使用痕の観察**

エタノールをもちいて資料表面の油脂を除去したのち、東北大学大学院文学研究科考古学研究室所有のデジタルマイクロスコープシステム（キーエンスVHV-1000）を使用して、主に200倍にて深度合成を行い撮影した。使用痕を観察するにあたって、これまでの石器使用痕研究（阿子島1989、梶原・阿子島1981、岡崎1983、御堂島1986など）を参考にした。

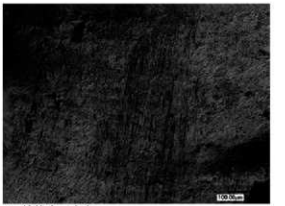
背面では、第７図４に示した箇所で稜線の摩耗が認められたほかは、明確な痕跡は認められなかった。腹面側では、打面部以外の刃部で線状痕が確認できた。線状痕の形状は、細く短いものが主体であり、連続的な孤状の痕跡もわずかに認められる（第７図１）。刃部に直交するものが主体であり、斜行、平行するものもわずかに認められる。第７図１と３の箇所では、刃部の縁辺形状の凹凸を柔軟に利用した結果、刃部に平行するような線状痕が生じたと考えられる。そのため、この箇所でも本来は、他の箇所と同様に刃部に対して直交する方向の運動が行われたと推定する。

**・まとめ**

本資料の使用痕は、使用実験にもとづいたこれまでの弥生時代終末期から奈良時代にかけての黒曜石製石器の使用痕と同様の特徴を示している（御堂島1993、須藤・高橋1997、高瀬2002）。このことから、本資料も皮革のスクレイピングに用いられたと推測する。一方で、当該時期の黒曜石製石器は、墓や祭祀遺構からの出土が特徴的であり、道具と祭祀具という二面性をもった遺物とも考えられている（相澤1999）。今回は形態と機能を主体的に取り上げたが、こうした資料は、今後出土状況や分布なども含めた多角的な研究が必要と考える。

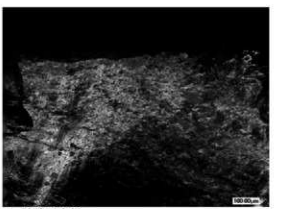



1　線状痕　直交・平行




2　線状痕　直交

3　線状痕　直交・平行




4　稜線の摩耗

**第７図　石器の使用痕観察**

**参考文献**

相澤清利　1999「東北地方続縄文文化小考」『宮城考古学』1　pp.55-65
阿子島香　1989『石器の使用痕』ニューサイエンス社
阿部義平・須藤隆・富岡直人・奈良佳子・高橋哲　2003「岩出山町木戸脇裏遺跡における北海道系土壙墓と出土遺物の研究」『宮城考古学』5　pp.51-77
岡崎里美　1983「黒曜石の使用痕研究」『季刊考古学』4　pp.51-55
梶原洋・阿子島香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－」『考古学雑誌』67-1　pp.1-36
須藤隆・高橋哲　1997「山王遺跡出土石器の使用痕分析」「山王遺跡１」多賀城市文化財調査報告書第 45 集　pp.151-173
高瀬克範　2002「黒曜石製石器の使用痕分析」「中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 380 集　pp.349-365
高橋　哲　1998「木戸脇裏遺跡出土の北海道系石器の研究」『考古学の方法』2　pp.19-21
藤沢　敦　2007「倭と蝦夷と律令国家－考古学的文化の変移と国家・民族の境界－」『史林』90-1　pp.4-27
御堂島正　1986「黒曜石製石器の使用痕－ポリッシュに関する実験的研究」『神奈川考古』22　pp.51-78
御堂島正　1993「岩手県滝沢村仏沢Ⅲ遺跡出土石器の使用痕分析」『大石渡遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第 24 集　pp.101-104
吉谷昭彦・高橋誠明　2001「宮城県における続縄文系石器の意義と石材の原産地同定」『宮城考古学』3　pp.53-76

## 3　まとめ

(1) 古墳時代の遺構は、5・6トレンチでまとまって発見された。そのうち、竪穴住居跡は2軒、ＳＸ2006はＳＩ2002竪穴住居跡と方位を同じくすることから住居跡の可能性が高い。ＳＸ2004は何らかの焼成を行った施設であろう。ＳＤ2003小溝群は畑に関連する耕作痕である。遺構の年代は、出土した土師器が南小泉式に比定されるものであることから、5世紀代とみておきたい。

(2) 古代の遺構は、検出面や灰白色火山灰の関係からみると、ＳＤ1999小溝群、ＳＤ1998・2008溝跡が該当する。ＳＤ1998・2008溝跡は、10世紀前葉以降の時期と推定される。

(3) 中世の遺構は、検出面や出土遺物からＳＤ1995・1996・1997溝跡が該当する。ＳＤ1995・1996溝跡は南北33ｍ以上の長さを有し、約3ｍの間隔を保ちながら並行して走っている。このようなあり方は、周辺の調査成果からすると、屋敷を区画する大規模な溝との類似性がうかがえる。しかし、並行して走ることを重視するならば、道路跡の可能性も考えられる。

**対象地区全景**（南より）

**1トレンチ遺構検出状況**（南より）

**2トレンチ遺構検出状況**（南東より）

**3トレンチ遺構検出状況**（南東より）

**写真図版1**

4トレンチ遺構検出状況（北西より）

5トレンチ遺構検出状況（北より）

5トレンチ黒曜石製石器出土状況

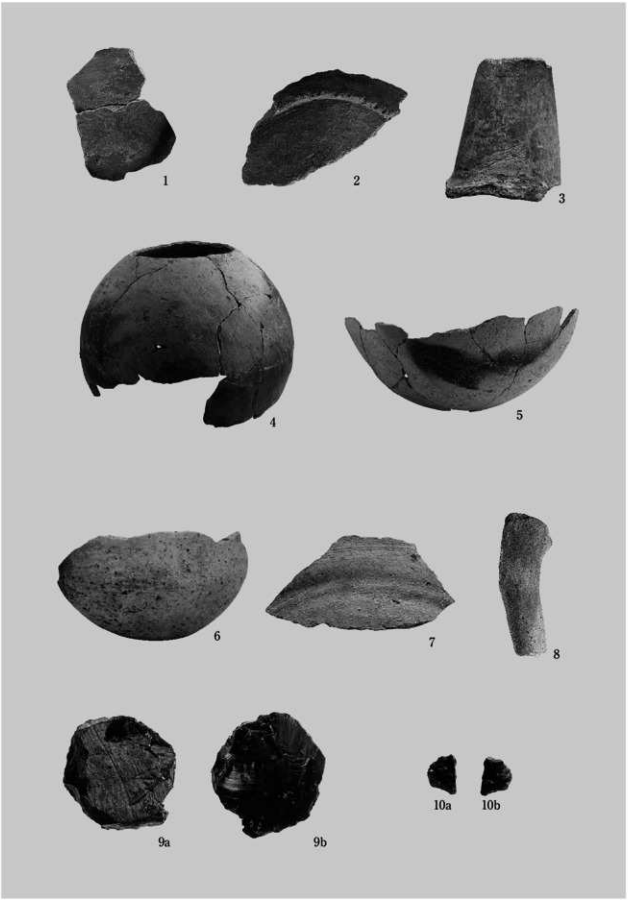
6トレンチ遺構検出状況（北西より）

6トレンチ北半部遺構検出状況（西より）

6トレンチSX2004検出状況（北より）

6トレンチSX2004
土師器壷検出状況（北西より）

6トレンチSX2004土師器壷検出状況






写真図版 3

# 新田遺跡第 74 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅新築計画に伴う調査である。平成 23 年 6 月 28 日に、地権者より当該地区における住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画内容は、基礎工事では地盤改良工事のため直径 48.6㎜、最長 7 ｍの鋼管杭を 144 本施すことと、給排水工事では最深 70㎝掘削を行うことが示されていた。地盤改良工事が深く及ぶことによる埋蔵文化財への影響が懸念されたことから、遺跡保存に向けた協議を行ったものの、耐震のため建物強度を確保するには工法変更は不可能であるとの結論に達し、本調査に至ったものである。

平成 23 年 7 月 15 日に地権者から調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、8 月 18 日に調査に着手した。重機による表土（Ⅰ層）除去を開始し、1 区と 2 区の 2 箇所で掘削行った（第 3 図）。現表土（盛土）及び旧水田層と旧耕作土層の下には、灰褐色土層、明褐灰色土層、明褐灰色砂層が順次認められるのみであり（第 2 図）、1.4 ｍまで掘削したが遺構や遺物は発見できなかった。南側で平成 22 年度に実施した第 68 次調査においても、遺構検出面を発見できず、ほぼこれと同じ堆積が認められたことから、河川またはその氾濫原と判断し、すべての現地発掘調査を終了した。

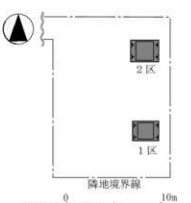
第 1 図　調査区位置図

第 2 図　土層模式図

## 2　調査成果

現地表から 1.4 ｍより下は、砂が厚く堆積しており、遺構・遺物は発見できなかった。

2 区　調査区全景（北西から）



第 3 図　調査区平面図

# 新田遺跡第 75 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、新田字北地内における個人住宅建設に伴うものである。平成 23 年 6 月 3 日に地権者より新田遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事の際に直径 160㎜、長さ 9.0 m の杭を 46 本打ちこむことから、地下に遺構があった場合の影響が懸念された。このため、発掘調査が必要である旨を地権者に対し説明し、実施についての了解を得た。その後、平成 23 年 7 月 23 日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、8 月 23 日から現地調査を開始した。なお、本件は東日本大震災に関連した被災家屋の建替えに起因するものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱規定により、調査は遺構検出第一面での確認調査にとどめることとした。

第 1 図　調査区位置図

はじめに、重機により現代の盛土等（Ⅰ・Ⅱ層）及び堆積土（Ⅲ～Ⅴ層）の除去を行い、掘削した土砂は対象地の北側に移動した。引き続き、現地表面から約 1.2 m 下のⅥ層上面で遺構検出作業を行った結果、調査区東端部で南北方向の溝跡を検出した。これについては、位置関係や掘り込み面からみて、第 72 次調査で発見した近代以降のＳＤ 2030 溝跡の延長部と判断した。また、調査区西半部においては、平面プランの北側ラインが東西方向に斜行する遺構（ＳＸ 2033）を検出した（8 月 25 日）。なお、南側ラインは調査区外にかかると推定された。このＳＸ 2033 については、調査区南壁で土層堆積状況を観察した結果、幅の規模に対して深さが浅い、溝状を呈する遺構と考えられた。8 月 26 日に調査区内に測量基準点を移動し、それを基に翌 27 日に平板測量による平面図作成を行った。続いて、調査区南壁の断面図作成を行い、8 月 31 日の重機による埋め戻しをもって、調査を終了した。

## 2　調査成果

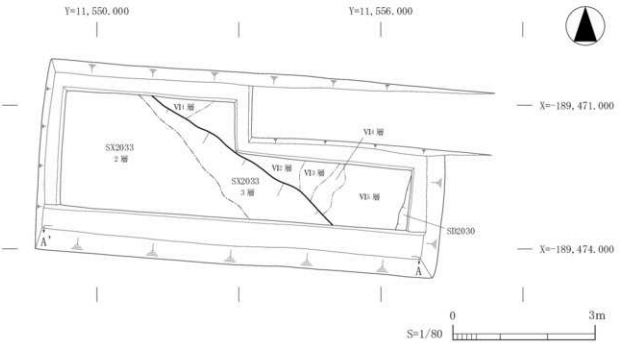
### (1) 層　序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

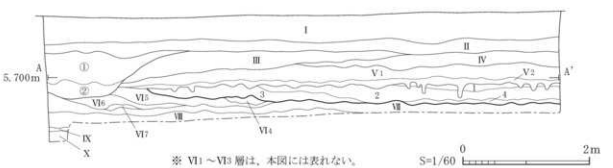
Ⅰ　層：現代の盛土。灰オリーブ色砂で、厚さは 40 ～ 50㎝である。

Ⅱ　層：灰色砂質土で、厚さは 15 ～ 25㎝である。

Ⅲ　層：灰オリーブ色砂質土で、厚さは 15 ～ 35cmである。調査区東半部に分布する。
Ⅳ　層：オリーブ黒色砂質土で、厚さは 10 ～ 20cmである。調査区西半部に分布する。灰オリーブ色砂質土を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。
Ⅴ1層：黒褐色土で、厚さは 15 ～ 25cmである。調査区の全域に分布する。暗灰黄色土を斑状及びブロック状に含んでいる。




**第２図　調査区平面図**




※ Ⅵ1 ～Ⅵ3 層は，本図には表れない。

**土層観察表**

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| SD 2030 埋土 | | |
| ① | 灰色砂質土 | しまりはやや弱い。酸化鉄斑を含む。 |
| ② | 灰オリーブ砂質土 | 粘性ややあり，オリーブ黒色粘質土と灰色粘質土を斑状及びブロック状に含む。 |

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| SX 2033 埋土 | | |
| 1 | 黄灰色土 | 黒褐色土と黄褐色砂質土を斑状に含む。 |
| 2 | 暗灰黄色土 | 黒褐色土と黄褐色砂質土を斑状及びブロック状に多量に含む。 |
| 3 | 黄灰色土 | 黒褐色土と黄褐色砂質土を斑状及びブロック状に若干含む。 |
| 4 | 黄灰色砂質土 | 黒褐色土と黄褐色砂質土を斑状及び小ブロック状に若干含む。 |

**第３図　調査区南壁断面図**

Ⅴ2層：黒色土で、厚さは10cm前後である。調査区のほぼ全域に分布し、ＳＸ2033を覆っている。暗灰黄色土と黄褐色砂質土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。
Ⅵ1層：灰オリーブ色砂で、調査区の中央北側で確認される。オリーブ黒色土と灰色土が混入している。なお、本土層は7層に細分されるが、これらは一連の小河川埋土と考えられる。
Ⅵ2層：灰色土で、調査区の中央北側で確認される。オリーブ黒色土と灰オリーブ色砂を混入している。
Ⅵ3層：灰オリーブ色砂で、調査区東側で確認される。オリーブ黒色土を混入している。
Ⅵ4層：灰オリーブ色砂で、調査区東側で確認される。厚さは10cm前後である。オリーブ黒色土を斑状及びブロック状に含んでいる。
Ⅵ5層：オリーブ黒色粘質土で、調査区東側で確認される。厚さは10～20cmである。灰色土と灰オリーブ色砂を混入している。
Ⅵ6層：灰色粘質土で、調査区東側で確認される。厚さは5～20cmである。灰オリーブ色砂とオリーブ黒色粘質土を斑状及びブロック状に若干含んでいる。
Ⅵ7層：オリーブ黒色粘質土で、調査区東側で確認される。厚さは5cm前後である。灰色土と灰オリーブ色砂を混入している。
Ⅶ　層：灰色粘質土で、厚さは15cm以上である。しまりが強い土層である。
Ⅷ　層：灰オリーブ色粘質土で、厚さは約25cmである。しまりが強い土層である。
Ⅸ　層：黒色粘質土で、厚さは約5cmである。
Ⅹ　層：灰色粘質土で、厚さは15cm以上である。しまりが強い土層である。

### (2) 発見遺構と遺物

#### ＳＸ2033

Ⅵ層上面で検出した東西方向に斜行する溝状の遺構である。大部分が調査区外にかかるため、全体の形態や規模は不明である。方向は、北辺でみると東で約35度南に偏している。規模は上幅3.3m以上で、深さは調査区南壁でみると30cm前後である。底面は平坦に近いが、やや凹凸がみられる。壁の立ち上がりは非常に緩やかである。埋土は4層に分けられる。このうち、多くを占める2層には、混入土がブロック状に多量に含まれることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、出土していない。

## 3　まとめ

本調査については、出土遺物が皆無のため、検出したＳＸ2033の年代や性格は不明といわざるを得ない。ただし、埋土の状況から廃絶時には人為的に埋め戻されていると確認できることから、居住域あるいはその近接地に位置するものと推定される。ここで周辺部での遺構のあり方をみると、本調査区の北側に位置する寿福寺地区及び後地区では、古墳時代、古代、中世の各時代にわたる遺構・遺物が数多く発見されている。しかし、本調査区が位置する北地区寄りでは、遺構の密度が徐々に希薄になり、特に古代の遺構は極端に少なくなる傾向にある。また、古墳時代については水田跡が近接地で発見されているが、検出面が今回とは異なっている。したがって、ＳＸ2033については、中世に属する可能性が一番高いと考えられる。この場合、本遺跡内で数多く発見されている中世の屋敷に伴う区画溝との関連が考えられるが、特に形態の面で共通性は見いだせない。

**ＳＸ 2033 検出状況**
（西より）

**ＳＸ 2033 検出状況**
（東より）

**調査区南壁土層堆積状況**
（北より）

# 新田遺跡第 76 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成 23 年 6 月 13 日に地権者より当該地における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径 60cm、長さ 6.5 mの柱状改良杭を 25 本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、平成 23 年 8 月 26 日に地権者より調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

第 1 図　調査区位置図

調査は 9 月 7 日から開始し、はじめに重機を使用して盛土(Ⅰ1 層)・現代の表土(Ⅰ2 層)の除去を行った。土砂は調査面積と作業時の安全確保のためすべて場外搬出とした。8 日より作業員を動員してⅡ層及びⅢ層上面での遺構検出作業を行い、並行して調査区北・西際に排水溝を兼ねた土層観察用サブトレンチを設定した。Ⅱ層上面ではＳＤ 2020 溝跡を、そのほかの遺構はⅢ層上面で検出した。平面プランの検討の結果、ＳＤ 2019 ～ 2021 溝跡は単独の溝跡であり、これらより古い東西・南北方向の溝跡は、いわゆる小溝状遺構群として把握された。13 日、実測図作成用の基準点を設置し、以後、重複関係の新しい順に埋土を掘り下げながら各遺構の平面・断面図作成と写真撮影を行った。これらの作業が終了したのは 24 日である。27 日よりⅢ層の除去と調査区北際サブトレンチの拡張及び南際に新たにサブトレンチを設定し、下層の調査を開始した。Ⅳ層上面では調査区の中央付近で南北に大きく土層が変わるプランを検出した。これを北・南壁の土層断面で検討した結果、西側に落ち込む河川跡であることが判明した。埋土からは古墳時代前期の土師器が若干出土した。29 日には下層の調査を終了した。10 月 1 日、補足調査、器材の撤収を行う。4 日には埋め戻しを行って現地の調査を完了した。

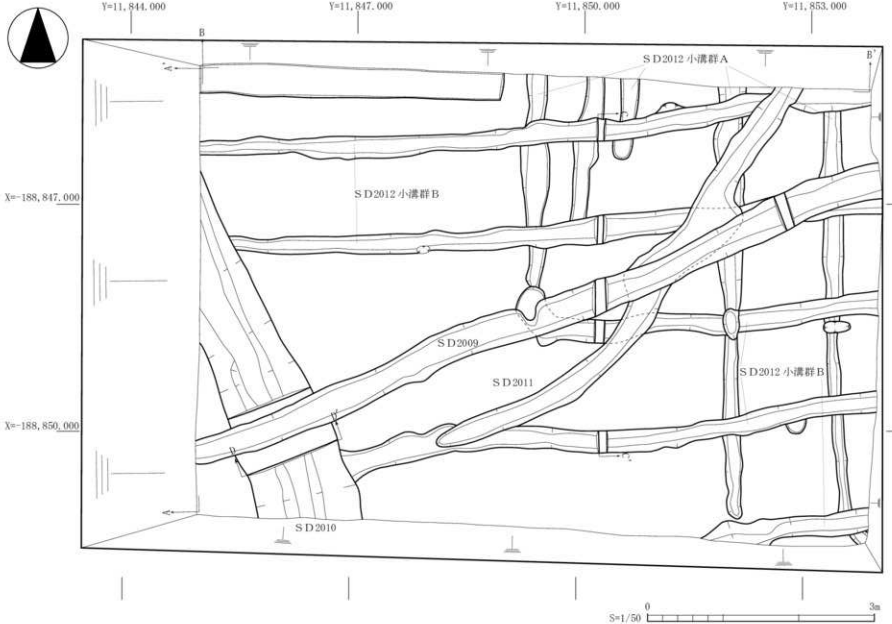
## 2　調査成果

### (1) 層　序

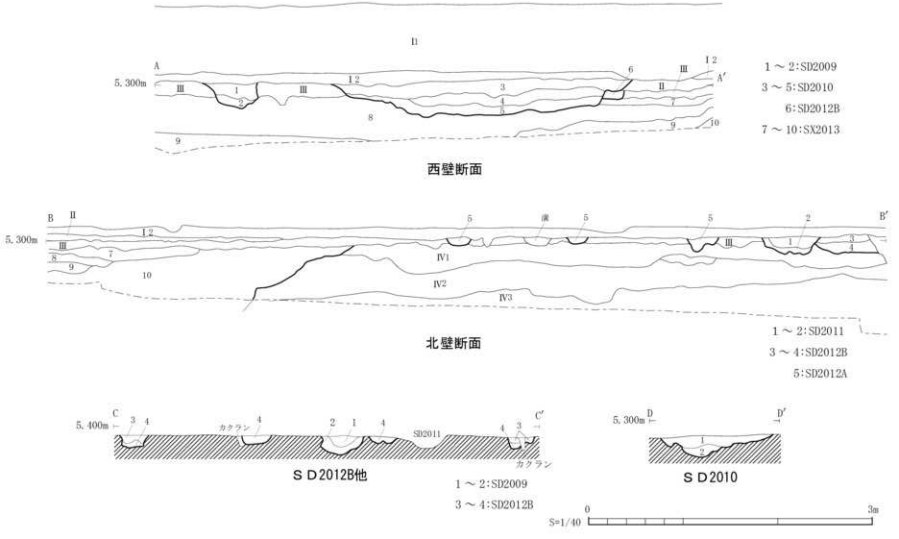
今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ1 層：現代の盛土層で、厚さは 70 ～ 80cm である。

Ⅰ2 層：現代の水田耕作土層で、厚さは 15cm 未満である。




第２図　Ⅱ・Ⅲ層上面検出遺構平面図




第３図　調査区北・西壁他断面図

Ⅱ　層：黒色粘質土で、厚さは12cm未満である。均質。調査区北西部に分布する。遺構検出面。
Ⅲ　層：褐灰色土で、厚さは2～20cmである。調査区全域に分布する。下面凹凸あり。遺構検出面。
Ⅳ1層：灰褐色土で、厚さは10～32cmである。下層になるほど粒子が粗くなる。河川跡の検出面であり、古墳時代前期の遺物を含む。本層より下層は、西に向かって緩やかに傾斜しており、大規模な河川跡の埋土の可能性もある。
Ⅳ2層：褐灰色砂で、厚さは7～40cmである。下層になるほど粒子が粗くなり小礫となる。古墳時代前期の遺物を含む。
Ⅳ3層：にぶい黄褐色土で、厚さは56cm以上である。シルトと砂の互層である。

### (2) 発見遺構と遺物

#### S D 2009 溝跡

調査区中央付近のⅢ層上面で発見した北東方向の溝跡である。やや蛇行しており、長さ9.8mにわたって検出した。重複関係からすべての遺構より新しい。上幅0.4～0.5m、下幅0.14～0.26m、深さ20cmである。底面は凹凸があるが、比高はほとんどない。壁は内弯しながら立ち上がる。埋土は2層に分けられ、1層が黒褐色土、2層が灰褐色土の小ブロックを多量に含む褐灰色土である。

遺物は、土師器の小破片が出土している。

#### S D 2010 溝跡

調査区西端付近のⅡ層上面で発見した西寄りにやや湾曲する南北方向の溝跡である。長さ5mにわたって検出した。上幅1～1.2m、下幅0.2～0.4m、深さ37cmである。底面はやや凹凸があるものの概ね平坦で、南にやや傾斜している。壁は中位付近で段が付く。埋土は3層に分けられ(第3図3～5:西壁断面)、1層(3)が黒褐色粘質土、2層（4）が褐灰色粘質土でいずれも均質である。3層（5）が灰褐色土の小ブロックを多量に含む黒色粘質土である。

遺物は、土師器の小破片が出土している。

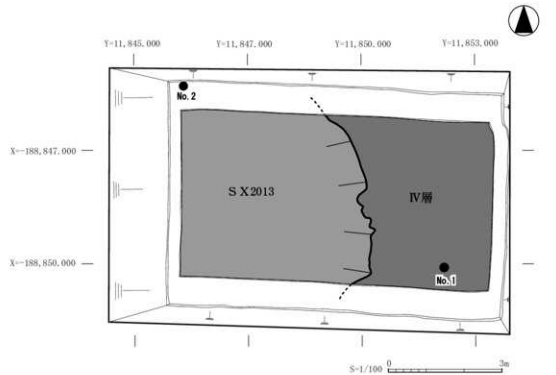
#### S D 2011 溝跡

調査区中央付近のⅢ層上面で発見した北東方向の溝跡であり、北端は調査区外へと延びている。S D 2012小溝群・2009溝跡と重複しており、前者より新しく後者より古い。長さ6.8mにわたって検出した。上幅0.3～0.6m、下幅0.2～0.5m、深さ20cmである。底面は凹凸があるが、比高はほとんどない。壁は内弯しながら立ち上がる。埋土は2層に分けられ（第3図1～2：北壁断面）、1層が均質な褐灰色土、2層が灰褐色土の小ブロックを多量に含む褐灰色土である。

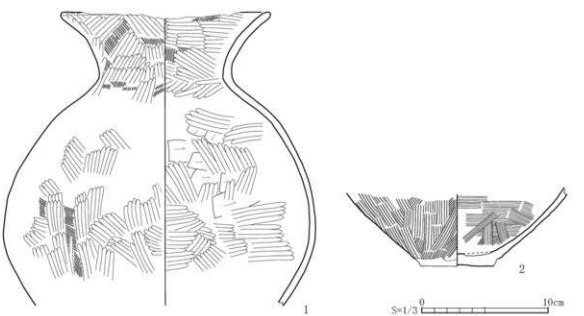
遺物は、土師器の小破片が出土している。

#### S D 2012 小溝群

調査区東半部のⅢ層上面で発見した南北・東西方向の小溝群である。重複しているすべての遺構より古い。これらは南北方向のA群と東西方向のB群に分けられ、重複関係から前者のほうが古い。A群は4条確認され、ほぼ発掘基準線に沿う方向をとる。約1m間隔で配置されており、最も長いもので5.7mまで検出した。規模は、上幅0.2～0.38m、下幅0.1～0.26m、深さ8～12cmである。底面は丸みをもち、壁は内弯しながら立ち上がる。比高は南から北に向かって僅かに低くなっている。B群は5条確認され、方向は最も長いものでみると東で約5度北に偏している。約1m間隔で配置されており、最も長いもので8.9




第4図　ＳＸ 2013 河川跡平面図




| 番号 | 種類 | 遺構・層位 | 特徴 外面 | 特徴 内面 | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器・壺 | SX2013 10層 | 口縁部：ハケメ→ヘラミガキ 体部：ハケメ→ヘラミガキ | 口縁部：ハケメ→ヘラミガキ 体部：ケズリ→ヘラミガキ | (16.2) 1/24 | — | — | 2-2 | R1 | 塩釜式 No.2 |
| 2 | 土師器・甕 | Ⅳ1層 | 体部：ハケメ | 体部：ヘラナデ | — | (5.7) 17/24 | — | 2-1 | R2 | 塩釜式 No.1 |

第5図　ＳＸ 2013 河川跡、Ⅳ層出土土器

mまで検出した。規模は、上幅0.18～0.5m、下幅0.07～0.3m、深さ8～13cmである。底面は平坦なものと丸みをもつものとがあり、壁は内弯しながら立ち上がる。比高は東から西に向かって僅かに低くなっている。埋土は、A群が灰黄褐色土で、下部には褐灰色土の小ブロックを混入する。B群は上層が褐灰色土で、下層が褐灰色土の小ブロックを混入するにぶい黄橙色土である。

遺物は、土師器の小破片が出土している。

**SX 2013 河川跡**

調査区西半部のⅣ層上面で発見した南北方向の河川跡である。確認できた埋土の範囲は東西約5.5m、南北約6m、深さ60cm以上である。埋土は4層に分けられ（第3図7～10）、1（7）層～3（9）層がにぶい黄橙色土～灰黄褐色土で下層になるに従って粒子が細かくなる。いずれも均質である。4（10）層は黒褐色の粘土粒を含む褐灰色土である。

遺物は、10層より古墳時代前期の土師器壺（第5図1：No.2）が出土している。

**その他の出土遺物**

Ⅳ1層より土師器甕（第5図2：No.1）、Ⅳ2層より土師器壺の破片が出土している。

## 3　まとめ

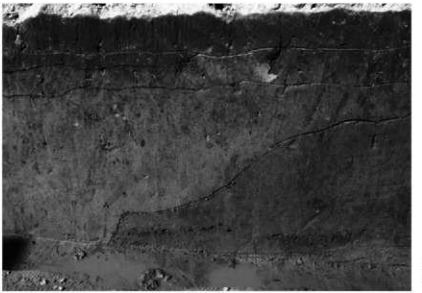
今回の調査で発見された遺構は溝跡のみであった。特に小溝群は、畑の耕作に関連する遺構とされていることから、本地区は生産域として土地利用がなされていたことが判明した。これらの年代については、出土遺物が小破片のため詳細は不明である。しかし、SD2012小溝群とSD2010溝跡及びそれより新しいSD2009溝跡の間には、検出面や方向、規模の違いから連続的なものではなく、ある一定の時間幅が想定される。これらの下層で検出された河川跡の年代が古墳時代前期であるので、それ以降の時期と考えられるが、ここでは古代～中世のものと推定しておきたい。

遺構検出状況
（東より）

遺構完掘状況
（西より）

遺構完掘状況
（北東より）

写真図版 1



S X 2013 河川跡土層断面
（南より）

S X 2013 河川跡
土師器壷出土状況

1　土師器甕

2　土師器壷

# 新田遺跡第77次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、保育所建設に伴う確認調査である。平成23年7月26日に、社会福祉法人銀杏の会より、当該地区における保育所建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画では、面積1,130.32㎡の敷地に、最大40cmの盛土を施し、建物基礎工事では最深80cm、給排水管布設工事では最深1.7m、外構工事では最深70cm、それぞれ掘削を行うことが示されていた。当該地区は、周辺で行った調査の結果、現地表から80cm下に遺構面があると推定されることから、給排水布設工事の一部を除き、掘削が遺構面まで及ばない工事内容であった。しかし、当該地区の遺構の状況が不明なこと、開発面積が1,000㎡を超える広い面積での開発であることから、確認調査を行うこととなった。

第1図　調査区位置図

平成23年8月25日に、調査の依頼書と承諾書の提出を受け、9月1日から調査に着手した。調査区を1～3区の3箇所に設定し、現地表から1～1.3m下でⅡ層を発見した。Ⅱ層上面で遺構検出作業を行ったが、3区でPitを2基発見したほかは遺構を確認することはできなかった。9月8日にさらに下層の様子を探るため、遺構を検出できなかった2区の東端部を現地表から2mまで掘り下げたところ、水田跡とみられる黒色粘土層（Ⅲ・Ⅵ層）とオリーブ黒色粘土（Ⅷ層）を確認したことから、プラント・オパール分析を行うためのサンプルを採取した。9月9日に調査区を埋め戻し、9月13日に器材の撤収を行い、全ての現地発掘調査を完了した。

## 2　調査成果

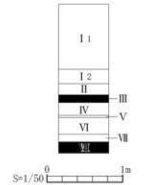
### (1) 層　序

Ⅰ1層　現代の盛土層で、厚さは90cmである。

Ⅰ2層　現代の水田耕作土で、厚さは20cmである。

Ⅱ　層　灰色土で、厚さは15cmである。Pitの検出面となっている。北側で実施した第34次調査における古代の遺構検出面にあたると考えられる。

Ⅲ　層　黒色粘土で、厚さは10cmである。プラント・オパール分析の結果、水田層と考えられる（附章）。
Ⅳ　層　灰色土で、厚さは17cmである。
Ⅴ　層　にぶい黄色土で、厚さは3cmである。
Ⅵ　層　黒色粘土で、厚さは20cmである。プラント・オパール分析の結果、水田層の可能性はあるが、断定できなかった。
Ⅶ　層　浅黄色土で、厚さは10cmである。
Ⅷ　層　オリーブ黒色粘土で、厚さは15cmである。プラント・オパール分析の結果、水田層と考えられる。




**第２図　土層断面模式図（２区）**

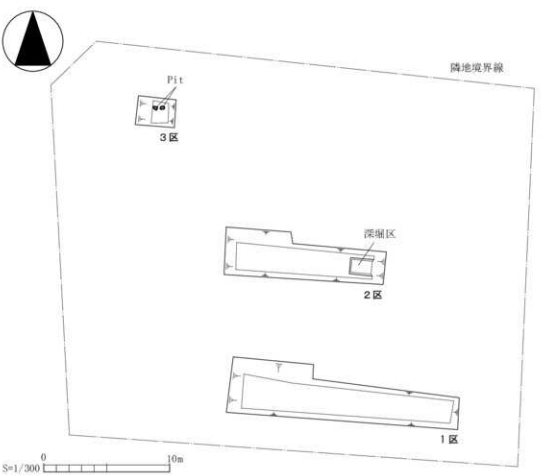
### (2) 発見遺構と遺物

#### Pit

３区でPitを２基発見した。規模は長軸38cm、短軸30cmである。遺物は出土していない。

#### 堆積層出土遺物

Ⅰ２層から土師器と寛永通宝が出土している。




**第３図　調査区平面図**

## 3　まとめ

今回の調査では、Ⅱ層上面においてPitを2基発見した。限られた範囲での調査であり、遺物も出土しなかったため、年代や性格については直接推定できない。一方、Ⅱ層については、北側で調査した第34次調査で発見した古代の最終遺構検出面となっているⅢ層に相当すると考えられることから、今回発見したPitも古代あるいはそれ以降の年代が考えられる。

また、Ⅱ層の下層にあたるⅢ層とⅥ層およびⅧ層、黒色～オリーブ黒色粘土であることから水田跡の可能性が考えられた。このためサンプルを採取し、プラント・オパール分析を行ったところ、Ⅲ層では5,300個/g、Ⅵ層では1,400個/g、Ⅷ層では5,800個/gそれぞれ検出された（附章）。今回、畦畔や水口など水田に関連する施設や、耕作の痕跡を示すような土層の乱れなどを確認することはできなかったが、3,000個/g以上の高い値を示したⅢ層およびⅧ層は、水田跡の可能性が高いと考えられる。年代については遺物が出土しなかったことから、直接推定することが難しい。しかし、本遺跡から山王遺跡の広範囲にわたって、これと類似する古墳時代中期以降に形成された堆積層に覆われた黒色粘土層が確認されている。一部の調査では、畦畔や水口などの施設が発見され、あわせてプラント・オパールも高い密度で検出している。出土する遺物は、いずれも古墳時代前期のものであることから、これとおよそ同じ年代が考えられている。したがって、今回発見したⅢ層およびⅥ層については、土壌分析の結果や層位的な関係を考慮すれば、古墳時代前期の水田層であると考えられる。

**参考文献**

多賀城市教育委員会『山王遺跡－第51・54・57次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第81集　2006年
多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2－平成18年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書87集　2007年

**1区　調査区全景**（西から）

**2区　深掘区**（西から）

**3区　遺構検出状況**（東から）

# 附章　新田遺跡第77次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

## 1　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

新田遺跡第77次調査区は、新田遺跡の北側にあたり、古墳時代の水田遺構が検出された第15次調査区と第19次調査区、さらに水田遺構は検出されなかったものの、プラント・オパール分析において水田耕作土の可能性が認められた第34次調査区の近隣に位置する。今回、確認調査において、黒色～オリーブ黒色粘土層が認められたことから当該調査区においても複数の時期の水田跡の包蔵が予想された。そこで、これらの層における稲作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を実施することになった。

## 2　試料

分析試料は、Ⅲ層（黒色粘土）、Ⅵ層（黒色粘土）、Ⅷ層（オリーブ黒色粘土）の3点である。いずれも調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

## 3　分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

(1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
(2) 試料約1gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
(3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
(4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
(5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
(6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
(7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10－5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

## 4　結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針が検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

イネは、Ⅲ層、Ⅵ層およびⅧ層のすべてで検出されている。Ⅲ層とⅧ層では高い密度である。ヒエ属型はキビ族型は、Ⅵ層とⅧ層で検出されているが、いずれも低い密度である。キビ族型はすべての層で検出されているが、いずれも低い密度である。ヨシ属、ススキ属型さらにシバ属もすべての層で検出されている。このうち、ヨシ属はすべての層で高い密度である。ススキ属型はⅢ層で比較的高い密度である。シバ属はいずれも低い密度である。タケ亜科では、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型がすべての層で検出されているが、いずれも低い密度である。海綿骨針もすべての試料で検出されているが、いずれも低い密度である。

## 5　考察

### (1) 新田遺跡第77次調査における稲作

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、通常、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし仙台平野（仙台市域、多賀城市域）では、これまでの調査で密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された事例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安として検討する。

Ⅲ層とⅧ層では、プラント・オパール密度が5,300個/g、5,800個/gと高い値であり、稲作跡の判断基準値を上回っていることから、これらの層において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Ⅵ層については、密度が1,400個/gと低いことから、稲作が行われていた可能性はあるものの、上層あるいは他所からプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。

### (2) プラント・オパール分析から推定される周辺植生と環境

イネ以外の分類群では、すべての層でキビ族型、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出され、Ⅵ層とⅧ層ではヒエ属型が検出されている。このうち、ヨシ属がすべての層で非常に高い密度であり、優勢となっている。これらのことから、Ⅲ層、Ⅵ層およびⅧ層の堆積当時は、調査地近辺は湿地の環境であったと推定される。また、各層とも周辺の比較的乾いたところにはススキ属やササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節）、メダケ属（メダケ節、ネザサ節）などの竹笹類が生育していたと考えられる。

## 6 まとめ

新田遺跡第77次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討を行った。その結果、Ⅲ層とⅧ層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出され、両層において稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

なおⅢ層、Ⅵ層およびⅧ層では、調査地周辺は湿地の環境であり、各層とも周辺の比較的乾いたところにはススキ属、ササ属やメダケ属などの竹笹類が生育していたと推定された。

### 文献


杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学，同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志（1998）稲作の起源を探る．岩波新書．


表1　多賀城市新田遺跡第77次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

| 分類群（和名・学名）＼層位 | | Ⅲ層 | Ⅵ層 | Ⅷ層 |
|---|---|---|---|---|
| イネ科 | Gramineae (Grasses) | | | |
| イネ | Oryza sativa | 53 | 14 | 58 |
| ヒエ属型 | Echinochloa type | | 9 | 5 |
| キビ族型 | Paniceae type | 9 | 5 | 5 |
| ヨシ属 | Phragmites | 75 | 41 | 63 |
| ススキ属型 | Miscanthus type | 31 | 23 | 19 |
| シバ属 | Zoysia | 13 | 5 | 5 |
| タケ亜科 | Bambusoideae (Bamboo) | | | |
| メダケ節型 | Pleioblastus sect. Nipponocalamus | 9 | 9 | 10 |
| ネザサ節型 | Pleioblastus sect. Nezasa | 13 | 9 | 14 |
| チマキザサ節型 | Sasa sect. Sasa etc. | 22 | 14 | 43 |
| ミヤコザサ節型 | Sasa sect. Crassinodi | 13 | 5 | 14 |
| その他 | Others | 4 | 5 | 5 |
| 未分類等 | Unknown | 137 | 99 | 91 |
| （海綿骨針） | Sponge | 18 | 9 | 14 |
| プラント・オパール総数 | Total | 379 | 238 | 332 |

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| イネ | Oryza sativa | 1.56 | 0.40 | 1.70 |
| ヒエ属型 | Echinochloa type | | 0.76 | 0.40 |
| ヨシ属 | Phragmites | 4.75 | 2.56 | 3.95 |
| ススキ属型 | Miscanthus type | 0.38 | 0.28 | 0.24 |
| メダケ節型 | Pleioblastus sect. Nipponocalamus | 0.10 | 0.10 | 0.11 |
| ネザサ節型 | Pleioblastus sect. Nezasa | 0.06 | 0.04 | 0.07 |
| チマキザサ節型 | Sasa sect. Sasa etc. | 0.17 | 0.10 | 0.32 |
| ミヤコザサ節型 | Sasa sect. Crassinodi | 0.04 | 0.01 | 0.04 |

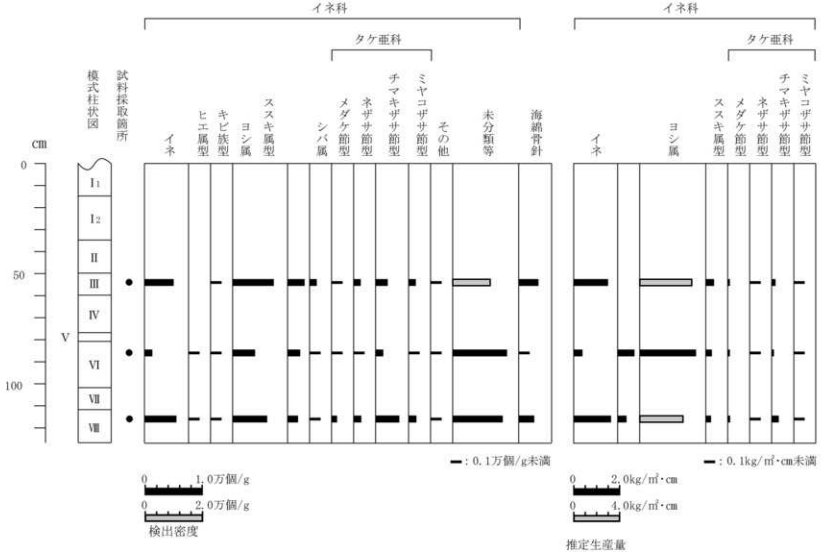
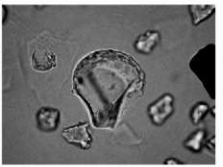
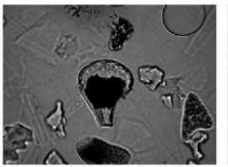


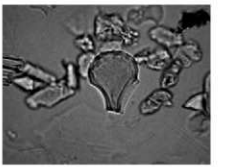

**図1　新田遺跡第77次調査のプラント・オパール分析結果**



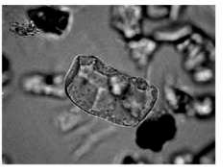
イネ（Ⅲ層）



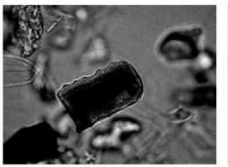
イネ（Ⅵ層）



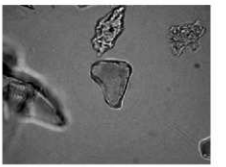
イネ（Ⅷ層）



ヒエ属型（Ⅵ層）

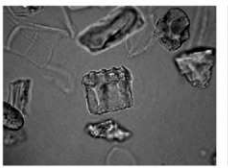


キビ族型（Ⅲ層）

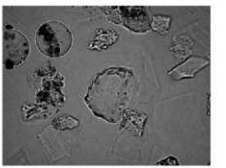


ススキ属型（Ⅵ層）

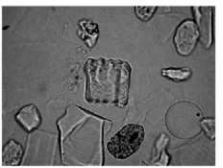
ヨシ属（Ⅲ層）



ネザサ節型（Ⅷ層）

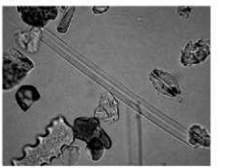


チマキザサ節型（Ⅷ層）



メダケ節型（Ⅷ層）

シバ属（Ⅲ層）



海綿骨針（Ⅷ層）

50μm

**新田遺跡第77次調査のプラント・オパール**

# 新田遺跡第 78 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、新田字後地内における個人住宅建設に伴うものである。平成 23 年 8 月 2 日に地権者より新田遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、建物基礎工事の際に直径 48.6㎜、最長 6.5 mの杭を 126 本打ちこむというものである。当該地の西側隣接地においては、昭和 56 年に新田遺跡第 1 次調査が実施されており、古代から中世にかけての遺構が数多く発見されている（第 5 図参照）。このため、発掘調査が必要である旨を地権者に対し説明し、実施についての了解を得た。その後、平成 23 年 9 月 6 日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、9 月 14 日から現地調査を開始した。なお、本件は東日本大震災に関連した被災家屋の建替えに起因するものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱規定により、調査は遺構検出第一面での確認調査にとどめることとした。

第 1 図　調査区位置図

はじめに、重機により盛土や旧耕作土等の除去を行い、掘削した土砂は対象地の南側に移動した。この掘削の段階で、調査区北西隅において第 1 次調査区の痕跡を確認した。続いて、現地表面から約 1.2 m下で遺構検出作業を行った結果、調査区東半部で南北方向に延びる溝状の落ち込み（ＳＸ 2034）の西側ラインを検出した（9 月 16 日）。これに先立ち、対象地内に測量基準点を移動し、それを基に 9 月 17 日に平板測量による平面図作成を行った。続いて、調査区北壁において土層堆積状況を精査し、その後に断面図作成を行った。そして、9 月 28 日の重機による埋め戻しをもって、調査を終了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

Ⅰ　層：現代の盛土等で、3 層に分けられる。Ⅰ 1 層はオリーブ黄色砂、Ⅰ 3 層はオリーブ黒色土である。また、Ⅰ 2 層は第 1 次調査の際の埋め戻し土である。全体の厚さは、約 70㎝である。

Ⅱ　層：2 層に分けられ、いずれも旧耕作土と考えられる。上層は黄灰色土、下層は暗灰黄色土である。全体の厚さは 30 ～ 35㎝である。

Ⅲ１層：黒褐色土で、厚さは 10 ～ 20cmである。調査区東半部に分布する。暗灰黄色土を斑状に含み、また炭化物を若干含んでいる。

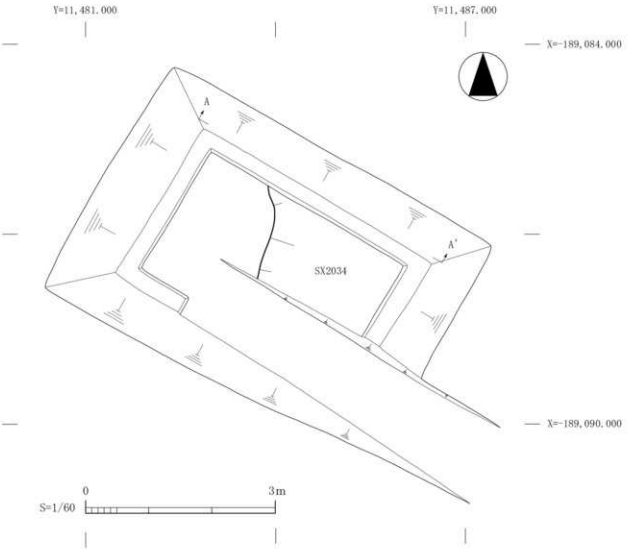
Ⅲ２層：黄灰色土で、調査区中央付近に限定的に分布する。調査区北壁の断面でみると、平均的な厚さは5cm前後であるが、下層に位置するＳＸ 2034 の落ち際付近と重なる分布範囲の西端部では、厚さを増して約 30cmを測る。暗灰黄色土を斑状に含み、また炭化物を若干含んでいる。

Ⅲ３層：黒褐色土で、Ⅲ２層と同様に調査区中央付近に限定的に分布する。厚さは 10 ～ 15cmである。暗灰黄色土と黄褐色土を斑状に含み、また炭化物を若干含んでいる。

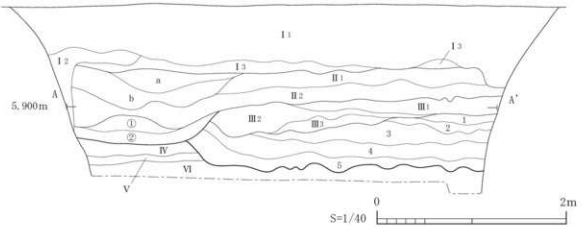
Ⅳ　層：にぶい黄色砂質土で、厚さは 10 ～ 15cmである。酸化鉄を斑状に含んでいる。

Ⅴ　層：黒褐色粘質土で、厚さは 10cm前後である。にぶい黄色砂質土が混入している。

Ⅵ　層：にぶい黄色砂で、厚さは 30cm以上である。粒子の粗い黄灰色砂が混入している。




**第２図　調査区平面図**




**土層観察表**

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| S X 2034 堆土 | | |
| 1 | 暗灰黄色土 | 黄褐色土を斑状に若干含む。 |
| 2 | 黒色土 | 粘性ややあり。暗灰黄色土を斑状及びブロック状に含む。 |
| 3 | 暗灰黄色土 | 粘性ややあり。黄褐色土を斑状に若干含む。 |
| 4 | 黄灰色粘質土 | 黄褐色土とにぶい黄色砂質土を斑状及びブロック状に含む。また、炭化物と焼土粒を若干含む。 |
| 5 | 黄灰色粘質土 | にぶい黄色砂質土、にぶい黄色砂、黒褐色粘質土を斑状及びブロック状に多く含む。 |

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| 現代の道路構築土 | | |
| a | 黄灰色土 | 灰色土を混入。 |
| b | 暗灰黄色土 | 礫砂を混入。 |
| 溝跡堆土 | | |
| ① | 黄灰色砂質土 | 黄褐色土を斑状に若干含む。 |
| ② | 黄灰色砂質土 | 粘性ややあり。黒褐色土を斑状及び小ブロック状に若干含む。 |

**第３図　調査区北壁断面図**

### (2) 発見遺構と遺物

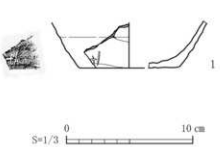
#### S X 2034

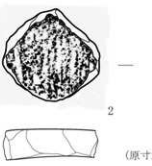
調査区東半部で検出した南北方向に斜行する溝状遺構で、Ⅲ層に覆われている。東側が調査区外にかかるため、全体の形態や規模は不明である。方向は、西辺でみると北で約 19 度東に偏している。規模は上幅 2.5 m以上で、深さは調査区北壁でみると 60cm前後である。底面は平坦に近いが、やや凹凸がみられる。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は 5 層に細分され、その状況から自然堆積と考えられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、土器片製円板（第４図２）が出土している。このうち、土師器については、非ロクロ調整の杯の破片 1 点が出土している。甕は破片 10 点ほどの出土であるが、非ロクロ調整のものが多く、明確なロクロ調整のものは確認できなかった。また、須恵器については、杯の底部が 2 点出土している。これらは、ヘラ切りで底部周縁から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整しているもの（第４図 1）と、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整しているものである。

## ３　まとめ

今回の調査で発見した遺構は、溝状遺構 1 条である。このＳＸ 2034 については、一部分の検出であり、全体の平面プランが把握できないことから詳細は不明である。年代は、これを覆っているⅢ層が本遺跡の寿福寺地区を中心に確認されている、中世に属する「第Ⅲ層」と同様のものと推測されることから、中世以前の年代が与えられる。さらに、本調査区に隣接する第 1 次調査区からは 8 世紀後半に位置付けられる

竪穴住居跡等が検出されており、ＳＸ 2034 についても、出土遺物に８世紀代の特徴がみられることから、大きく８世紀後半頃に位置付けられると推定される。

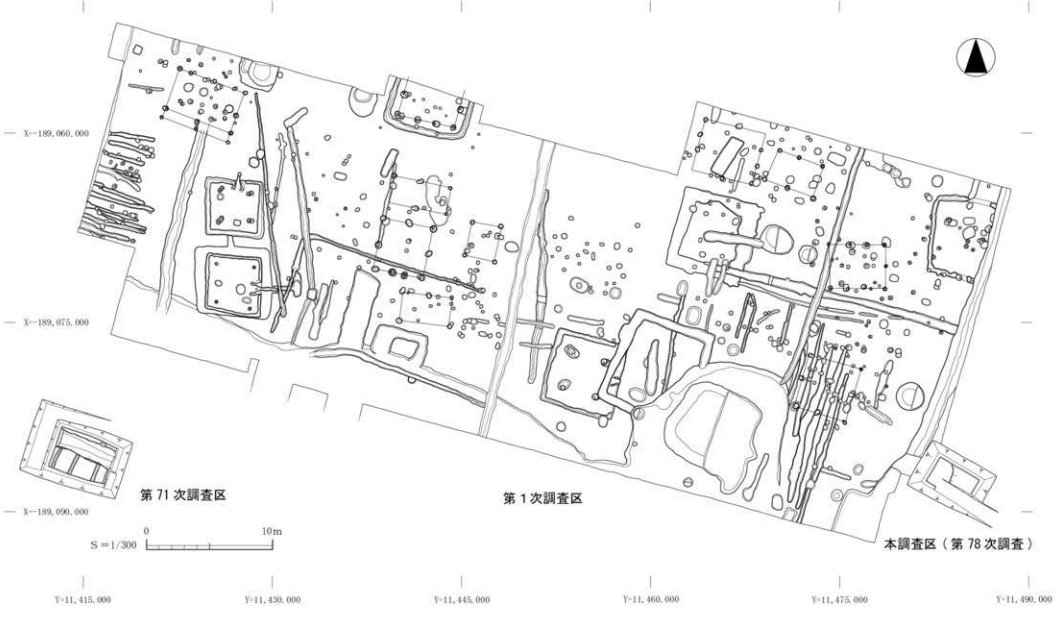



単位：cm

| 番号 | 種　別 | 遺　構 | 層　位 | 特　徴 外　面 | 特　徴 内　面 | 口　径 残存率 | 底　径 残存率 | 器高 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器・杯 | SX2034 | 1 層 | ロクロナデ<br>底部：ヘラ切り→手持ヘラケズリ | ロクロナデ | — | 7.9<br>3/24 | — | 体部下半にヘラ書き |
| 2 | 土器片製円板 | SX2034 | 1 層 | 径：2.1 ～ 2.5　　厚さ：0.7 ～ 0.8 | | | | | 須恵器・甕を転用 |

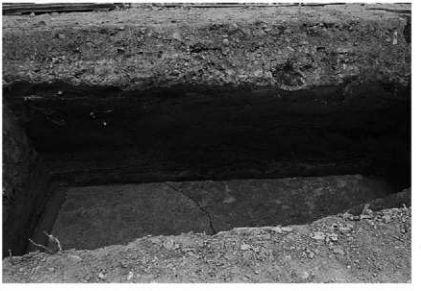
**第４図　出土遺物**




第 5 図　第 1・71・78 次調査区平面図

**ＳＸ 2034 検出状況**
（東より）

**ＳＸ 2034 検出状況**
（南より）



**調査区北壁土層堆積状況**
（南より）

# 新田遺跡第 79 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成 23 年 9 月 27 日に地権者より当該地における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径 60cm、長さ 3.5 m の柱状改良杭を 53 本打ち込むことや擁壁設置部分の掘削（深さ 1 m）が伴うことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、発掘調査が必要である旨を地権者に対し説明し、実施についての了解を得た。その後、平成 23 年 10 月 12 日に地権者より調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。なお、本件は東日本大震災を原因とするものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財取扱規定により、原則として第一面での確認調査にとどめている。

第 1 図　調査区位置図

調査は 10 月 20 日から建物建築部分（1 トレンチ）から開始した。はじめに重機を使用して盛土（Ⅰ 1 層）・現代の畑耕作土（Ⅰ 2 層）の除去を行った。21 日より作業員を動員してⅡ・Ⅲ層上面での遺構検出作業を行い、調査区の東端で溝跡、西半部では柱穴を発見した。並行して調査区北端に排水溝を兼ねた土層観察用サブトレンチを設定した。28 日までには、各遺構の平面図、北壁断面図作成と写真撮影が終了した。11 月 1 日の午前中に埋め戻しを、午後から擁壁設置部分（2 ～ 6 トレンチ）の掘削にとりかかり、終了したトレンチから随時遺構検出作業を行った。3 トレンチでは井戸跡、4 トレンチでは中世の大溝跡の西壁付近を検出し、遺構の平面図作成、写真撮影を行う（～ 2 日）。5 日、補足調査、器材の撤収を行い、8 日には埋め戻しを行って現地の調査を完了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

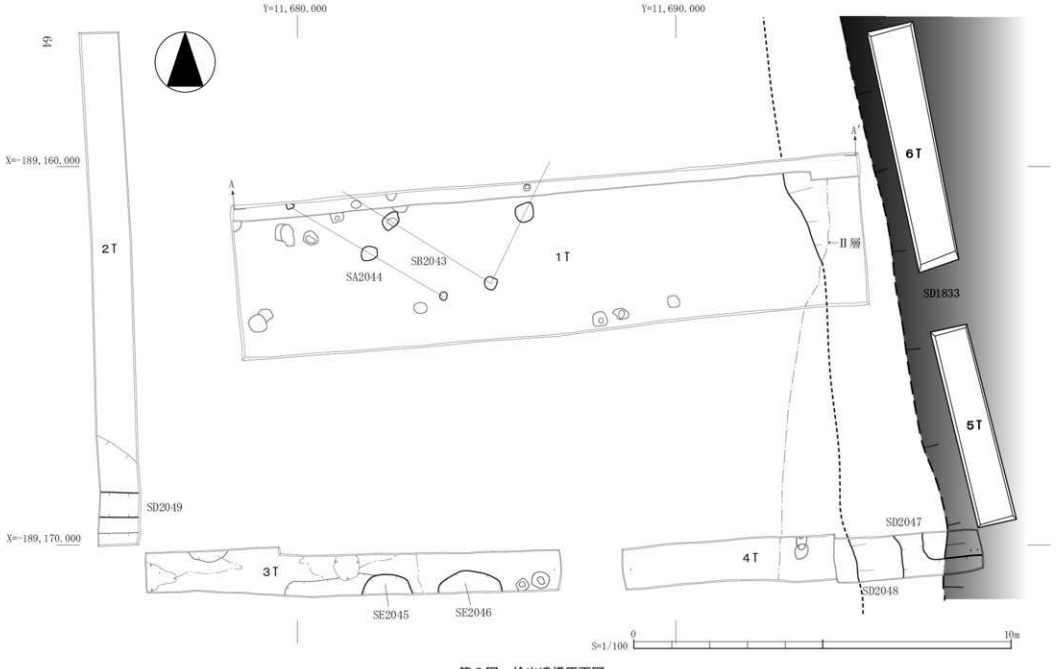
Ⅰ 1 層：現代の盛土層で、厚さは 40 cm 前後である。

Ⅰ 2 層：現代の畑耕作土層で、厚さは 20 ～ 35cm である。

Ⅱ　層：褐色土で、厚さは 25cm である。白色粒を多く含む。調査区東端に分布する。

Ⅲ 1 層：暗褐色土で、厚さは 20 ～ 40cm である。炭化物を若干含む。調査区東半部に分布する。
　　中世の遺構検出面。

Ⅲ 2 層：黒褐色土で、厚さは 25cm 未満である。炭化物を含む。調査区中央部に分布する。


Y=11,680.000
Y=11,690.000
X=-189,160.000
X=-189,170.000
2T
1T
3T
4T
5T
6T
SA2044
SB2043
SD2049
SD1833
SD2047
SD2048
SE2045
SE2046
II層
A
A'
S=1/100
0
10m

第２図　検出遺構平面図

Ⅲ3層：黒褐色土で、厚さは22cm未満である。炭化物を含む。調査区中央部に分布する。
Ⅲ4層：暗褐色土で、厚さは6～30cmである。褐色土を斑状もしくはブロック状に含む。炭化物や土器小破片が混じる。調査区全域に分布する。中世の遺構検出面。
Ⅳ層：褐灰色砂質土で、厚さは15cm未満である。これより下層は、地山（基盤層）。遺構検出面。
Ⅴ層：褐灰色粘土で、厚さは6cm未満である。
Ⅵ層：褐灰色砂質土で、厚さは20cm以上である。黄褐色土と黒色土を斑状に含む。

### (2) 発見遺構と遺物

#### S B 2043 掘立柱建物跡

1トレンチ西半部のⅢ4層上面で発見した掘立柱建物跡である。南側の柱列で東西1間以上、東側の柱列で南北1間以上を確認した。3基のうち1基で柱抜取り穴を検出している。方向は、東で約37度南に偏している。柱間は東側柱列で約2.1m、南側柱列で約3.1mである。掘方の平面形は、おおむね隅丸方形を基調としており、一辺30～50cmである。埋土は暗褐色土であり、褐色土粒が多量に混入している。柱抜取り穴埋土は暗褐色土で、炭化物粒が多く混入している。

#### S A 2044 柱列跡

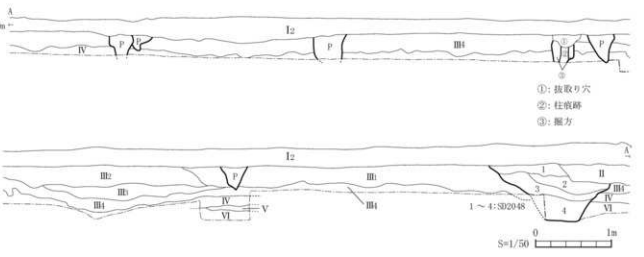
1トレンチ西半部のⅢ4層上面で発見した東西2間以上の柱列跡である。方向は、東で約35度南に偏している。規模は総長4.7mであり、柱間は西から約2.5m、約2.2mである。掘方の平面形は不整円形で、径20cmのものと径50cmのものとがある。埋土は暗褐色土であり、明褐色土粒が混入している。

#### S E 2045 井戸跡

3トレンチ東半部のⅣ層上面で発見した井戸跡である。南半部が調査区外に及んでいるものの、平面形はおおよそ円形と推定される。規模は東西方向で1.35mまで検出した。埋土は黄灰色土であり、にぶい黄色土ブロックが多く混入している。

#### S E 2046 井戸跡

3トレンチ東半部のⅣ層上面で発見した井戸跡である。南半部が調査区外に及んでいるものの、平面形はおおよそ円形と推定される。規模は東西方向で1.66mまで検出した。埋土は黄灰色土であり、黒褐色土ブロックが多く混入している。




第3図　1トレンチ　北壁断面図

**ＳＤ 2047 溝跡**

４トレンチのⅢ１層上面で発見した溝跡である。ＳＤ 1833・2048 溝跡と重複し、それらよりも新しい。南北溝に東西溝が合流するところかあるいはＬ字型に屈曲する部分と推定される。規模は南北溝が長さ 1.1 m以上、幅 1.7 m前後、東西溝が長さ 1.4 m以上である。埋土は炭化物を含む灰黄褐色土である。

**ＳＤ 2048 溝跡**

１・４トレンチのⅢ１層上面で発見した南北溝跡である。ＳＤ 2047 溝跡と重複し、それよりも古い。規模は長さ 11 m以上、上幅約２m、下幅 0.5 m、深さを 0.75 m測る。埋土は２層に大別され、上層（１～２層）が灰褐色～褐色土で、下層（３～４層）が褐灰色土の自然堆積である。

**ＳＤ 2049 溝跡**

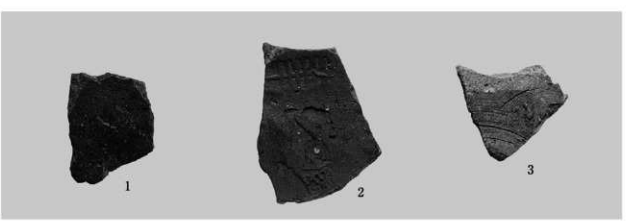
２トレンチのⅢ４層上面で発見した東西溝跡である。規模は長さ１m以上、幅約 0.54 ～ 0.66 mである。埋土は暗褐色土粒を含む黒褐色土である。

**ＳＤ 1833 溝跡**

４～６トレンチのⅢ１層上面で発見した南北溝跡である。規模は長さ 14.7 m以上、幅約 1.9 m以上である。埋土はしまりの強い暗灰黄色土である。

| 番号 | 種別 | 遺構・層位 | 特徴 外面 | 特徴 内面 | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 施釉陶器 壺 | Ⅲ４層 | ナデ | ヨコナデ | — | — | — | 1 | R1 | 瀬戸窯産 |
| 2 | 施釉陶器 壺 | Ⅱ層 | ナデ、押印 | ナデ | — | — | — | 2 | R2 | 東海地方産 |
| 3 | 施釉陶器 深皿 | Ⅰ層 | | 全面施釉 | — | — | — | 3 | R3 | 瀬戸窯産 |

**第４図　出土遺物**




**遺物写真図版**

**その他の出土遺物**（第4図1～3）

Ⅰ層より施釉陶器深皿、Ⅱ層より土師器甕、平瓦、無釉陶器甕、Ⅲ4層より土師器坏・甕、須恵器甕、須恵系土器坏・高台付坏、無釉陶器鉢・甕、平瓦の小破片が若干出土している。

## 3　まとめ

(1) Ⅲ層については、本遺跡の寿福寺地区で確認されている14世紀後半に堆積した「第Ⅲ層」に相当する。

(2) 今回発見した遺構については、ほとんどがⅢ層上面で検出しているので、15～16世紀の時期である。

(3) ＳＤ1833溝跡は、本調査区の北側に位置する第7次調査区で発見されているＳＤ953南北溝跡と同一のものである（第1図）。ＳＤ953南北溝跡は、これまでの調査成果から屋敷を区画する際の基準となる溝跡であることが判明している。4～5時期の変遷があり、新しくなるにつれて西側に造り替えられている。この点からすると、今回検出した部分は、最新段階の時期とみられる。また、ＳＤ2048溝跡については、さらにこの西側に位置し、並行して走っているようであるから、これも区画溝と考えておきたい。

(4) 掘立柱建物跡、柱列跡、井戸跡については、ＳＤ1833溝跡の西側に展開する区画内に位置している。この屋敷の規模は、周辺の調査成果から東西70ｍ以上、南北約65ｍを有していたと考えられる。

**対象地区全景**
（南より）

**1 トレンチ全景**
（西より）

**1 トレンチ全景**
（東より）

**写真図版 1**

1トレンチ東端部
（南より）

1トレンチ　SD 2048 溝跡断面
（南より）

1トレンチ層序
（南より）

写真図版 2

3 トレンチ東半部（東より）

4 トレンチ東半部（東より）

5 トレンチ全景（南より）

6 トレンチ全景（南より）

# 新田遺跡第 80 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成 23 年 11 月 8 日に地権者より当該地における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径 60cm、長さ 4 mの柱状改良杭を 48 本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、発掘調査が必要である旨を地権者に対し説明し、実施についての了解を得た。その後、平成 23 年 11 月 17 日に地権者より調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。なお、本件は東日本大震災を原因とするものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財取扱規定により、原則として第一面での確認調査にとどめている。

第 1 図　調査区位置図

調査は 12 月 1 日から開始し、はじめに重機を使用して盛土 ( Ⅰ層 ) の除去を行った。2 日より作業員を動員してⅢ層上面での遺構検出作業を行い、並行して調査区北・東端に排水溝を兼ねた土層観察用サブトレンチを設定した。精査の結果、調査区の中央付近に近世以降の堆積層 ( Ⅱ層 ) が残っており、これの除去をしたところ直接Ⅳ層が遺構検出面となっていた。また、北壁断面の検討を行ったところ、Ⅲ 1 層下のⅣ層上面から掘りこまれている遺構（ＳＸ 2041・2042）の存在を確認した。このため、調査区東半部ではⅢ 1 層を除去し、Ⅳ層上面での遺構検出作業を実施した。その結果、発見したほとんどの遺構 ( 柱穴、溝跡、井戸跡 ) は、中世の時期と判明した。9 日までには、各遺構の平面図、北壁断面図作成と写真撮影が終了した。13 日、補足調査、器材の撤収を行い、14 日には埋め戻しを行って現地調査を完了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ　層：現代の盛土層で、厚さは 80 cm 前後である。

Ⅱ　層：にぶい黄橙色砂質土で、厚さは 10 ～ 20cm である。近世以降の堆積土。

Ⅲ 1 層：褐灰色土で、厚さは 12cm 未満である。Ⅲ層粒、炭化物、焼土粒を含む。調査区全体に分布する。中世の遺構検出面。

Ⅲ 2 層：灰黄褐色土で、厚さは 20cm 以上である。Ⅲ層粒を上層より多く含む。調査区西半に分布する。

Ⅳ　層：浅黄色土で、厚さは 50cm 以上である。均質。地山（基盤層）。古代の遺構検出面。

### (2) 発見遺構と遺物

**S A 2040 柱列跡**

調査区東半部のⅢ1層上面で発見した南北3間以上の柱列跡である。方向は、北で約15度西に偏している。柱間は北から約2m、約2m、約2.2mである。掘方の平面形は隅丸方形で、長辺40～70cm、短辺30～50cmのものと一辺25cmのものとがある。全ての柱穴で抜取り穴を確認しており、掘方埋土はにぶい黄橙色土で、抜取り穴埋土は炭化物・焼土粒を含む褐灰色土である。

**S E 2035 井戸跡**

調査区中央部のⅢ1層上面で発見した井戸跡である。平面形はやや歪んだ円形であり、規模は径1.5～1.6mである。埋土は褐灰色土であり、炭化物粒を多量に含む。

**S D 2036 溝跡**

調査区西端部のⅢ1層上面で発見した南北溝跡である。S D 2037溝跡と重複し、それよりも古い。方向は、北で約10度東に偏している。規模は長さ5.6m以上、幅1m以上、深さ0.4m以上である。埋土は2層に分けられ、1層がⅢ1層に類似する炭化物粒を若干含む褐灰色土で、2層が均質なにぶい黄橙色土である。

**S D 2037 溝跡**

調査区南西部のⅢ1層上面で発見した東西溝跡である。S D 2036・2037溝跡と重複し、それらよりも新しい。方向は、発掘基準線にほぼ沿う。規模は長さ3.5m以上、幅0.7m以上である。埋土はⅢ層の小ブロックと炭化物粒を多量に含む褐灰色土である。

**S D 20378 溝跡**

調査区南端部のⅢ1層上面で発見した東西溝跡である。S D 2037・2039溝跡と重複し、それらよりも古い。方向は、発掘基準線にほぼ沿う。東端は南に屈曲するようである。規模は長さ2.2m以上、幅0.3mでる。埋土はⅢ層の小ブロックと炭化物・焼土粒を多量に含む褐灰色土である。

**S D 2039 溝跡**

調査区南端部のⅢ1層上面で発見した東西溝跡である。S A 2041柱列跡、S D 2038溝跡と重複し、前者よりも古く後者よりも新しい。方向は、東で約7度北に偏している。規模は長さ4.5m以上、幅0.3～0.4mである。埋土はⅢ層の小ブロックを含む褐灰色土である。

**S X 2041**

調査区北壁断面で確認した落ち込みである。Ⅲ1層に覆われⅣ層上面から掘りこまれている。規模は東西1.2m以上、深さ28cm以上である。埋土は均質なにぶい黄橙色土である。

遺物は、須恵器坏、円面硯（第4図1・2）が出土している。

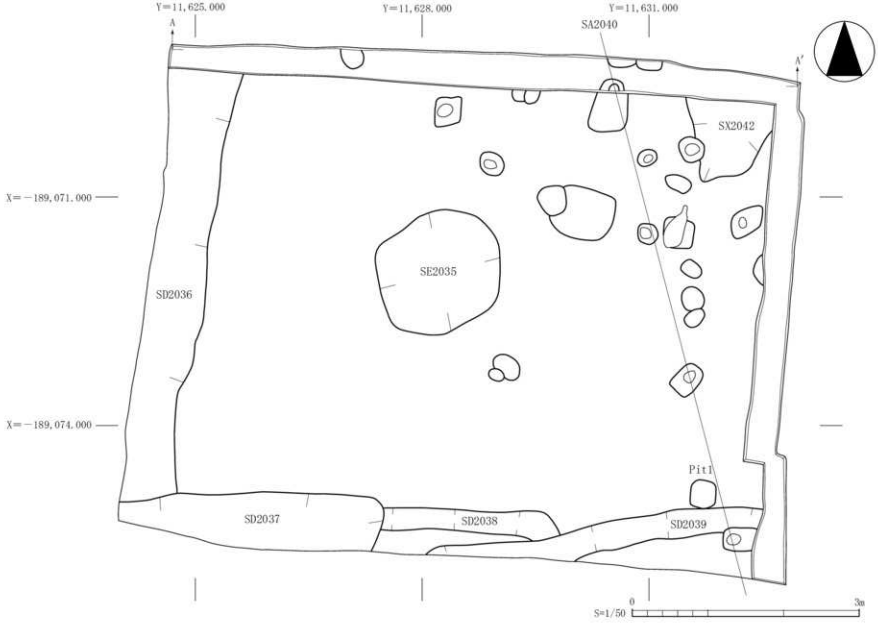
**S X 2042**

調査区北東部のⅣ層上面で発見した。平面形は南北に長い不整形を呈する。規模は東西1.7m以上、南北1.5m以上、深さ27cmである。埋土は焼土粒・小ブロックを含む灰黄褐色土である。

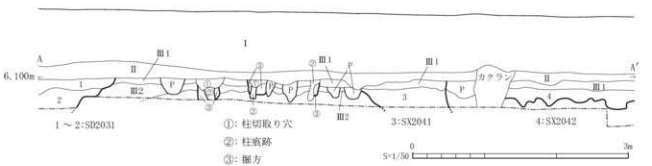
遺物は、須恵器坏（第4図3）が出土している。

**その他の出土遺物**（第4図4～6）

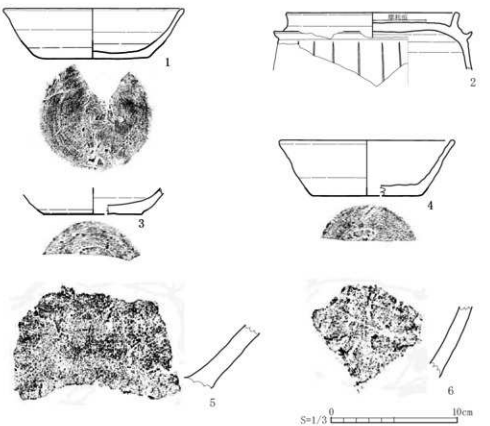
Ⅱ層より土師器甕、須恵器坏・高台付坏、須恵系土器坏、平瓦、無釉陶器甕、近世以降の磁器、Ⅲ1層より須恵器坏、無釉陶器甕、この他に、Pit 1埋土より無釉陶器甕の破片が出土している。


Y=11,625.000
Y=11,628.000
Y=11,631.000
A
A'
SA2040
SX2042
X=−189,071.000
X=−189,074.000
SE2035
SD2036
Pit1
SD2037
SD2038
SD2039
0
3m
S=1/50

第２図　検出遺構平面図




**第３図　調査区北壁断面図**




| 番号 | 種類 | 遺構・層位 | 特徴 外面 | 特徴 内面 | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真図版 | 登録番号 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器・杯 | SX2041 掘土 | ロクロナデ 底部：ヘラ切り | ロクロナデ | (14.2) 13/24 | (9.0) 20/24 | 4.0 | 1-1 | R1 | 内面の一部にスス状の付着物あり |
| 2 | 円面硯 | SX2041 掘土 | ロクロナデ，脚位の線刻文 | | (13.6) 5/24 | — | — | 1-3 | R2 | 脚部に透かしの痕跡あり |
| 3 | 須恵器・杯 | SX2042 掘土 | ロクロナデ 底部：ヘラ切り | ロクロナデ | — | 7.8 10/24 | — | | R3 | |
| 4 | 須恵器・杯 | Ⅱ1 | ロクロナデ 底部：ヘラ切り | ロクロナデ | (13.4) 9/24 | (8.4) 9/24 | — | 1-2 | R6 | |
| 5 | 無釉陶器　甕 | Ⅱ1 | ナデ | 自然釉 | — | — | — | 1-4 | R5 | 東海地方産 |
| 6 | 無釉陶器　甕 | Pit1 | ナデ | 自然釉 | — | — | — | 1-5 | R4 | 東海地方産 |

**第４図　出土遺物**

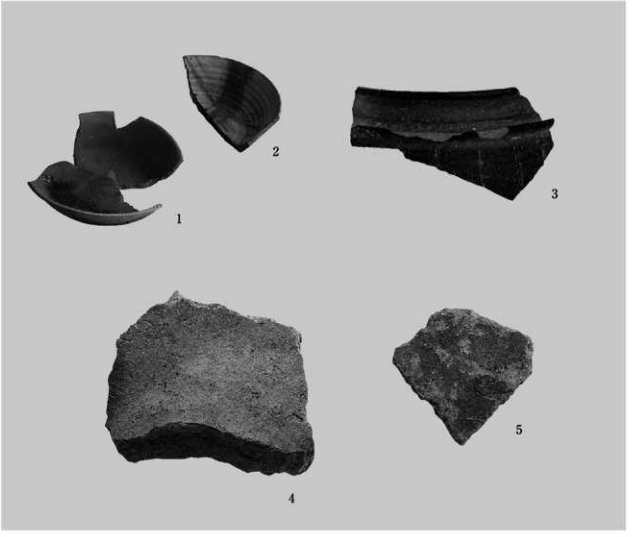
## 3　まとめ

(1) Ⅲ1・Ⅲ2層については、本遺跡の寿福寺地区で確認されている14世紀後半に堆積したとされている「第Ⅲ層」に相当する。

(2) 今回発見した遺構は、ほとんどがⅢ1層上面で検出しているので、15～16世紀の時期である。

(3) SD2036南北溝跡については、SD953･1833大溝跡から西へ約55mの地点に位置している。(第1図)。これまでの調査成果からすると、溝で囲まれた屋敷地は、約55m四方単位に区画されていたことが判明している。したがって、今回の発見は大溝跡の西側にもう1ブロック存在する可能性を示唆したといえる。

(4) SX2041・2042出土の須恵器坏については、器形や切り離し技法（底部切り離しがヘラ切りで再調整されない）からみて、8世紀後葉～9世紀前半ごろの時期と考えられる。




写真図版1

**調査区全景**
（南西より）

**調査区東半部全景**
（北東より）

**調査区北壁断面**
（南西より）

# 新田遺跡第 81 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、長屋新築工事に伴う発掘調査である。平成 23 年 11 月 10 日に地権者より当該地における長屋新築工事計画と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。その計画では建物基礎工事で直径 60㎝のパイルを 73 本打ち込むことから埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定した。その後、平成 23 年 11 月 19 日に地権者より発掘調査の依頼・承諾書の提出を受け、調査の実施に至ったものである。

なお、本件は東日本大震災を原因とするものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財取扱規定により、原則として第一面での確認調査にとどめている。

第 1 図　調査区位置図

調査は 12 月 8 日から重機を使用して、表土の掘削を行った。掘削土はすべて場外へ搬出した。10 日より作業員を動員して遺構検出作業と調査区際に沿って土層観察を兼ねて側構を掘る。その結果、遺構の残存状態は良好ではなかったが、南北方向に延びる溝跡を 2 条発見する。溝跡の新旧関係を確認した後、16 日には平面図作成のための基準点を設定し、平面・断面図を作成する。図面作成が終了した。20 日には調査区の全景写真撮影と土層の注記を行う。21 ～ 22 日、埋め戻しを行い現地調査を終了した。

## 2　調査成果

### (1) 層序

Ⅰ1層　現代の盛土で、厚さは南側で約 1 m、北側では約 2 mである。アスファルトやコンクリート塊が大量に投棄されていた。

Ⅰ2層　調査区北側に堆積する現代の耕作土で、厚さは 8 ～ 26㎝である。

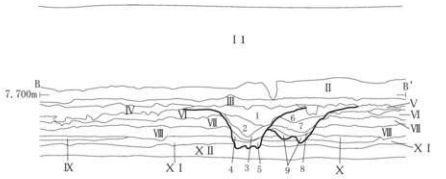
Ⅱ　層　調査区南側に堆積するしまりのある暗灰黄色土である。厚さは 10 ～ 33㎝である。

Ⅲ　層　調査区南側に堆積する黒褐色土である。厚さは 2 ～ 15㎝で、ＳＤ 2051・2052 溝跡を覆っている。

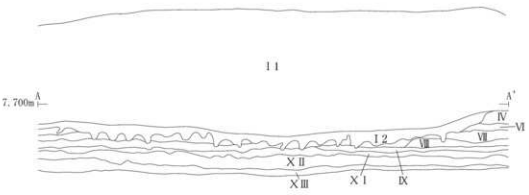
Ⅳ　層　調査区南東側に堆積する粗い砂を含んだ黒褐色土である。厚さは 4 ～ 26㎝である。

Ⅴ　層　調査区西側に堆積する酸化鉄を含んだ褐灰色土である。厚さは 4 ～ 18㎝である。ＳＤ 2052 溝跡は本層上面より掘り込まれている。

Ⅵ　層　調査区南側に堆積する粗砂、酸化鉄を含む黒褐色土である。厚さは 2 ～ 18㎝である。ＳＤ 2051 溝跡は本層上面より掘り込まれている。




**第２図　調査区南壁断面図**　１～５：SD2051　６～９：SD2052



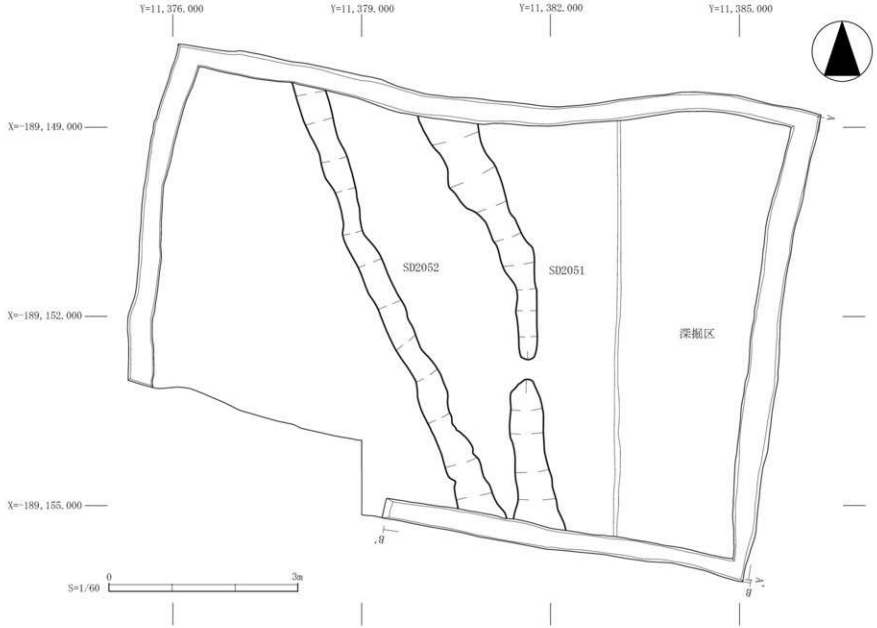

**第３図　調査区東壁断面図**

Ⅶ　層　調査区のほぼ全域に堆積する粗砂を含んだ暗灰黄色土である。厚さは５～26cmである。
Ⅷ　層　調査区南半部に堆積する酸化鉄を含んだしまりのある灰黄褐色土である。厚さは７～22cmである。
Ⅸ　層　調査区東側に堆積する酸化鉄を含んだ暗灰黄褐色土である。厚さは９～24cmである。
Ⅹ　層　調査区中央付近に堆積する酸化鉄を多く含んだ黄灰色粘土である。厚さは２～16cmである。
ⅩⅠ層　調査区のほぼ全域に堆積する酸化鉄を多く含んだ浅黄色土である。厚さは６～15cmである。
ⅩⅡ層　調査区のほぼ全域に堆積する黒色土である。厚さは８～24cmである。
ⅩⅢ層　調査区のほぼ全域に堆積する黄灰色砂である。今回の調査で確認した最下層の堆積土である。

### (2) 発見した遺構

**ＳＤ 2051 溝跡**（第４図）

調査区中央部のⅥ層上面で発見した南北方向の溝跡である。両端は調査区外に延びている。残存状況は悪く、途切れているところがある。ＳＤ 2052 と重複し、これより新しい。規模は長さ 7.4 m以上、上幅は


Y=11,376.000
Y=11,379.000
Y=11,382.000
Y=11,385.000
X=-189,149.000
X=-189,152.000
X=-189,155.000
SD2052
SD2051
深掘区
0
3m
S=1/60

**第４図　調査区平面図**

南壁では1.9 m、深さは0.7 mである。底面は凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は5層に分けられる。上層（1・2層）は、砂や酸化撤を含んだ黒褐色土、暗褐色土粘土層で、下層（3・4層）は砂や酸化鉄を含んだ黒褐色土、最下層（5層）は浅黄色土をブロック状に含んだ黒褐色土である。遺物は出土していない。

**ＳＤ2052溝跡**（第4図）

調査区中央部西側のⅤ層上面で発見した南北方向の溝跡である。両端は調査区外に延びている。土取りのため残存状況は悪い。ＳＤ2051と重複し、これより古い。規模は長さ8 m以上、上幅は南壁では1.4 m以上、深さは0.6 mである。底面は凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は5層に分けられる。いずれも黒褐色土粘土及び黒褐色土を主体とし、最下層には浅黄色土をブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

## 3　まとめ

今回の調査では、溝跡2条を発見した。溝跡の年代については、出土遺物がないため詳細は不明である。

**調査区全景（南より）**

# 山王遺跡第 89 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王四区地内における区画道路建設に伴うものである。平成 22 年 6 月、地権者より当該区における区画道路建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、畑地である 2,700㎡の範囲を盛土造成し、北側に 2 区画の個人住宅用地、南側に 4 棟分の共同住宅用地を設け、中央部に幅 6 m、長さ 47 m の南北方向の区画道路を建設するものであった。東日本大震災の影響により調査着手が大幅に遅れていたものの、区画道路については 6 月 1 日に地権者と委託契約を結び、14 日より調査を開始していた。一方、当街区における遺跡の状況については、第 73 次調査（平成 21 年度）及び第 81・85 次調査（平成 22 年度）により概ね把握することができていたため、今回は広範囲に及ぶ確認調査の必要はないものと判断した。一方、第 81・85 次調査では、古代多賀城南面に施行された道路網のうち西 9 南北道路（ＳＸ 1501）を確認しており、遺構の状況から道路末端部の様相を知るものとして注目していた。古代道路網の施工状況を検討する上で重要であることから、西 9 南北道路の延長線上で確認調査を実施することで地権者及び施工業者と協議し、調査の着手に至ったものである。7 月 16 日に重機による表土除去を行い、にぶい黄褐色砂質土（Ⅱ層）上面で東西方向のＳＤ 1619 溝跡を検出したが、古代の道路跡は確認されなかった。直ちに写真撮影と平面図作成を行い、現地調査の一切を終了した。

第 1 図　調査区位置図

## 2　調査成果

### (1) 層　序

約 1 m の厚さがある現代の盛土と、約 20㎝の旧水田耕作土を除去すると、遺構検出面であるにぶい黄褐色砂質土が現われる。東に隣接する第 88 次調査区で確認された褐灰色砂質土（中世の遺構検出面）は本調査区内には残存しない。

### (2) 発見遺構と遺物

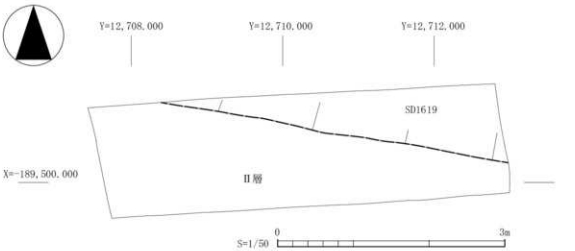
**ＳＤ 1619 溝跡**（第 2 図）

東西方向の溝跡である。方向は東で約 10 度南に偏しており、規模は長さ 4.7 m以上、上幅 1 m以上である。埋土上面は、灰白色砂粒が僅かに混入する黒褐色砂質土である。出土遺物はない。

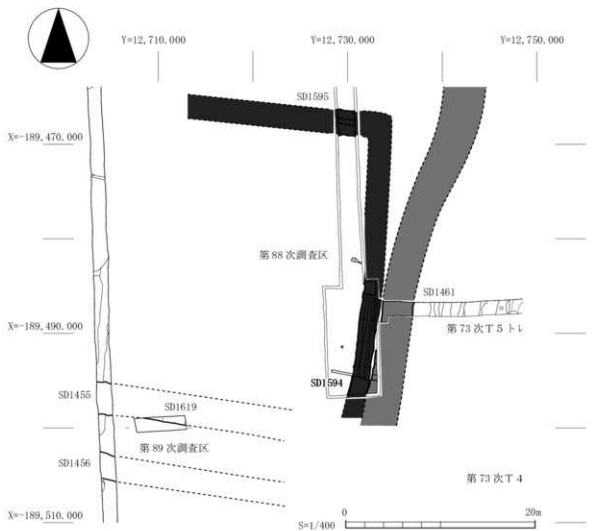
## 3．まとめ

(1) 本調査区では、西 9 南北道路の延長は確認されなかった。

(2) 東西方向のＳＤ 1619 溝跡を発見した。遺構の規模や方向、埋土の状況などから、第 73 次調査ＳＤ 1455 や、第 88 次調査ＳＤ 1594（又はＳＤ 1616）と一連の中世の区画溝であると推測される。




**第２図　調査区全体図**




**第３図　周辺調査区合成図（中世）**

# 山王遺跡第 90 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成 23 年 6 月 17 日に地権者より当該地における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径 45cm、長さ 5 mの柱状改良杭を 24 本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、平成 23 年 7 月 20 日に地権者より調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

第 1 図　調査区位置図

調査は 7 月 27 日から開始し、はじめに重機を使用して盛土と現代の水田耕作土（Ⅰ層）の除去を行った。8 月 6 日より作業員を動員してⅡ層上面での遺構検出作業を行い、並行して調査区際に排水溝を兼ねた土層観察用サブトレンチを設定した。Ⅱ層上面では遺構は検出されなかった。サブトレンチでは下層で古墳時代の黒色粘土層を確認する。19 日に再度重機を入れて下層の黒色粘土層直上付近まで掘り下げたところ畦畔を検出する。翌日に手作業で畦畔と田面の検出作業と全景写真撮影、平面図の作成を行う。24 日、断面図作成と器材の撤収、25 ～ 26 日には埋め戻しを行って現地の調査を完了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ　層：盛土・現代の水田耕作土層で、厚さは 1.1 ～ 1.3m である。

Ⅱ　層：にぶい黄褐色粘土で、厚さは 18cm 未満である。褐灰色粘土粒が斑状に混じる。これより下層が地山（基盤層）。

Ⅲ 1 層：灰黄褐色粗砂で、厚さは 20cm 未満である。均質。

Ⅲ 2 層：灰黄褐色砂で、厚さは 10 ～ 30cm である。にぶい黄褐色粘土層との互層。

Ⅳ　層：にぶい黄褐色細砂で、厚さは 20 ～ 30cm である。均質。

Ⅴ　層：灰褐色粘土で、厚さは 10cm 未満である。均質。

Ⅵ 1 層：黒褐色粘土で、厚さは 2 ～ 14cm である。上・下面とも凹凸がある。古墳時代の水田耕作土。

Ⅵ 2 層：褐灰色粘質土で、厚さは 2 ～ 10cm である。粗砂粒を若干含む。Ⅵ 1 層の母材層。

Ⅶ　層：褐灰色粘質土で、厚さは 12cm 以上である。

### (2) 発見遺構と遺物

#### S X 1590 水田跡

Ⅵ1層を耕作土とした水田跡である。水田区画は4区画（区画①～④）検出された。いずれも調査区外へと続くため全体の形状は不明であるが、平面形は方形を基調にしていると考えられる。畦畔は3条検出され、調査区の南寄り付近で略十字形に交わる。畦畔3は直線状に伸びているが、畦畔2は畦畔1より1本分西にずれて取り付く。畦畔1は長さ2.85 m以上、上端幅15～30cm、下端幅26～42cm、水田面からの比高差は2～5cmである。方向は北で約28度東に偏している。畦畔2は長さ0.6 m以上、上端幅24～26cm、下端幅37～40cm、水田面からの比高差は4～5cmである。方向は畦畔1とほぼ同じと推定される。畦畔3は長さ3.9 m以上、上端幅20～38cm、下端幅32～45cm、水田面からの比高差は2～5cmである。方向は東で約24度南に偏している。

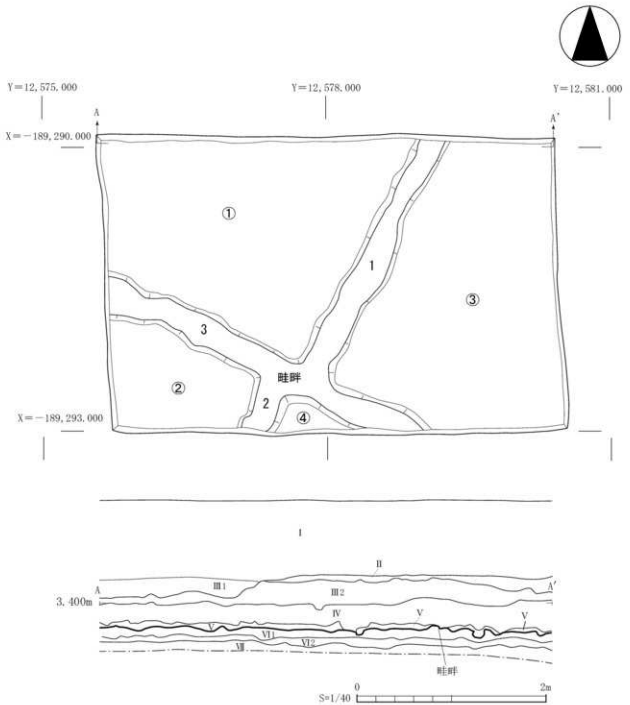
水田面の標高値は①で平均3.14 m、②で3.12 m、③で3.11 m、④で3.10 mである。4区画全体では比高差は4cmほどであるので、ほぼ平坦な水田面を造りだしていたとみてよい。用水の流れは①・②がやや高い数値を示していることから、北西から南東と推定される。

遺物は出土していない。

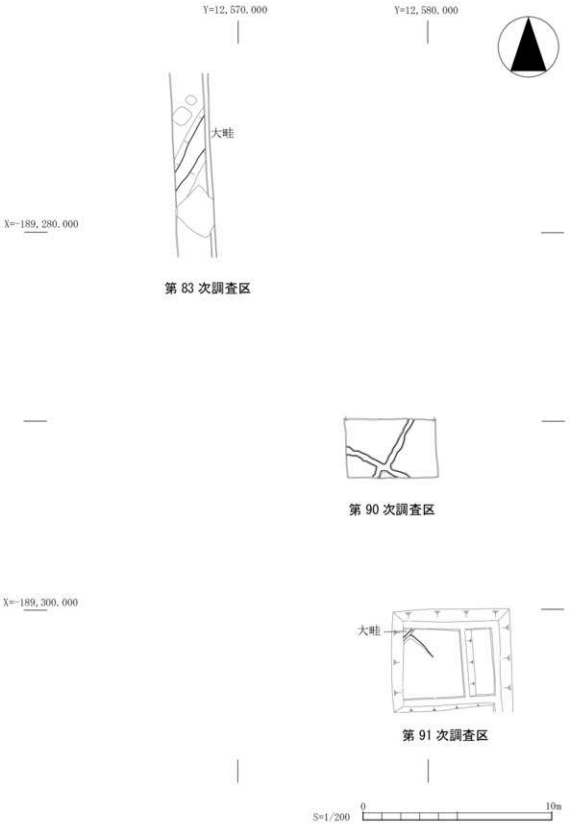
### 3 まとめ

(1) Ⅱ層上面は、この地域では古墳時代中期以降の遺構検出面となっている。今回の調査では遺構・遺物とも発見されなかった。

(2) S X 1590水田跡については、検出層位からすると古墳時代前期の時期と考えられる。近隣の調査区には第83次・91次調査区があり、いずれの調査区でも大畦が検出されている。この大畦間は約21 mあり、今回発見した水田跡はこの中に位置する小区画の一部とみられる。




**第2図　ＳＸ1590 水田跡平面・断面図**




第 3 図　本調査区と周辺調査区の水田跡

S X 1590 水田跡確認状況
（西より）

S X 1590 水田跡検出状況
（西より）

調査区北壁土層断面
（南東より）

# 山王遺跡第 91 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、山王字山王二区地内における個人住宅建設に伴うものである。平成 23 年 8 月 18 日に地権者より山王遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事の際に直径 400㎜、最長 5.0 mの杭を 30 本打ちこむことから、地下の遺構への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が図れないか協議を行ったが、対象地の現況や地盤の強度等から考慮して、現計画での実施が最も望ましいとの理由により、記録保存のための本発掘調査を実施することに至った。その後、平成 23 年 9 月 10 日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、10 月 12 日から現地調査を開始した。

第 1 図　調査区位置図

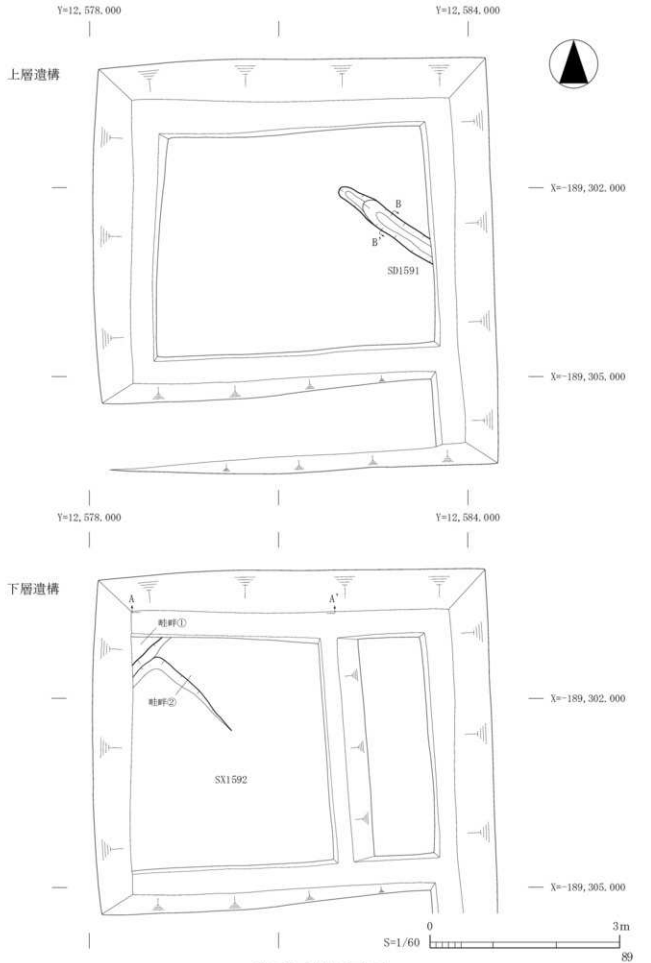
はじめに、重機により厚さ約 80㎝の盛土（Ⅰ層）の除去を行い、掘削した土砂は場外へ搬出した。引き続き、Ⅱ層上面で遺構検出作業を行い、調査区東側で東西方向に斜行する小溝跡（ＳＤ 1591 溝跡）を検出した（10 月 13 日）。これと並行して、実測図作成にかかる測量を行い、対象地内に任意に設置した 2 本の基準杭に、国土座標値と標高値を移動した。10 月 14 日には、ＳＤ 1591 溝跡の埋土掘り下げを行い、その後写真撮影、断面図作成を行った。続いて 10 月 18 日には、調査区全景を写真撮影し、平板測量による平面図作成を行った。10 月 19 日には、周辺部の調査において下層に古墳時代の水田跡の存在が確かめられていることから、その検出を目的に重機によってⅡ～Ⅳ層を掘り下げた。約 50㎝掘り下げた段階で、水田耕作土層を覆うⅤ層が現れたため、次に手掘りによりⅤ層を除去した。10 月 20 日には、調査区北西隅で 2 条の畦畔を検出し、その後写真撮影、平面図作成、調査区北壁の断面図作成を行った。そして、10 月 26 日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

Ⅰ　層：現代の盛土。黄褐色砂で、厚さは約 80㎝である。旧水田耕作土等を除去した後に、盛土を行っている。


Y=12,578.000
Y=12,584.000
上層遺構
X=-189,302.000
X=-189,305.000
B
B'
SD1591
Y=12,578.000
Y=12,584.000
下層遺構
A
A'
畦畔①
畦畔②
SX1592
X=-189,302.000
X=-189,305.000
0
3m
S=1/60

**第２図　調査区平面図**

Ⅱ　層：にぶい黄褐色砂で、厚さは 30 ～ 40cmである。粒子のやや粗い砂からなる土層である。下層との境に酸化鉄が沈殿している。上面は、ＳＤ 1591 溝跡の検出面である。

Ⅲ　層：浅黄色砂で、厚さは 5 ～ 15cmである。粒子の細かい砂からなる土層である。

Ⅳ　層：にぶい黄色砂で、厚さは 5cm前後である。粒子の細かい砂からなる土層で、粘性がややある。

Ⅴ　層：灰オリーブ粘質土で、厚さは 15 ～ 20cmである。暗褐色粘質土と互層に堆積している。

Ⅵ　層：黒褐色粘土で、厚さは 15 ～ 20cmである。暗オリーブ褐色粘土が若干混入している。古墳時代の水田耕作土と畦畔構築土である。

Ⅶ　層：緑灰色砂で、粒子の粗い砂からなる土層である。

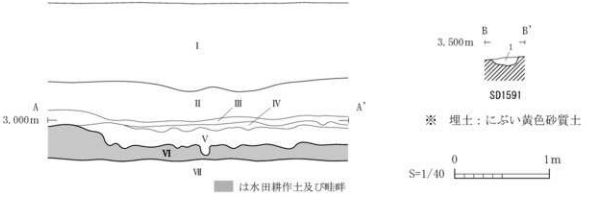
### (2) 発見遺構と遺物

**ＳＤ 1591 溝跡**（第２・３図）

調査区東側のⅡ層上面で検出した東西方向に斜行する小溝跡である。確認できた長さは約 2.4 mである。方向は、東で約 35 度南に偏している。規模は上幅 30 ～ 34cm、下幅 9 ～ 13cmで、深さは検出面から約 10 cmである。底面は丸みをもち、壁は湾曲しながら立ち上がる。埋土は、にぶい黄色砂質土の単層である。遺物は、土師器甕の小破片１点が出土している。

**ＳＸ 1592 水田跡**（第２・３図）

Ⅵ層を耕作土とした水田跡である。また、これに伴う２条の畦畔（畦畔①、畦畔②）を確認した。このうち、畦畔①は調査区北西隅でわずかに検出したにすぎない。方向は、東で約 43 度北に偏している。高さは、調査区北壁でみると 22cmである。一方、畦畔②は畦畔①にほぼ直角に交わり、そこから南東方向に延びるものである。長さは約 1.7 mまで確認したが、その先は削平によるためか検出できない。方向は、東で約 46 度南に偏している。高さは、約 5cmである。これらは、耕作土を盛り上げて構築していると考えられる。本水田跡は、調査区内では畦畔②によって２つの区画に分けられる可能性があるが、畦畔②の残存状況が悪いため判然としない。なお、水田面の標高は 2.75 m前後であり、調査区全域でほぼ同じ数値を示す。




**第３図　調査区北壁・ＳＤ 1591 溝跡断面図**

## 3　まとめ

(1) ＳＤ 1591 溝跡については、平成 22 年度に本調査区の南側で実施した山王遺跡第 83 次調査（註 1）で 検出された小溝群と一連のものと考えられる。この年代は、8 世紀後葉から 9 世紀代に位置付けられている。

(2) ＳＸ 1592 水田跡については、近接地で実施した第 83 次調査と第 90 次調査においても、同様の水田跡が検出されている。これらは一連のものであり、年代は古墳時代前期と考えられている。

註 1　多賀城市教育委員会『高崎古墳群ほか』多賀城市文化財調査報告書第 104 集　2011

**ＳＤ 1591 溝跡検出状況**
（北より）

**ＳＤ 1591 溝跡掘り下げ状況**
（北東より）

**ＳＸ 1592 水田跡検出状況**
（東より）

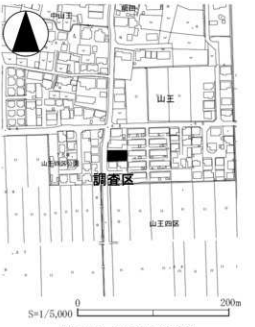
**ＳＸ 1592 水田跡検出状況**
（南より）

**調査区北壁土層堆積状況**
（南より）

# 山王遺跡第 92 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王四区地内における共同住宅（テラスハウス）建設に伴う発掘調査である。平成 23 年 11 月、地権者より当該区における共同住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、直径 40cmのＲＣ杭 67 本を 3.5m の深さまで打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。一方、本件は東日本大震災により被災した借家の再建事業であることから、早急な調査着手及び完了が求められた。このため、複数の遺構検出面の存在が想定されるものの、原則確認調査で対応する方向で施工業者と協議を重ねた。11 月 18 日、地権者より発掘調査の依頼書の提出を受け、解体が完了した 29 日より調査を開始した。



第 1 図　調査区位置図

重機による表土除去の結果、黒褐色粘質土（Ⅱ層）上面で、ＳＤ 1620 溝跡、ＳＫ 1621 土壙を発見した。一方、調査区内の排水及び土層観察用に設けた南壁際のサブトレンチ断面において、Ⅱ層下層にある黄褐色砂質土（Ⅲ層）上面で溝跡等の遺構の存在が明らかになった。ＲＣ杭の直径が 40cmと大きく、小規模な柱穴などがあった場合、大部分が破壊される可能性もあったことから、直ちにⅡ層の掘り下げを開始した。12 月 2 日、Ⅲ層上面で南北方向のＳＤ 1622 ～ 1627 溝跡やＳＫ 1628・1629・1650・1651 土壙、西端部で長辺 35cmの柱穴等を確認した。この結果、Ⅱ・Ⅲ層上面で検出した遺構については、RC 杭によって破壊される部分はあるものの、平面的な調査のみでも十分記録保存に相当すると判断できたことから、本調査については確認調査にとどめることとした。その後、遺構の精査を進め、12 月 7 日に調査区の全景写真撮影、平面図及び南壁の断面図作成を行う。12 月 8 日、遺構及び堆積層の土色確認と調査器材の撤収を行い、現地調査の一切を終了した。

## 2　調査成果

**(1) 層　序**（第 2 図）

Ⅰ層：現代の盛土層であり、厚さは 60 ～ 70cm である。

Ⅱ層：東半部の全域で確認した黒褐色粘質土であり、厚さは 10 ～ 30cmである。黄褐色粘質土粒及び炭化物粒が混入している。

Ⅲ層：全域で確認した黄褐色砂質土であり、厚さは 30cm以上である。黒褐色粘質土粒が多く混入している。

**(2) 発見遺構と遺物**（第 2 図）

今回の調査では、Ⅱ・Ⅲ層上面で溝跡、土壙などを発見した。以下、層序ごとに発見した遺構・遺物について記載する。

【Ⅲ層上面検出遺構】

**ＳＤ 1622 溝跡**

調査区東側で発見した、南北方向の溝跡である。ＳＤ 1624、ＳＫ 1652 と重複し、それよりも新しい。方向は北で約 12 度西に偏しており、規模は長さ 3.8 m以上、上幅 40 ～ 50cm、深さは南壁断面でみると 20 cmである。埋土は黒褐色砂質土であり、黄褐色粘質土粒や赤褐色粘質土粒のほか、炭化物も僅かに混入している。

**ＳＤ 1623 溝跡**

調査区東側で発見した、南北方向の溝跡である。ＳＤ 1625、ＳＫ 1652・1653 と重複し、ＳＤ 1625、ＳＫ 1652 よりも新しく、ＳＫ 1653 よりも古い。方向は北で約 8 度西に偏しており、規模は長さ 2.2 m以上、上幅 60 ～ 80cmである。埋土は褐灰色粘質土であり、黄褐色粘質土粒や赤褐色粘質土粒が混入している。

**ＳＤ 1624 溝跡**

調査区東側で発見した、南北方向の溝跡である。ＳＤ 1622 と重複し、それよりも古い。方向は北で約 12 度東に偏しており、規模は長さ 1.5 m以上、上幅 20cm、深さは南壁断面でみると 10cmである。埋土は黒褐色砂質土であり、黄褐色粘質土粒が多く混入している。

**ＳＤ 1625 溝跡**

調査区東側で発見した、南北方向の溝跡である。ＳＤ 1623 と重複し、それよりも古い。方向は北で約 8 度東に偏しており、規模は長さ 1.7 m以上、上幅 20 ～ 30cm、深さは南壁断面でみると 10cmである。埋土は黒褐色砂質土であり、黄褐色粘質土粒や赤褐色粘質土粒が混入している。

**ＳＤ 1626 溝跡**

調査区東側で発見した、南北方向の溝跡である。ＳＫ 1653 と重複し、それよりも古い。方向は北でやや西側に向かい彎曲しているが、直線的な南側で測ると北で約 6 度東に偏している。規模は長さ 3.8 m以上、上幅 20 ～ 50cm、深さは南壁断面でみると 10cmである。埋土は黒褐色砂質土であり、黄褐色粘質土粒や赤褐色粘質土粒のほか、炭化物が僅かに混入している。

**ＳＤ 1627 溝跡**

調査区西側で発見した、南北方向の溝跡である。方向は北で約 6 度東に偏しており、規模は長さ 2.8 m以上、上幅 10 ～ 20cm、深さは南壁断面でみると 12cmである。埋土は黒褐色粘質土であり、黄褐色粘質土粒や赤褐色粘質土粒が混入している。

**ＳＫ 1628 土壙**

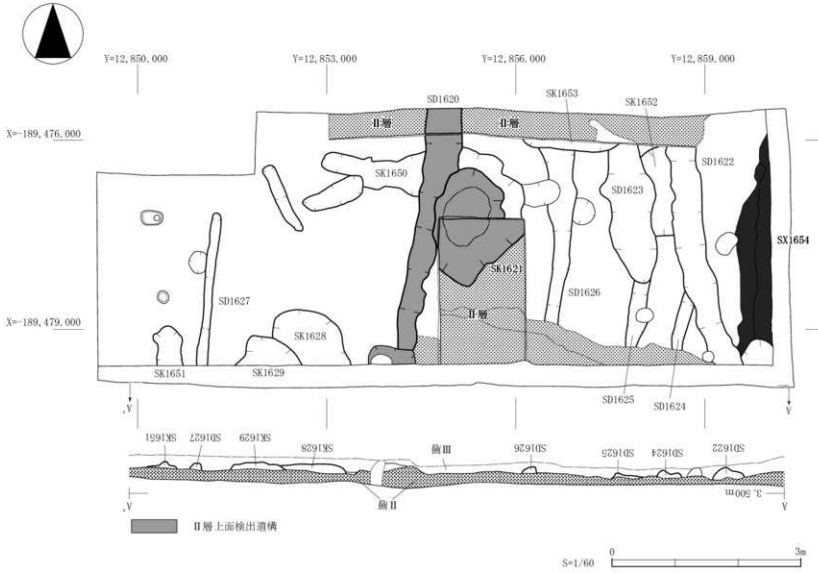
調査区西側で発見した、南北に長い不整形な土壙である。ＳＫ 1629 と重複し、それよりも古い。規模は南北 1.3 m以上、東西約 1.1 m、深さは南壁断面でみると 14cmである。埋土は黒褐色粘質土であり、黄褐色粘質土粒や赤褐色粘質土粒が混入している。

**ＳＫ 1629 土壙**

調査区西側で発見した、不整形な土壙である。ＳＫ 1628 と重複し、それよりも新しい。規模は南北 0.8 m以上、東西約 0.9 m、深さは南壁断面でみると 14cmである。埋土は黒褐色粘質土であり、黄褐色粘質土粒や赤褐色粘質土粒が混入している。

**ＳＫ 1650 土壙**

調査区中央部で発見した遺構であり、ここでは東西に長い不整形な土壙と判断した。規模は東西 3.2 m、南北は最大 1.1 m以上である。埋土は黒褐色粘質土であり、黄褐色粘質土粒や赤褐色粘質土粒が混入している。




**第２図　調査区平面・断面図**

**ＳＸ 1654 整地遺構**

調査区東端部で発見した、南北方向の整地遺構である。規模は南北 4.4 m以上、東西 0.8 m以上である。埋土は黒褐色砂質土であり、黄褐色粘質土が小ブロック状に多く混入している。

**【Ⅱ層上面検出遺構】**

**ＳＤ 1620 溝跡**

調査区中央部で発見した、南北方向の溝跡である。ＳＫ 1621 と重複し、それよりも新しい。方向は北で約 7 度東に偏しており、規模は長さ 4.1 m以上、上幅約 60㎝である。埋土は黒褐色粘質土であり、灰白色火山灰粒や黄褐色粘質土粒、赤褐色粘質土粒が僅かに混入している。

**ＳＫ 1621 土壙**

調査区中央部で発見した、南北にやや長い不整形な土壙である。ＳＤ 1620 と重複し、それよりも古い。規模は南北 1.9 m、東西 1.3 m以上である。埋土は平面観察で 2 層に分けることができる。1 層は焼土・炭化物が多量に混入する黒褐色粘質土であり、灰白色火山灰が僅かに混入している。2 層は黒褐色粘質土であり、黄褐色粘質土が小ブロック状に多く混入している。また、一段掘り下げた北半部には、灰白色火山灰が小ブロック状に混入している。

## 3　まとめ

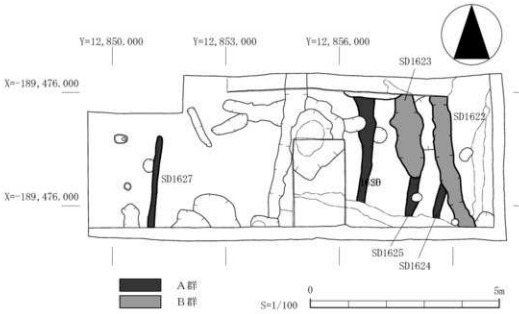
(1) 今回の調査では、Ⅱ・Ⅲ層上面で溝跡や土壙を発見した。

(2) Ⅱ層上面で検出したＳＤ 1620、ＳＫ 1621 には、埋土中に 10 世紀前葉頃に降下したとされる灰白色火山灰が混入していることから、10 世紀前葉以降に埋没したことが明らかである。

(3) Ⅱ層については、出土遺物に土師器杯ＢＶ類・甕Ｂ類が認められること、須恵系土器がないことから、およそ 8 世紀後葉から 10 世紀前葉の間に堆積したものと考えられる。

(4) Ⅲ層上面で検出した遺構については、Ⅱ層との関係より 9 世紀もしくはそれ以前に下限を求めることができる

(5) Ⅲ層上面で検出した溝跡をみると、北で東に傾くＳＤ 1624 ～ 1627（Ａ群）と、西に傾くＳＤ 1622・1623（Ｂ群）に分けられる（第 3 図）。溝の幅はＡ群がおよそ 20㎝前後であるのに比べ、Ｂ群では 50 ～ 80㎝と規模が大きい傾向が窺える。重複関係はＳＤ 1624（Ａ群）→ＳＤ 1622（Ｂ群）、ＳＤ 1625（Ａ群）→ＳＤ 1623（Ｂ群）であることから、Ａ→Ｂ群の変遷が明らかである。




第３図　Ⅲ層上面検出小溝跡

調査区全景
（西より）

ＳＫ 1621 検出状況
（北より）

# 山王遺跡第 93 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、山王字前田地内における賃貸住宅2棟の建設に伴うものである。平成 23 年 11 月 16 日に地権者より山王遺跡内における賃貸住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。今回の計画では、建物基礎工事の掘削の深さは、遺構検出面の上でとどまるが、対象面積が 1,680㎡と広いことから遺構の分布状況や構成を把握するために確認調査を実施したものである。平成 23 年 12 月 2 日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、12 月 8 日から現地調査を開始した。

調査においては、東西に長い2つの調査区を対象地内の北側と中央付近に並行に配置し、北から 1 トレンチと 2 トレンチとした。規模は、それぞれ 5 m × 12 m、4.5 m × 12.5 mである。

**第 1 図　調査区位置図**

調査は、はじめに重機により旧耕作土等（Ⅰ～Ⅲ層）の除去を行い、1 トレンチが現地表面から 65 ～ 70㎝下、2 トレンチが 50 ～ 60㎝下の、いずれもⅣ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、1 トレンチで溝跡、土壙等、2 トレンチで溝跡、土壙、ピットを検出した（12 月 13 日）。12 月 14 日には、1 トレンチで調査区全体の写真撮影を行った。これと並行して、実測図作成にかかる測量を行い、各トレンチ脇に任意に設置した基準杭に、国土座標値と標高値を移動した。続いて 1 トレンチにおいては、この基準杭をもとに、調査区内に 3 m方眼の基準点を設置し、平面図作成を開始した。翌 15 日には、2 トレンチにおいて、調査区全体の写真撮影を行った後、前日と同様の測量を経て、平面図作成を開始した。また、各トレンチの調査区壁沿いに設けた側溝を利用して、Ⅴ層上面での遺構の確認を行ったところ、溝跡、土壙、ピットを検出した。12 月 16 日には、平面図作成を終了し、その後翌 17 日にかけて遺構面を土砂で覆う作業を行った。そして、12 月 20 日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。なお、これらは 1 トレンチと 2 トレンチ双方に共通する。

Ⅰ　層：現代の耕作土。暗灰黄色土で、厚さは約20cmである。しまりはやや弱い。
Ⅱ　層：旧耕作土。黄灰色土で、厚さは15～20cmである。しまりはやや弱い。
Ⅲ　層：黄灰色土で、厚さは10～20cmである。
Ⅳ　層：黒褐色土で、厚さは10～15cmである。暗灰黄色土を斑状及びブロック状に若干含む。また、炭化物、遺物片を含んでいる。上面は、中世以降と考えられる遺構の検出面である。
Ⅴ　層：黄褐色砂質土である。上面は、古代及び中世の遺構検出面である。

### (2) 発見遺構と遺物

#### 1トレンチ

Ⅳ層上面では、調査区中央付近を東西方向に延びる溝跡（ＳＤ1631）と、これに切られる南北方向の3条の小溝跡（ＳＤ1633～1635）を検出した。また、調査区西側で土壙状の平面形をもつもの（ＳＫ1632）と、広範囲にわたると推測される落ち込みを検出した（ＳＸ1630）。後者は、ＳＤ1631溝跡より新しく、調査区南壁での断面観察では深さ5～10cmと浅いものである。埋土の状況から、人為的に埋め戻されたと考えられる。

Ⅴ層上面では、調査区南壁沿いに設けた側溝内において、溝跡（ＳＤ1636）とピットを検出した。

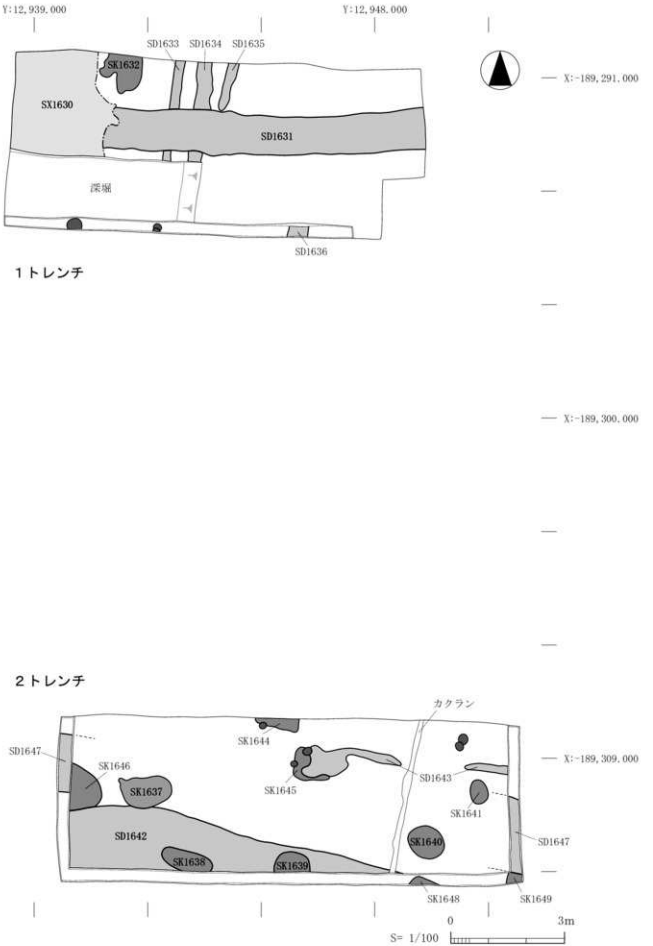
#### 2トレンチ

Ⅳ層上面では、調査区南側を東西方向に延びる大規模な溝跡（ＳＤ1642）を検出した。また、これを切る土壙（ＳＫ1637～1639）と、これらと同様の埋土を持つ土壙（ＳＫ1640・1641）が、調査区内のほぼ全域に分布することを確認した。このほか、調査区西端ではＳＤ1642溝跡に切られる土壙（ＳＫ1646）を、調査区北東部では東西方向の小溝跡（ＳＤ1643）とピット等を検出した。

Ⅴ層上面では、調査区東・西壁と南壁沿いに設けた側溝内において、溝跡（ＳＤ1647）のほか土壙と推定される遺構（ＳＫ1648・1649）を検出した。このうち、ＳＤ1647溝跡は東側と西側の両方で検出されていることから、調査区全域を横断するものと推定される。

### 3　まとめ

今回の調査では、対象地の2箇所に設定したトレンチにおいて、2面の遺構検出面を確認し、それぞれで溝跡、土壙等を検出した。このうち、2トレンチのⅣ層上面で検出したＳＤ1642溝跡の埋土上部からは、近世の陶器片が出土している。このＳＤ1642溝跡と重複関係にある遺構には新旧両方が存在することから、Ⅳ層上面で検出される各遺構は、大きく捉えて中世以降のものと推定される。一方、Ⅴ層上面で検出された各遺構は、周辺部でのこれまでの調査成果から、古代もしくは中世のものと推定される。


Y:12,939.000
Y:12,948.000
SD1633
SD1634
SD1635
SK1632
SX1630
SD1631
深堀
SD1636
X:-189,291.000
X:-189,300.000
X:-189,309.000
1トレンチ
2トレンチ
カクラン
SD1647
SK1644
SK1646
SK1637
SK1645
SD1643
SK1641
SD1642
SK1640
SD1647
SK1638
SK1639
SK1648
SK1649
0
3m
S= 1/100

第２図　調査区平面図

1トレンチ　遺構検出状況
（南より）

1トレンチ　遺構検出状況
（西より）

1トレンチ　遺構検出状況
（東より）

2トレンチ　遺構検出状況
（西より）

2トレンチ西半部　遺構検出状況
（南より）

2トレンチ東半部　遺構検出状況
（南より）

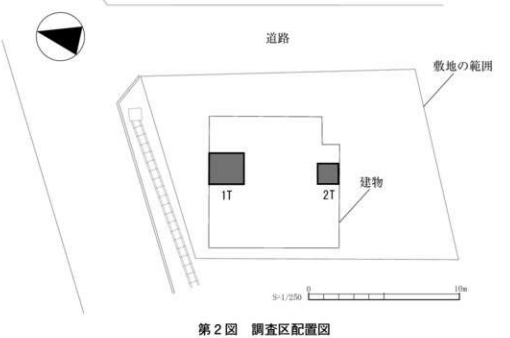
# 高崎遺跡第 86 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成 23 年 4 月 9 日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径 14cm、長さ 5.5 mの杭を 42 本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、5 月 23 日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

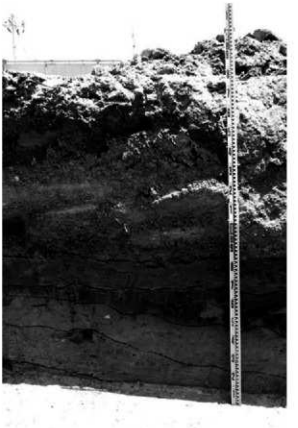
第 1 図　調査区位置図

調査は 6 月 8 日から開始し、調査区は建物建築部分の北端と南端の 2 カ所に設定した。はじめに重機を使用して盛土（Ⅰ 1 層）・現代の水田層（Ⅰ 2 層）の除去を行った。9 日には作業員を動員して遺構検出作業を行ったが、1 トレンチでは、北から南に傾斜して堆積する褐灰色の植物遺存体層（Ⅳ層）が確認され、その直下に灰色粘土層が続いていた。2 トレンチでは、Ⅳ層上に明オリーブ灰色粘土（Ⅱ層）→灰色粘土（Ⅲ層）の堆積があり、その間に灰白色火山灰のブロックが観察された。いずれのトレンチでも安定した基盤層は認められず、遺構・遺物とも発見されなかった。

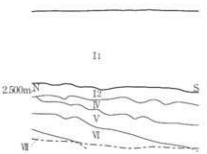



第 2 図　調査区配置図

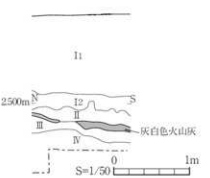
1T 全景（南より）



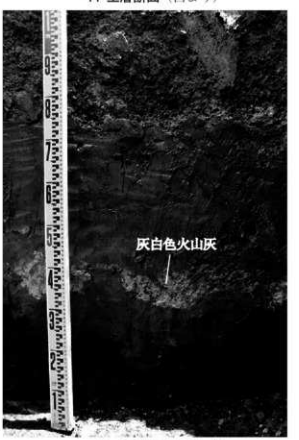
1T 土層断面（西より）




1T 東壁断面図




2T 東壁断面図

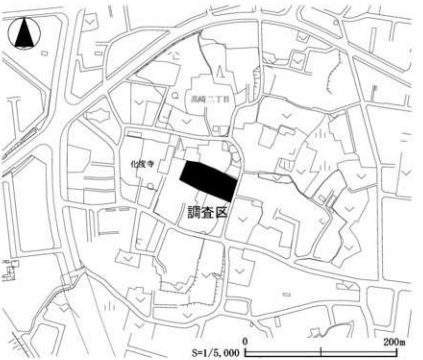



2T 土層断面（西より）

# 高崎遺跡第 87 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成工事に伴う確認調査である。平成 22 年 11 月 10 日に地権者より当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、8 区画の宅地を造成するのに伴い、現地表から最深約 2.5 m の掘削を施すという内容であった。計画地の対象面積が 2,800.1 ㎡と広大であることに加え、幅 6 m、長さ 55 m の区画道路を設置することから、事前に遺構検出面の深さ及び分布状況を把握する目的で確認調査を実施し、この成果に基づき本発掘調査に係る協議を行うこととなった。




第 1 図　調査区位置図

平成 23 年 6 月 28 日に依頼書と承諾書の提出を受けて、7 月 5 日から調査を開始した。重機により表土（現代の耕作土）を除去し、20 ～ 40cm掘り下げたところで地山を確認し、柱穴や溝跡などの遺構を検出した。

## 2　調査成果

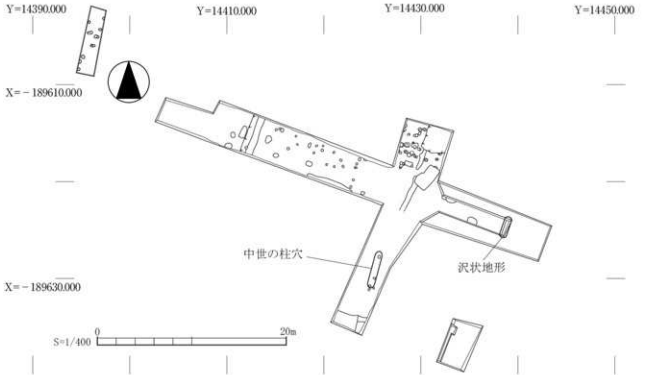
### 発見遺構と遺物

今回の調査では、柱穴 79 基、溝跡 4 条、土壙 3 基、性格不明遺構 4 基を発見した（第 2 図）。遺構のうち、第 2 図に示した 3 基の柱穴は、規模や埋土の様相から中世もしくはそれ以前のものと考えられたが、そのほかの遺構は、埋土の様相から近世かそれ以降のものと考えられる。調査区東端では、北東－南西に延びる沢状地形を確認した。

遺物は表土中より、古代の土師器・瓦と近世の陶磁器が出土した。

## 3　まとめ

今回の調査では、古代の遺物、中世の柱穴及び近世の遺構と遺物を発見した。今回の調査結果を踏まえて、地権者と協議の結果、本発掘調査（第 90 次調査）を実施することとなった。詳細な報告は、第 90 次調査報告にて行う。



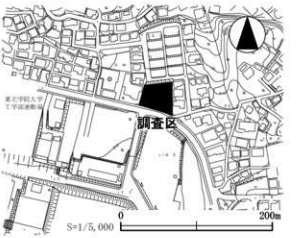

**第２図　遺構配置図**

**遺構検出状況**（西より）

# 高崎遺跡第 88 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、道路新設を含む宅地造成工事に伴う発掘調査である。平成 23 年 3 月 9 日に地権者より当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画では既存の建物の基礎部分約 1 mの掘削、幅員 4.5 mの道路設置に伴い約 30cmの掘削とアスファルト舗装、加えて給排水管埋設工事では最深 1.5 mの掘削、擁壁設置工事でも最大幅 4 m、最深 3.1 mの掘削を施すことから埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構等の保存が計れないか協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定した。その際、確認調査によって遺構が発見された時には、委託契約を締結し本発掘調査に移行することも確認された。その後、平成 23 年 4 月 5 日に地権者より発掘調査の依頼・承諾書の提出を受け、確認調査として第 88 次調査を実施した。



第 1 図　調査区位置図

調査は 7 月 5 日から重機を使用して、調査区北側の擁壁設置場所から調査を開始した。擁壁部分では、3 箇所を掘削したが遺構は発見できなかった。これらについては写真撮影を行い、直ちに埋め戻した。次に、道路敷設部分では掘削土内にコンクリート片や煉瓦が埋まっていたが、既存建物の解体に伴うものと考え、地山まで掘り下げた。ところが、地下に埋設された煉瓦と切石によって構築された遺構とコンクリート製の基礎が露出したことから、作業を中断して、発見した遺構について検証を行った。

本調査区を含む調査区周辺は、かつて多賀城海軍工廠の「男子工員寄宿舎」であった区域の北側隣接地に当り、「無線送信所用地」の範囲内に相当することから、これに関連する施設の可能性が考えられた。そこで、今回この地下施設と建物跡を調査対象にすることを決定した。施設に関わる遺構の分布状況を確認するため、13 日より再度重機を導入した。調査区については、道路部分の調査区を 1 T（トレンチ）とし、幅員幅まで拡張して遺構の状況を確認した。また、これらの遺構の分布状況を確認するため、新たに調査区を設定した。調査区北側に東西方向に設定した 2 Tでは、煉瓦と切石で構築された遺構の延長部を東側で検出し、西側でも既存建物建設の際に破壊され残存状況は良好ではなかったが、施設の底面と見られる一部を検出することができた。この結果、本施設の両端は調査区外に延びていくことが明らかになった。さらに東側では、本施設に接続し南側に延びる遺構も確認できた。このため延長部を明らかにするため、遺構の延びに沿って南北方向に 3 Tを設定し、建物跡の東辺と埋設土管も検出した。これらの調査区以外にも、建物跡の西側の延びを確認するために、1 Tの西側に 4・5 Tを設定した。4 Tからは溝跡や柱穴、5 Tでは溝跡や不整方形の土壙を検出したが、建物跡の延びは確認できなかった。16 日には遺構の広がりをある程度確認できたので、調査区毎に遺構検出状況の写真撮影を行った。各調査区で発見した遺構の平面・断面図の作成については、道路部分の 1 Tを対象として実施する第 89 次調査（受託）の一環として行うこととし、20 日に確認調査を終了した。

## 2　調査成果

### (1) 層　序

今回の調査で確認できた層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　調査区全域に堆積する褐色土で、層中には廃材や砂利・礫を含む既存建物解体後の固くしまった整地層である。厚さは2～40cmである。

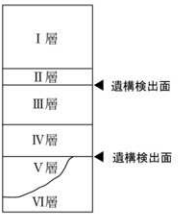
Ⅱ層　調査区南端を除く全域に堆積する黄褐色土である。褐色土ブロックを多量に含んでいる。既存建物を建設する際の整地層と考えられる。厚さは10～25cmである。

Ⅲ層　調査区全域に堆積する炭化物粒と黄褐色粒を含むしまりの強い暗褐色土である。整地層と考えられる。厚さは10～28cmである。近・現代遺構の検出面となっている。

Ⅳ層　調査区西半部に堆積する地山ブロック（Ⅵ層）を多量に含む褐色土である。厚さは4～26cmである。

Ⅴ層　調査区1Tを中心として部分的に確認できる、固くしまった褐色粘土である。厚さは4～28cmである。

Ⅵ層　岩盤の地山層である。




**第2図　層序模式図**

### (2) 発見した遺構

調査区内に設定した5ヶ所の調査区1～5T（トレンチ）毎の概要について説明する。

**【1T（トレンチ）】**

道路部分を対象にした南北方向の調査区である。南半部で東西方向に延びるコンクリート製の建物基礎部分とその周辺に、煉瓦を用いて方形状に区画した施設を2基発見した。さらにその北側では、コンクリート製の蓋で覆われた地下施設の一部を発見した。

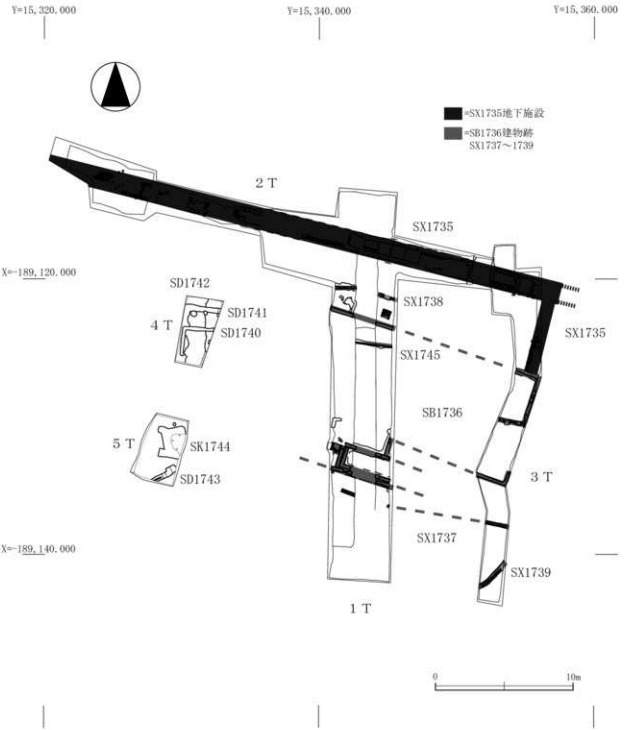
**SX1735地下施設**（第3・4・6・7・8図）

調査区北側のⅢ層上面で東西方向に延びる地下に埋設された施設の一部を発見した。施設の両端は調査区外に延びており、確認できた長さは約6mである。本遺構については、2・3トレンチにおいてもその延長部を検出している。方向は東で約16度南に偏している。内部の状況は、蓋が閉塞していたところは空洞になっていた。蓋が崩落した部分は、上部から流入した土砂が天井部まで堆積していた。

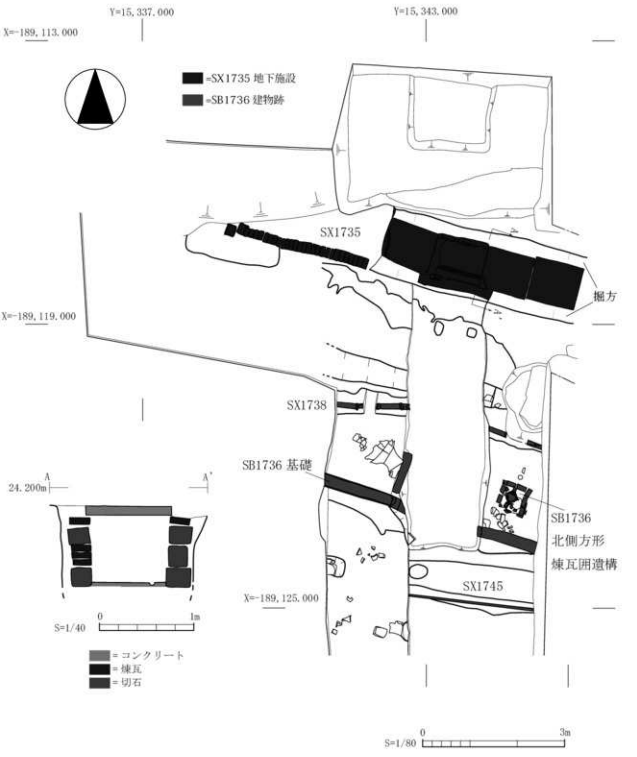
この施設の構造は、コンクリート製の蓋と底面、切石と煉瓦を積んだ壁面で構成されており、設置に際しては幅約1.5mの掘方を掘削している。

・蓋

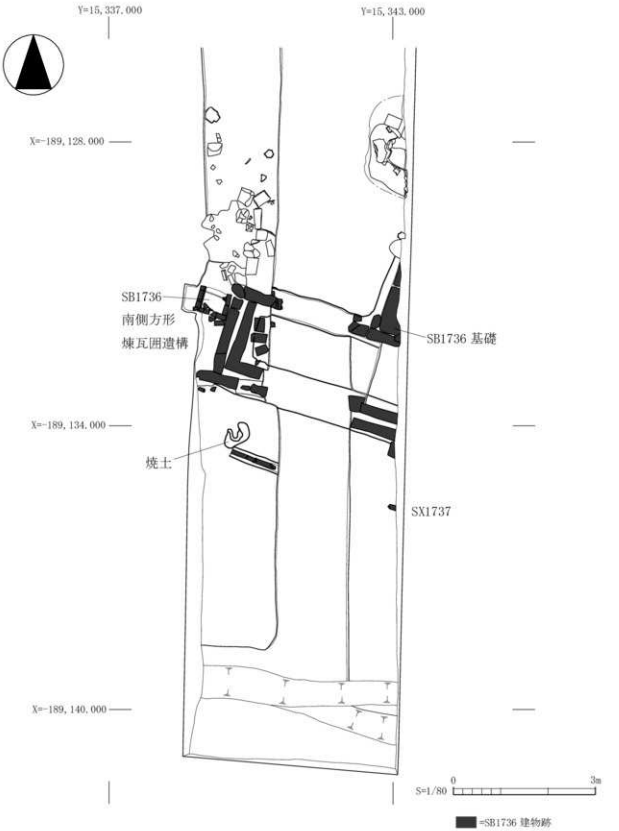
調査区内で4枚確認した。その内の1枚は、重機による表土掘削時に取り上げている。蓋は長辺を東西方向に合わせて閉塞していた。大きさは長辺約1.1m、短辺約1m、厚さ約9cmのコンクリート製である。中には芯材として太さ約1cmの鉄筋が埋め込まれていた。内部の状況を確認するため、残る3枚の蓋のうち2枚を取り除いた。


Y=15,320.000
Y=15,340.000
Y=15,360.000
=SX1735地下施設
=SB1736建物跡
SX1737～1739
2 T
SX1735
X=-189,120.000
SD1742
SD1741
SD1740
4 T
SX1738
SX1735
SX1745
SB1736
5 T
SK1744
SD1743
3 T
SX1737
X=-189,140.000
SX1739
1 T
0
10m

**第３図　調査区全体図**




**第４図　１Ｔ（トレンチ）北半部全体図・断面図**




**第５図　１Ｔ（トレンチ）南半部全体図**

・壁

壁面は長辺31～34cm、短辺23～28cm、厚さ約20cmの切石を三段積み上げている。その上に長辺22cm、短辺10.5cm、厚さ6cmの煉瓦を一段、場所によって二段、長辺を東西方向に据えている。切石と煉瓦はモルタルによって固定されており、壁高は約70cmである。

・底面

底面の幅は約85cmで、コンクリート製である。底面の南寄りには、幅5cm、深さ3cmの断面形が「U」字形の切り込みが1条壁面に並行して走っている。

**S B 1736 建物跡**（第3～5図）

S X 1735 地下施設南側のⅢ層上面で発見した。方向は南辺で見ると、東で約17度南に偏しており、S X 1735 地下施設とほぼ同じである。建物跡の基礎部分を東西約6m、南北約10mで確認した。建物の上部は失われている。基礎はコンクリート製で、掘方の深さは検出面から約0.6mである。底面には礫等を敷き詰めて据えられている。建物跡の南側と北側の2箇所おいて、建物基礎構築に伴う層位で煉瓦を方形に組んだ方形煉瓦囲遺構を発見した。南側で検出した遺構は、コンクリート基礎の西側に接して煉瓦の小口面を合わせて一段敷いて方形状に配置している。規模は約0.7m×約0.6mである。北側で検出した遺構は、煉瓦の小口面を合わせて二段に積み重ね、方形状に配置している。規模は一辺約0.6mの正方形で、高さは約65cmである。内部には直径約25cmの鉄製の筒状容器が据えられていた。筒状容器の内部には炭が堆積していた。

**S X 1737 埋設土管**（第5図）

S B 1736 建物跡南辺から約1m南側のⅢ層上面で発見した。溝状の掘方の中に土管が埋設されているのを確認した。埋設された中央部はすでに失われていた。方向はほぼ建物跡の方向と同じである。規模は東西5m以上、掘方の幅は約25cmである。土管は直径約10cmの土製で、長さがわかるものはない。

**S X 1738 埋設土管**（第4図）

S B 1736 建物跡北辺から約1.9m北側のⅢ層上面で発見した。溝状の掘方に土管が埋設されているのを確認した。埋設された中央部はすでに失われていた。方向はほぼ建物跡の方向と同じである。規模は東西4.5m以上、掘方の幅は25～45cmである。土管は直径約20cmの土製で、長さがわかるものはない。

**S X 1745 埋設鉄管**（第4図）

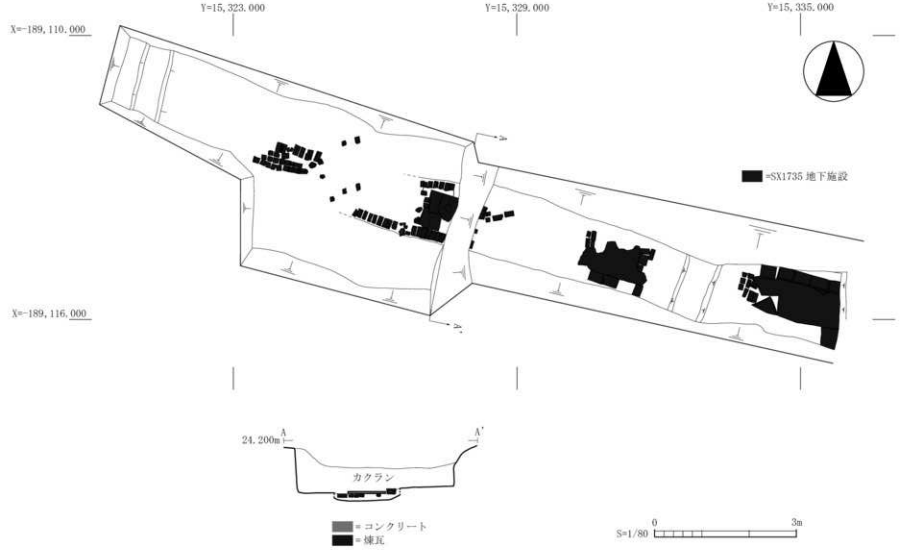
S B 1736 建物跡北辺から約1.3m南側のⅢ層上面で発見した。方向は東で約6度南に偏している。直径約4cmの鉄製の管が埋設されており、東西約2.7mまで確認した。

**【2 T（トレンチ）】**

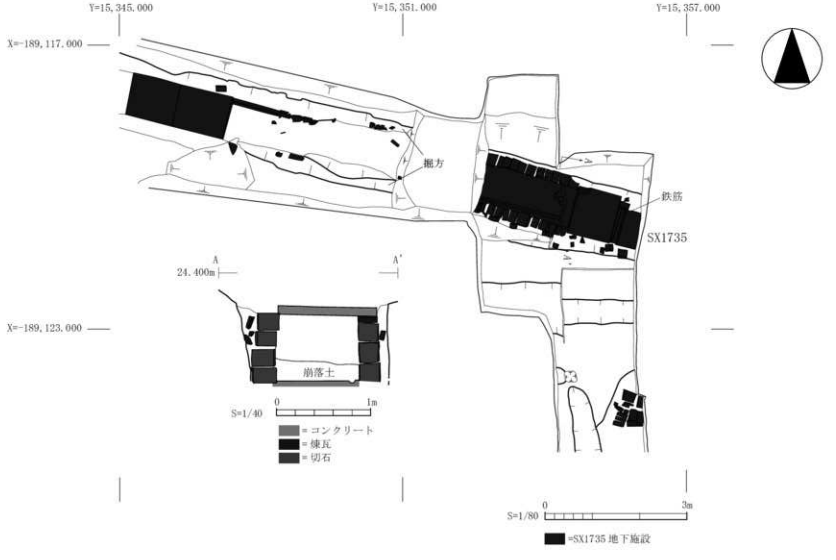
1 Tで検出した煉瓦と切石で構築されたS X 1735 地下施設の延びを確認するため、東西方向に設定した調査区である。

**S X 1735 地下施設**（第3・6・7図）

2 Tの全域で発見した。施設の両端は調査区外に延びていく。確認できた長さは約38mで、調査対象区を東西に横断していることが明らかになった。方向は東で約16度南に偏している。東側では施設を覆うコンクリート製の蓋が一部崩落している箇所を確認した。調査区の東端において破損してできた開口部から内部を観察したところ、開口部から約2.8m先で南にほぼ直角に分岐し、また、ここから4.8m先で




第６図　２Ｔ（トレンチ）西半部平面図・断面図




第７図　２Ｔ（トレンチ）東半部平面図・３Ｔ（トレンチ）北半部平面・断面投影図

は南にほぼ直角に屈曲することが確認された。この部分の底面には2本のホースが敷設されていた。トレンチ西半部は既存建物建設工事の際に破壊された箇所が多いが、1Tでは確認できなかった地下施設の底面の状況が明らかになった。

構造は以下のとおりである。

・蓋

調査区東側で5枚確認した。蓋が一部崩落している箇所も確認している。蓋は長辺を東西方向に合わせて閉塞していた。大きさは1Tと同様である。東端部では、鉄筋が確認された。

・壁

壁面は1Tと同じ大きさの切石を三段または四段積み上げて構築している。一部では切石の代わりに煉瓦を三段据えていた。その上に1Tと同じ大きさの煉瓦を一段、場所によっては二段に長辺を東西方向に据えている。東端部では蓋が直接切石の上に据えられている。切石同士や切石と煉瓦はモルタルによって固定されていた。壁高は約70cmである。

・底面（第6図　断面図）

西端部で確認できた場所を参考にすると、幅90cm、厚さ4cmのコンクリート製の床を底面としている。1Tで検出した断面形が「U」字形の切り込みは確認できなかった。底面下には掘方が確認され、深さは約15cmである。掘方には、煉瓦が長辺を東西方向に向けて一段据えられていた。また、底面上には北側と南側に切石を据えている場所もあった。

**【3T（トレンチ）】**

2Tで発見したSX1735地下施設の南側への延びを確認するため、1Tの東側に設定した南北方向の調査区である。SX1735地下施設の延びとSX1736建物跡の広がりを確認した。

**SX1735地下施設**（第3・8図）

2T東端の開口部から約2.8mのところで、南側にほぼ直角に分岐していることが観察された。底面の幅は約0.6mである。3Tでは遺構の残存状況が良好ではないため、煉瓦によって構築された西壁のみを発見した。煉瓦は長辺を南西向けて据えられていた。確認できた長さは3.8m以上で、方向は北で約17度東に偏している。

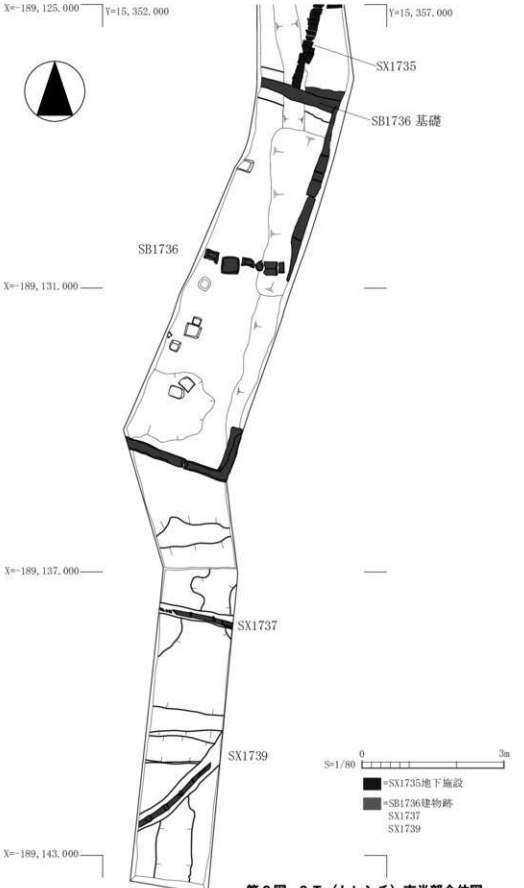
**SB1736建物跡**（第3・8図）

建物基礎の東辺の一部を発見した。基礎はコンクリート製で、規模は東西約1.8m、南北約7.9mである。後世の土取りのため壊されており、遺存状況は良好ではない。方向は東辺で見ると北で約20度東に偏している。

地下施設と建物跡の関係については、2Tの東側で南側に分岐した地下施設基礎の延長部がこの箇所で建物跡の基礎とモルタルで連結されていることを確認した。

**SX1737埋設土管**（第8図）

調査区の南半部で、1Tで発見したSX1737埋設土管の延長部を確認した。方向は東で約12度南に偏しており、規模は東西2.5m以上、掘方の幅は約25cmである。土管は土製で、溝状の掘方のほぼ中央に据えられている。直径は約10cmで、破損しているために長さは不明である。




**第８図　３Ｔ（トレンチ）南半部全体図**

**ＳＸ 1739 埋設土管**（第８図）

調査区南端部のⅥ層上面で発見した。方向は東で約 40 度北に偏しており、規模は東西 2.5 m以上、掘方の幅は 30 ～ 35cmである。土管は土製で、溝状の掘方のほぼ中央に据えられている。直径は約 10cmで、破損しているために長さは不明である。

**【4 Ｔ（トレンチ）】**

ＳＢ 1736 建物跡の西側の状況を確認するため１Ｔの西側において、南北方向に設定した調査区である。溝跡３条とピット４基を発見した。

**ＳＤ 1740 溝跡**（第３・９図）

調査区中央部のⅢ層上面で検出したほぼ直角に屈曲する溝跡である。方向は東西では東で約９度北に偏し、南北では北で約 10 度東に偏している。溝の東側は調査区外に延び、西は屈曲して南へ延びて立ち上がっている。ＳＤ 1741・1742 と重複し、これらより新しい。規模は東西 2.2 m以上、南北約 3.1 mで、上幅 18 ～ 28cm、深さ 55cmである。埋土は凝灰岩ブロックを多く含んだオリーブ褐色の単層である。

**ＳＤ 1741 溝跡**（第３・９図）

調査区北半部のⅢ層上面で検出した屈曲する溝跡である。方向は東西では東で約３度南に偏し、南北ではほぼ発掘基準線に沿っている。溝の東側は調査区外に延び、西は屈曲して南へ延びて行く。ＳＤ 1740・1742、柱穴Ｐ１～Ｐ３と重複し、ＳＤ 1740、Ｐ１・Ｐ２より古く、ＳＤ 1742、Ｐ３より新しい。規模は東西 2.5 m以上、南北 1.5 m以上で、上幅 35cm、深さ 30cmである。埋土は凝灰岩ブロックを多く含んだオリーブ褐色土の単層である。

**ＳＤ 1742 溝跡**（第３・９図）

調査区中央部のⅢ層上面で検出した南北溝跡である。方向は北で約６度西に偏している。溝の両端は調査区外に延びて行く。ＳＤ 1740・1741、Ｐ１・Ｐ２と重複し、これらより古い。規模は南北 4.7 m以上で、幅 1.4 m以上、深さ 25cm以上である。埋土は２層に分けられる。上層・下層とも凝灰岩粒子を斑状に含んだ褐色土である。

**ピット（Ｐ１～Ｐ４）**

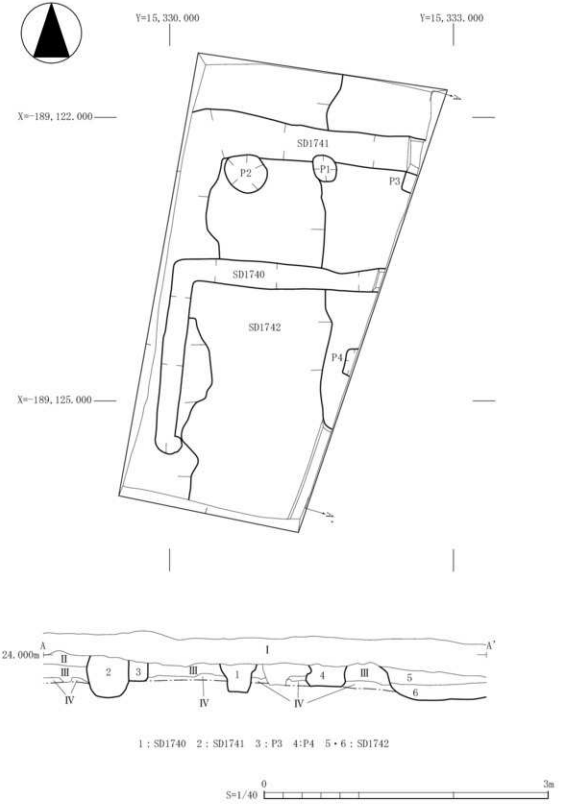
Ⅲ層上面で４基発見した。このうち３個の柱穴はＳＤ 1741 と重複関係があり、Ｐ３はこれより古く、Ｐ１・Ｐ２はこれより新しい。Ｐ４は重複関係がないため不明である。平面形は隅丸方形もしくは方形で、一辺 25 ～ 55cmである。埋土は凝灰岩ブロックを斑状に含んだオリーブ褐色土や褐色土である。

**【5 Ｔ（トレンチ）】**

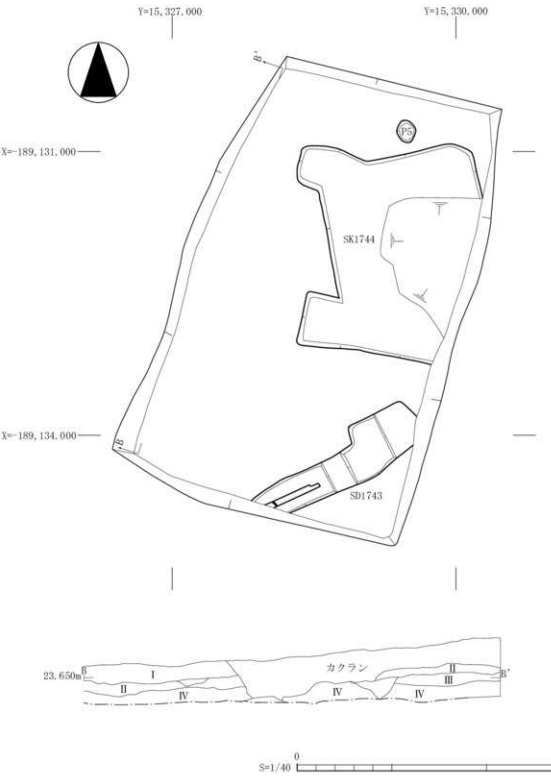
ＳＢ 1736 建物跡の西側の状況を確認するため、４Ｔの南側に設定した調査区である。溝跡１条と土壙１基、ピット１基を発見した。

**ＳＤ 1743 溝跡**（第３・10 図）

調査区南東部のⅢ層上面で検出した東西溝跡である。規模は東西 1.8 m以上で、幅 36 ～ 50cm、深さ約 20cmである。内部には中央に幅約 5cm、長さ約 60cmの板材を四片に組み合わせた樋状の施設が埋設されていた。内部は一部空洞となっていた。埋土はしまりのない黄褐色土である。




**第９図　４Ｔ（トレンチ）全体図・東壁断面図**




**第 10 図　5 T（トレンチ）全体図・西壁断面図**

**ＳＫ 1744 土壙**（第３・10 図）

調査区北半部のⅢ層上面で検出した不整方形の土壙である。遺構の東半部は、後世の土取りのため失われている。規模は南北約 2.3 m、東西約 1.8 mである。埋土は凝灰岩ブロックを混入した褐色土で、煉瓦や礫が含まれていた。

**ピット**（第３・10 図）

調査区北端部のⅢ層上面で１基（Ｐ５）発見したが、柱痕跡は確認できなかった。平面形は略円形で、直径約 24cmである。埋土は凝灰岩粒子を斑状に含んだ褐色土である。

## ３　まとめ

(1)　１Ｔでは東西方向に延びるＳＸ 1735 地下施設とＳＢ 1736 建物跡、ＳＸ 1737・1738 埋設土管等を発見した。２ＴではＳＸ 1735 地下施設の延長部とこれから南側に延びる分岐点を確認した。３Ｔは分岐後のＳＸ 1735 地下施設の延長部とＳＢ 1736 建物跡の東側、ＳＸ 1737・1739 埋設土管等を発見した。４Ｔでは溝跡３条と柱穴４基を発見した。５Ｔでは溝跡１条と土壙１基、柱穴１基を発見した。

(2)　ＳＸ 1735 地下施設は、東西約 32 m以上を測る大規模な施設である。壁面の構築方法には、場所によって煉瓦と切石の積み方が異なっていたり、底面を直線的に走る切り込みの有無など、同一施設の中でもその構造に相違があることが把握された。

(3)　ＳＢ 1736 建物跡は、東西 17 m以上、南北約９mの大規模な建物である。方形煉瓦囲遺構やＳＸ 1737・1738 埋設土管は、検出層位や方向の類似性からみて、これに伴う施設と考えられる。また、ＳＸ 1739 埋設土管についても同様の遺構とみられるが一部の確認であるため判然としない。

(4)　ＳＸ 1735 地下施設とＳＢ 1736 建物跡の関係については、２Ｔの東側で南側に分岐した地下施設基礎の延長部がこの箇所で建物跡の基礎とモルタルで連結されていることを確認したことにより、両者が併存していたことが考えられる。

(5)　ＳＸ 1735 地下施設とＳＸ 1736 建物跡の年代については、施設構築時に使用された煉瓦、土管等の製作技法・規格等から近・現代の遺構と見られる。両者の関係については、同時期に機能していたものと考えられる。他の遺構については、出土遺物もないため不明である。

(6)　今回の調査で発見されたＳＸ 1735 地下施設とＳＸ 1736 建物跡については、本調査区を含む当概地区周辺はかつて多賀城海軍工廠の「男子工員寄宿舎」であった区域の北側隣接地であり、「無線送信所用地」の範囲内に相当することから、海軍工廠に関わる施設の一部の可能性が強い。ただし、今回の調査では具体的に結びつく所見は得られなかった。

1 T遺構検出状況（北より）

1 T S X 1735 蓋検出状況（西より）

1 T S X 1735 蓋除去後の状況（南西より）

1Ｔ調査区北半部遺構検出状況
（南より）

1Ｔ北側方形煉瓦囲遺構検出状況
（北より）

1Ｔ南半部遺構検出状況
（西より）

1 T南側方形煉瓦囲遺構検出状況
（西より）

2 T東半部遺構検出状況
（西より）

2 T西半部遺構検出状況
（東より）

2Ｔ調査区西半部ＳＸ1735下部
検出状況（東より）

2Ｔ調査区西半部ＳＸ1735下部
（細部）検出状況（西より）

ＳＸ1735分岐部分検出状況
（北より）

２ＴＳＸ 1735 断面（西より）

ＳＢ 1736 とＳＸ 1735 の連結部（北西より）

３Ｔ南半部遺構検出状況（北より）

**3 T遺構検出状況**
（北西より）

**4 T調査区全景**
（北より）

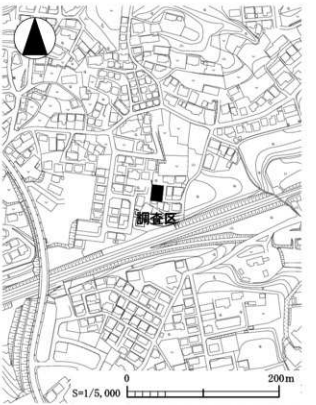
**5 T調査区全景**
（北より）

# 小沢原遺跡第 18 次調査

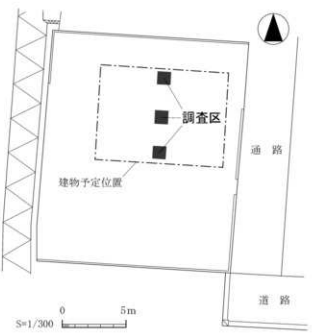
## 1　調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、浮島二丁目地内における個人住宅建設に伴うものである。平成 23 年 8 月 2 日に地権者より小沢原遺跡の東端部における住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、丘陵地に立地する当該地において、住宅基礎工事の際に最深 35cm、給排水管埋設工事の際に最深 90cmの掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念された。このため、確認調査が必要である旨を回答し、地権者から協力が得られたことから、9 月 22 日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、9 月 28 日に現地調査を実施した。

調査は、既存住宅の解体の際に、およそ 1 m × 1 mの大きさの調査区を 3 箇所に設定して、重機により約 50cmの掘り下げを行った。その結果、いずれも盛土の下で直接岩盤が露出し、遺構・遺物は発見されなかった。




第 1 図　調査区位置図




第 2 図　調査区配置図

掘り下げ状況（北より）

# 小沢原遺跡第 19 次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本件は、浮島二丁目区地内における個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成 23 年 8 月、地権者より当該区における住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、直径 60cm、深さ 4 mの柱状改良を 28 箇所で実施するものであったが、当街区周辺の調査成果をみると遺構が極めて希薄な場所であることが想定されたため遺跡への影響は少ないものと判断された。また、東日本大震災により被災した個人の移転に伴うものであったことから、現地調査の早期着手及び完了が求められた。このため、原則確認調査で対応することで施工業者と協議を行い、9 月 30 日に地権者より発掘調査依頼書の提出を受け、10 月 12 日に調査を開始した。

第 1 図　調査区位置図

重機による表土除去を行ったところ、現表土下 0.5 ～ 1.8 mの範囲に、一辺 0.5 ～ 1 mのコンクリート砕や陶器のタイル片、材木などが多量に埋められていた。本遺跡内では、現表土下 30cm前後が遺構検出面であることから、本地区は全て後世の掘削により破壊されていると判断し、現地調査の一切を終了した。

## 2　調査成果

後世の掘削が対象区全面に及んでおり、遺構・遺物は発見されなかった。

掘削状況（1）

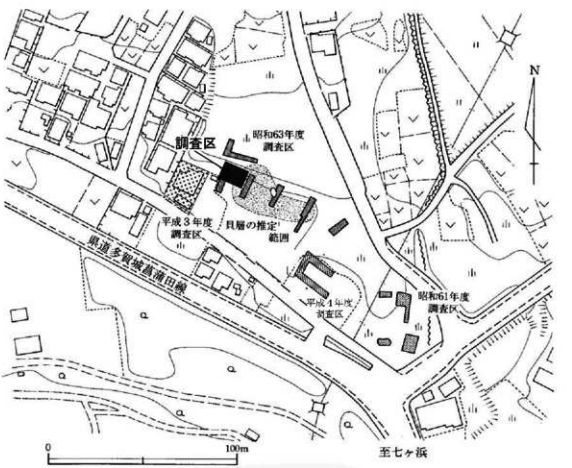
掘削状況（2）

# 大代貝塚第５次調査

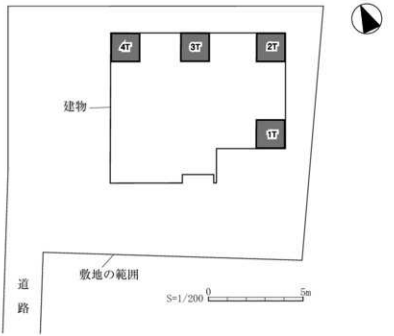
## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成23年２月１日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画は住宅基礎工事の際に39cm、給排水管埋設工事では、幅50 cm、最深１m の掘削を行うものであり、埋蔵文化財への影響も懸念された。当該地は、昭和63年度に実施した試掘調査において、現地表下10～20 cm で縄文時代晩期の貝層を確認し、貝層の範囲も東西45 m ×南北25 m が推定されていた。今回、計画されている建物基礎部分は、貝層の西端にかかる可能性が高いことから、事前に遺構検出面の深さを把握することにった。その後、２月27日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて確認調査の実施に至ったものである。

調査は４月12日に実施した。調査区は1.5m × 1.5m のトレンチを４カ所に設定した。重機を使用して表土の除去を行ったところ、1・2 T で貝層が検出された。検出面までの深さは、それぞれ95 cm、32 cm である。3・4 T では貝層が検出されず、縄文時代と推定される堆積層までの深さがいずれも55 cm であった。今回の調査成果により、昭和63年度の試掘調査において推定されていた貝層の西端がおおむね妥当であることが改めて確認された。




第１図　本調査区と周辺の調査位置図




**第２図　調査区配置図**

**１Ｔ全景**（東より）

**２Ｔ全景**（南東より）

**３Ｔ全景**（南西より）

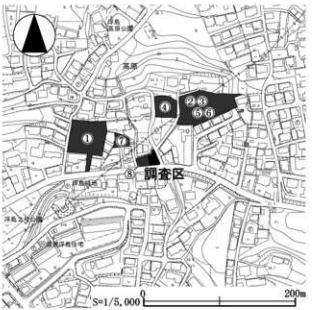
**４Ｔ全景**（南西より）

# 高原遺跡第９次調査

## １　調査に至る経緯と経過

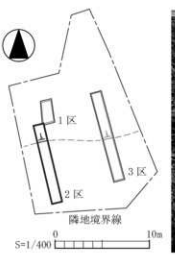
本調査は、個人住宅新築計画に伴う確認調査である。平成23年３月２日に、地権者より当該地区における住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画内容は、基礎工事では直径60cm、最深3.5ｍの杭基礎を54本施すものであった。また、給排水工事では幅60cm、最深1.1ｍ、外構工事では最深30cmの掘削をそれぞれ行うことが示されていた。当該地区の西側隣接地では、平成21年度に第８次調査を実施していたものの、住宅建設予定地全体に現代の撹乱が現地表から深さ3.0ｍまで及んでおり、遺構や遺物を発見することができなかった。以上のことから、遺構の有無や遺構面までの深さを確認することを目的として、確認調査を実施することになった。平成23年４月18日に地権者から調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、４月20日に現地調査を実施した。

はじめに、重機により表土の除去を行った。その結果、南側は現地表から50～60cm下で基盤層となる岩盤を検出し、北側は現代の撹乱によって現地表からの深さ2.3ｍ以上の深さまで壊されていることを確認した。遺構や遺物については全く発見することができなかった。また、全ての調査区で、岩盤の直上は全て造成工事の際に敷かれたと思われる砂利の層で覆われていた。このことから、この場所は大きく地形の改変が行われており、遺構も失われているものと考えられた。その後、写真撮影および図面作成を行った後、埋め戻して現地発掘調査を終了した。



数字は過去の調査次数と対応

第１図　調査区位置図



第２図　調査区平面図

２区　調査区全景（北から）

## ２　調査成果

表土直下は、基盤層である岩盤となっており、遺構や遺物は発見できなかった。

# 大日南遺跡第10次調査

## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、高橋4丁目地内における個人住宅建設に伴うものである。平成23年10月15日に地権者より大日南遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、建物基礎工事の際に直径140mm、最長8.5mの杭を48本打ちこむというものである。当該地は、平成7年に発掘調査が実施され、大溝で囲まれた中世の屋敷跡の一画が発見された第3次調査のF区にほぼ重なるが、本件の建物建築位置が未調査部分にずれ込む可能性があることから、発掘調査が必要である旨を地権者に対し説明し、実施についての了解を得た。その後、平成23年11月11日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、11月16日から現地調査を開始した。なお、本件は東日本大震災に関連したものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱規定により、調査は遺構検出第一面での確認調査にとどめることとした。

第1図　調査区位置図

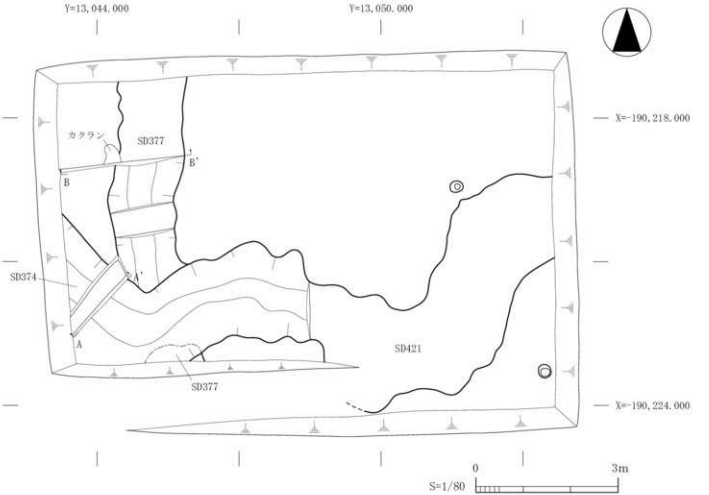
はじめに、重機により厚さ0.9～1mの盛土の除去を行い、掘削した土砂は場外へ搬出した。引き続き、遺構検出作業を行い、東西方向に蛇行しながら延びるSD421溝跡と、これに切られるもので、南北方向に延びるSD377溝跡を検出した（11月17日）。これらは、いずれも第3次調査で検出されているものであるが、今回重複関係等を再確認するため、一部で埋め戻し土の除去を行った（11月22日）。11月25日には、調査区全景を写真撮影し、続いて平板測量による平面図作成、2つの溝跡の断面図作成を行った。なお、測量については、調査対象地内に2本の基準杭を任意に設置し、その後に国土座標値と標高値をこれに与えるという方法をとった。調査は、11月29日に重機による埋め戻しを行い、終了した。

## 2　調査成果

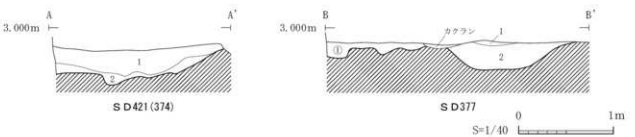
### (1) 発見遺構と遺物

#### SD421溝跡

調査区中央付近を東西方向に蛇行しながら延びる溝跡である。SD377溝跡と重複し、これより新しい。方向は一定しないが、調査区中央部でみると、東で約12度南に偏している。調査区西側でSD374溝跡に接続する。SD374溝跡は、この後南北方向に直線的に延びることを、以前の調査で確認している。SD421溝跡については、規模は、上幅1.25～1.75m、下幅0.28～0.48mを測る。深さは、検出面から30cm前後である。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。このうち、下層




**第２図　調査区平面図**




**土層観察表**

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| SD 421(旧1) 埋土 | | |
| 1 | 暗オリーブ灰色砂質土 | オリーブ灰色砂質土を混入。また、黒褐色粘質土をブロック状に含む。 |
| 2 | 黒褐色粘質土 | 粒子の粗い砂を混入。 |

| 層位 | 土色・土性 | 備　考 |
|---|---|---|
| SD 377 埋土 | | |
| 1 | 灰黄褐色砂質土 | |
| 2 | 黒褐色粘質土 | 暗オリーブ砂質土を混入。 |
| ① | 灰黄褐色砂質土 | 黒褐色粘質土をブロック状に若干含む。 |

**第３図　ＳＤ 421(374)・377 溝跡断面図**

は底面近くに薄く堆積するもので、粒子の粗い砂を混入している。今回の調査では、遺物は出土していない。

**ＳＤ377溝跡**

調査区西側をやや弧を描くように南北方向に延びる溝跡である。ＳＤ377溝跡と重複し、これより古い。確認できた長さは約6ｍである。方向は北半部でみると、北で約1度東に偏している。規模は、上幅1.25～1.42ｍ、下幅0.43～0.55ｍを測る。深さは、検出面から30㎝前後である。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられが、上層がわずかな堆積のため、下層のほぼ単層といえる。今回の調査では、遺物は出土していない。

## 3　まとめ

(1) ＳＤ421溝跡については、平成7年度の調査において、西端付近で他の溝跡や土壙と複雑に重複したことから、それらとの関連が必ずしも明確ではなかった。今回の調査によって、ＳＤ374溝跡と一連のものであることが確かめられた。時期は、これまでと同様15・16世紀に位置付けられる。

(2) ＳＤ377溝跡については、ＳＤ421溝跡よりも古いことと、南側へさらに延びることが再確認された。

各溝跡掘り下げ状況
（東より）

調査区西側各溝跡掘り下げ状況
（南より）

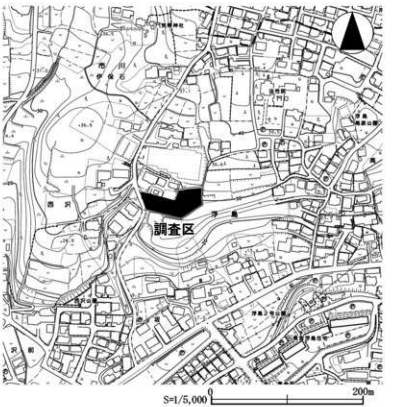
調査区西側各溝跡掘り下げ状況
（北より）

# 西沢遺跡第21次調査

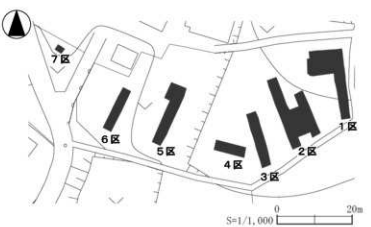
## 1　調査に至る経緯と経過

本調査は、浮島字西沢地内の集合住宅新築計画に伴う確認調査である。平成23年3月28日に地権者より当該地区における集合住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。開発面積は1,901.97㎡で、工事の内容は以下のとおりである。東側が高く、西側が低くなっている現在の地形を、切土と盛土をすることで平坦に造成した後、幅5mの道路と集合住宅を2棟建設するものであった。当該地区は、遺構の状況が不明なことに加え、開発面積が1,000㎡を超えるものであったことから、確認調査を実施することとした。

平成23年7月15日に地権者から発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、7月26日から調査に着手した。調査区は1～7区を設定し（第2図）、26日から28日まで重機により表土（Ⅰ層）を除去したところ、竪穴住居や溝跡などの遺構を発見した。8月2日から8日まで、写真撮影と図面作成を行った。9日には調査区の埋め戻しを終了した。10日に器材の撤収を行い、現地発掘調査をすべて完了した。




第1図　調査区位置図




第2図　調査区配置図

## 2　調査成果

### (1) 層序

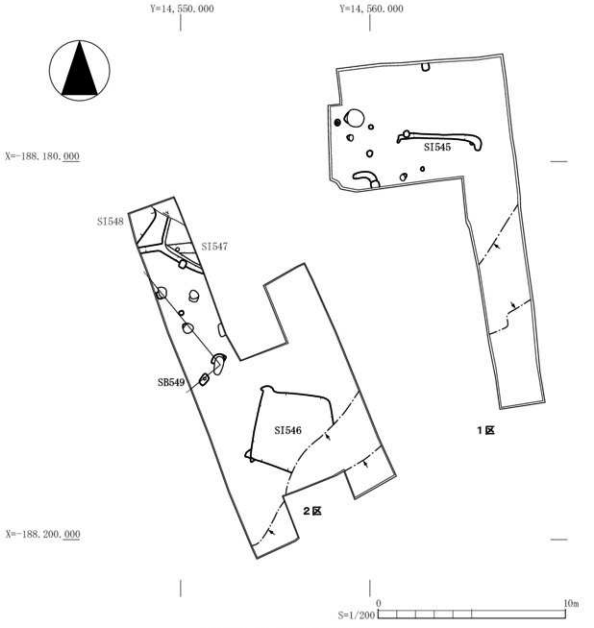
Ⅰ層　表土で、厚さは 16 ～ 25cmである。

Ⅱ層　5・6 区のみで確認された。Ⅲ層に起因する礫を含んでおり、厚さは 15 ～ 90cmで西側ほど厚い。

Ⅲ層　周辺における基盤層となっている岩盤である。今回発見した遺構の検出面となっている。

### (2) 発見した遺構と遺物

1 区で竪穴住居跡 1 棟、2 区で掘立柱建物跡 1 軒と竪穴住居跡 2 棟を発見した。いずれもⅢ層上面で検出している。確認調査であったため、埋土は掘り下げていない。




第 3 図　1・2 区遺構平面図

**1区**（第3図）

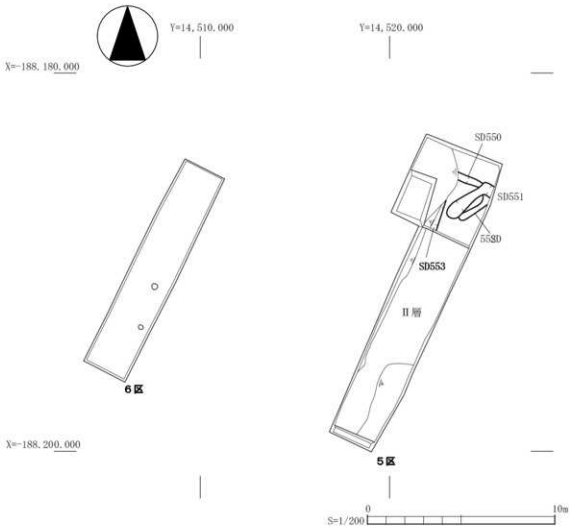
**ＳＩ545竪穴住居跡**

調査区北側で発見した竪穴住居跡である。残存状態が悪く、北辺の周溝のみを確認した。北辺の規模は4.4 m、方向は西で北に1度偏している。遺物は出土していない。

**2区**（第3図）

**ＳＢ549掘立柱建物跡**

調査区北側で発見した南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物跡である。4基の柱穴を確認し、南側柱列東から1間目柱穴を除くすべての柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、東側の柱列で測ると北で約39度西に偏している。規模は、南北が東側の柱列で測ると総長約4.9 m以上、柱間は北より約2.3 m、約2.5 m、東西が南側柱列で測ると2 m以上、柱間は約1.1 mである。堀方の平面形はおよそ方形を基調とし、規模は南側柱列東から1間目柱穴で測ると一辺38～58 cmである。遺物は出土していない。




**第4図　5・6区遺構平面図**

**ＳＩ 546 竪穴住居跡**

調査区南側で発見した竪穴住居跡である。平面形は方形で、規模は北辺 3.5 m、西辺 3.7 mである。方向は西辺で測ると、北で 11 度東に偏している。住居跡の北西隅にカマドの可能性が考えられる張り出しがあるが、検出した面では、焼土や炭化物のまとまりなどは確認できず不明である。遺物は出土していない。

**ＳＩ 547 竪穴住居跡**

調査区北側で発見した竪穴住居跡である。表土（Ⅰ層）を除去すると直ちに床面と周溝が確認でき、残存状態は悪い。同位置で３時期の変遷を確認できた（註）。

**Ａ期**：外延溝に接続するとみられる溝跡を検出した。溝の幅は47～59㎝、方向は西で13度南に偏している。床は、Ⅲ層に起因する礫混じりの土層の上面である。後世の削平やＢ・Ｃ期に壊されていることから、住居全体の規模は不明である。遺物は出土していない。

**Ｂ期**：南辺周溝のみを発見した。Ｃ期によって大部分が壊されているため、住居全体の規模は不明である。遺物は出土していない。

**Ｃ期**：西辺と南辺のそれぞれ一部を検出したのみであるが、平面形は方形と考えられる。規模は西辺 1.9 m以上、南辺 2.6 m以上である。方向は南辺で測ると、西で 29 度北に偏している。周溝は確認した各辺で検出し、その幅は 15 ～ 29㎝である。外延溝は住居跡の南西隅から直線的に延びており、その幅は 32㎝、方向は西で 10 度南に偏している。遺物は出土していない。

**ＳＩ 548 竪穴住居跡**

調査区北側で発見した竪穴住居跡である。東辺と北辺の一部を検出したのみであるが、平面形は方形と考えられる。規模は東辺で２m以上である。方向は東辺でみると北で 35 度東に偏している。遺物は出土していない。

**５区**（第４図）

**ＳＤ 550 溝跡**

調査区北側で発見した東西方向の小規模な溝跡である。ＳＤ 551 と重複し、それよりも古い。方向は西で 20 度北に偏しており、規模は長さ 1.4 m以上、上幅は 30 ～ 38㎝である。遺物は出土していない。

**ＳＤ 551 溝跡**

調査区北側で発見した北西方向から南西方向に屈曲する小規模な溝跡である。ＳＤ 550・552 と重複し、それらよりも新しい。方向は東西方向の箇所でみると東で 36 度北に偏しており、規模は長さ 2.8 m以上、上幅 38 ～ 75㎝である。遺物は出土していない。

**ＳＤ 552 溝跡**

調査区北側で発見した南西から北東方向の小規模な溝跡である。ＳＤ 551 と重複しており、それよりも古い。方向は東で 35 度北に偏しており、規模は長さ 1.9 m以上、上幅 28 ～ 52㎝である。遺物は出土していない。

**ＳＤ 553 溝跡**

調査区北側で発見した南北方向の溝跡である。方向は北で 18 度東に偏しており、規模は長さ 1.7 m以上、幅 32㎝以上である。遺物は出土していない。

---

（註）周溝などの住居内施設は、いずれの時期のものであっても、すべてＡ期の床面上面で検出している。それについては、後世の削平により残存状態が悪いことから、本来存在したＢ・Ｃ期の床面が残っていないことによるものと推定され、Ａ期以外の床面については不明である。

**6区**（第4図）

**柱穴**

調査区の南側で2基確認したのみであり、建物もしくは柱列としてのありかたは不明である。平面形は円形で、規模は直径25～30cmである。遺物は出土していない。

## 3　まとめ

1～2区で竪穴住居跡、5区で溝跡、6区で柱穴を確認した。

遺物は、表土およびⅢ層上面からのみ出土しており、遺構に伴うものはない。また10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰も、遺構の埋土や層位中には確認できなかったことから、直接年代を推定できる手がかりは得られなかった。ただし、今回発見した竪穴住居跡はいずれも方形と考えられ、多賀城跡やその周辺で発見される古代の竪穴住居跡と共通していることから、古代の範疇で考えられる。これ以外の遺構の年代については不明である。

調査区全景・2区（北より）

SI 548・547竪穴住居跡・2区（北西より）

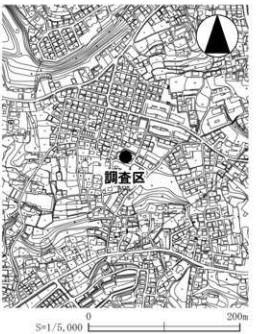
SI 546竪穴住居跡・2区（北より）

# 法性院遺跡第２次調査

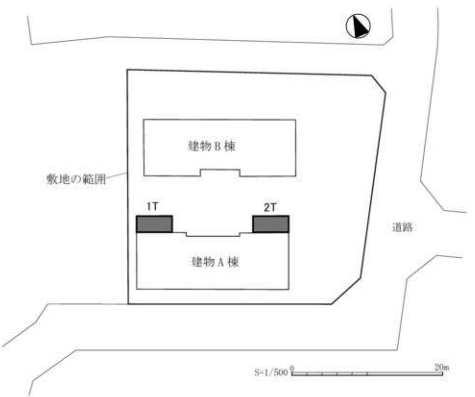
**調査に至る経緯と経過と調査成果**

本調査は、共同住宅新築に伴う発掘調査である。平成22年５月17日に地権者より当該地区における共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に現表土から20cmの切土を行うことが示されており、埋蔵文化財への影響も懸念された。このため、事前に遺構検出面の深さ及び分布状況を知る目的で確認調査を実施し、この成果に基づき本発掘調査に係る協議を行うこととなった。６月17日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

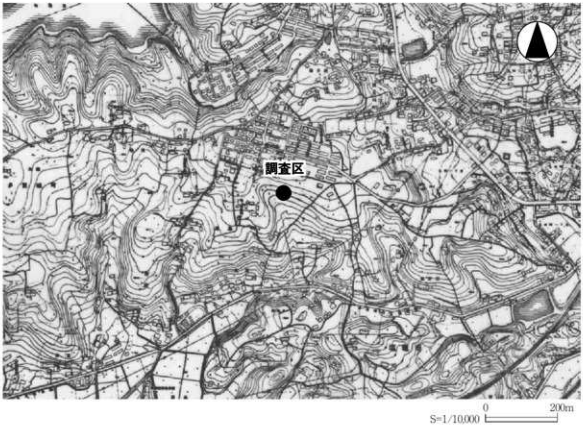
調査は６月21日に実施した。調査区は南側建物の東・西端付近の２カ所に設定した。重機を使用して表土（現代の盛土）の除去を行ったが、いずれの調査区でも２m以上の盛土がなされていた。このことから、当該地区一帯は、旧地形が谷状を呈していたと考えられ、昭和44年刊行の地図を参考にしてみても、舌状丘陵と舌状丘陵の間に挟まれた谷部に位置している。




**第１図　調査区位置図**




**第２図　調査区配置図**




**第３図　調査区位置図（昭和 44 年刊行の地形図）**

調査地全景（南より）

１トレンチ全景（東より）

２トレンチ全景（西より）

２トレンチ土層断面（南より）

# 多賀城海軍工廠機銃部機銃発射場跡の調査

## 1　はじめに

アジア・太平洋戦争末期、航空機用機銃及び機銃弾薬などを製造する目的で昭和18年（1943）10月1日に設置された多賀城海軍工廠は、東北・北海道で唯一の海軍工廠である。

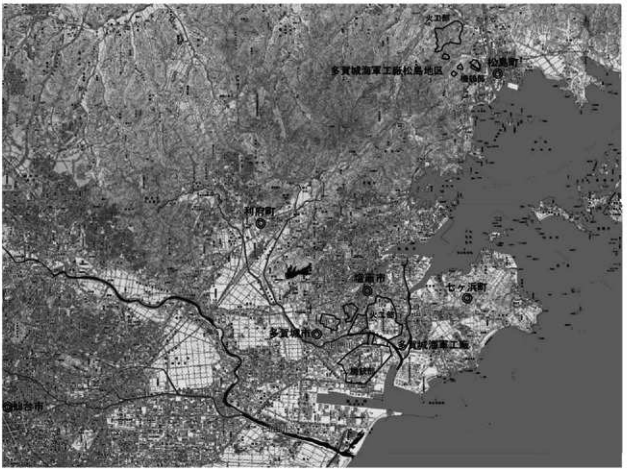
海軍工廠建設は、アジア・太平洋戦争時の多賀城市の歴史を語る上で欠かせないものであり、江戸時代以来続いていた農村風景を一変させる出来事であった。また、現在の多賀城市の発展は臨海部の工場地帯に支えられたものであり、その基盤を築いたのがまさに多賀城海軍工廠といえ、今日の多賀城市を形作る直接のきっかけとなった。

海軍工廠の建物は現在15棟を残すのみで、うち14棟は陸上自衛隊多賀城駐屯地内にある火工部の建物である。残る1棟が株式会社王子チヨダコンテナー仙台工場地内に遺されている機銃発射場の一部であり、これは機銃部として唯一現存する建物である。このように極めて貴重な建物であるにも関わらず、これまで本格的な調査は実施されてこなかった。

## 2　調査に至る経緯と経過

多賀城海軍工廠機銃部機銃発射場跡の敷地を所有する株式会社王子チヨダコンテナー仙台工場は、仙台港の北約800 mに位置しており、平成23年3月11日、東日本大震災によって約4 mの津波に襲われた。

4月になり、市内の文化財被害状況調査を実施した際、現存する機銃発射場跡建物についても確認し、




第1図　多賀城海軍工廠の位置

その時点においても津波による瓦礫などが散乱している状況であった。こうした現状を踏まえ、これまで多賀城海軍工廠に関わる調査を実施していなかったことから、株式会社王子チヨダコンテナーに対し、調査実施に係る要請を行った。

9月、同社から工場を現地再建するにあたって、事務所として利用していた機銃発射場跡建物を解体するとの連絡を受けた。

その後、多賀城海軍工廠に関わるものについては、本市の歴史を考える上で重要であるため、同社と調査に関する協議を重ねた結果、了承が得られたことから、機銃発射場跡の確認調査を実施するに至った。調査は、11月1日に調査区設定箇所を確認し、7日から開始した。

11月7日、残存する機銃発射場跡建物基礎と直交するように1～3トレンチを設定し、着弾部基礎を確認するために4トレンチを設定した。多賀城海軍工廠時の表土が不明であったため、慎重に表土剥ぎを開始した。

**第2図　調査区位置図**

11月8日、1～3トレンチで遺構検出作業を開始し、検出状況の写真撮影を実施した。

11月9日、1～3トレンチにおいて、基礎掘り方の掘り下げを開始。4トレンチにおいて、基礎検出作業を行い写真撮影。着弾部付近の基礎に鉄筋が入っていることを確認。

11月10日、残存する建物基礎の確認作業及び測量を開始し、11月14日には発掘調査を終了した。

なお、11月24日～26日及び12月7日には、現存する機銃発射場跡建物について、東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科小山祐司准教授による建造物調査を実施した。

### 3　多賀城海軍工廠建設の経緯

昭和11年（1936）、海軍は新設工廠として、仮称「A廠」（後の光海軍工廠）と仮称「第二A廠」（後の豊川海軍工廠）の建設計画を決定した。昭和13年（1938）「第二A廠」は豊川に設置することに決定したが、工廠誘致の際、東北地方振興が政治問題化していたことから、仙台市に近い船岡や多賀城が候補地としてあげられていた。（戸塚武比古「回想豊川海軍工廠設立からその末軍への引渡迄」『豊火第一号』）

昭和12年（1937）7月、北京郊外の盧溝橋の戦闘によって中国との全面戦争に突入後、海軍省は戦争による軍需の増大と積極的な生産力拡充政策によって国内の海軍工廠増設の計画を具体化した。昭和13年（1938）には柴田郡船岡村（現柴田町）と多賀城村内の現地調査を行い、昭和14年（1939）8月1日

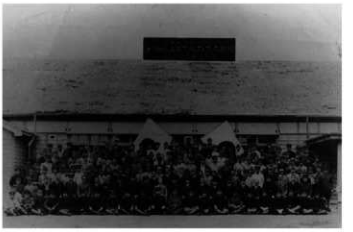
には海軍火薬工廠船岡支所（のちに海軍第一火薬廠）が開庁した。

一方、多賀城村について海軍省は、昭和16年（1941）に再調査し、海軍工廠建設の計画を決定したとされる。多賀城村に決定された理由として、海軍軍務局第一課長を務めた保科善四郎の証言（『多賀城市史2』　所収）によれば、東北は人的資源（労力の供給が可能であること）、安い土地があること、海陸交通の便がよいこと、船岡に海軍第一火薬廠を控えていることなど立地条件に恵まれているとともに、昭和9・10年の冷害により疲弊著しい東北地方を振興する必要があったためとされる。

『戦史叢書　海軍軍戦備（2）―開戦以後』には昭和16年（1941）に建設着手とあるが、実際の工事は昭和17年（1942）6月4日多賀城村国民学校において、多賀城海軍工廠建設用地買収のために土地所有者が集められたこと（「軍用地被買収委員会記録綴」『多賀城市史5』　所収）や、昭和17年（1942）7月1日から19年（1944）3月31日にかけて工事のため爆破作業の通知が行われていること（「爆破作業ニ関スル件　通知」横建機密第3854号　『多賀城市史5』　所収）などから、昭和17年（1942）7月から開始したことがわかる。

昭和17年（1942）10月、多賀城村は労務供給課を設置し、工廠建設に伴う直営工事関係労務者の供給を開始した。そして、昭和18年（1943）10月1日に開庁し、10月30日には、多賀城海軍工廠竣工式や「開廠奉告祭」が執り行われたことが「鹽竈神社社務所日誌」や「多賀城海軍工廠竣工式記念」写真から知ることができる（註1）。

戦局が悪化した昭和20年（1945）4月頃には、松島町高城地区に多賀城海軍工廠松島地区（地下工廠）が開設されたと言われている。



「多賀城海軍工廠竣工式記念」写真

### 4　多賀城海軍工廠の役割

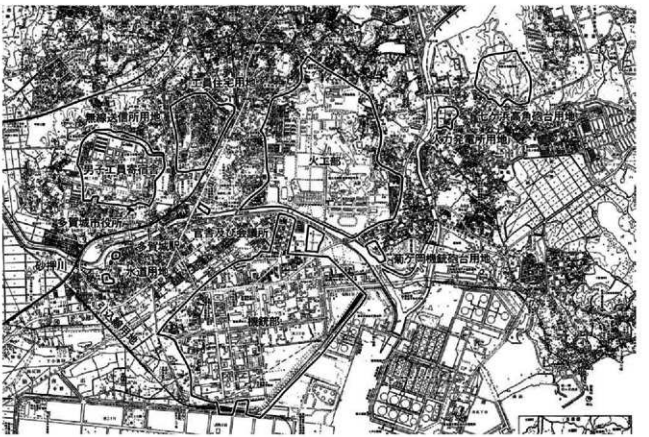
多賀城海軍工廠設置の目的は、『戦史叢書　海軍軍戦備（2）―開戦以後』によれば、以下のように説明されている。

多賀城海軍工廠（所在地　宮城県）は航空機用機銃、同弾薬包及び爆弾製造専門工場として昭和十四年に建設計画が決定し建設に着手された。

完成目標　昭和二十年三月

施設能力の年産目標　航空機用十三粍機銃弾薬包五〇〇万発、二十粍機銃三、〇〇〇挺、同弾薬包五〇〇万発、八百瓩以下各種爆弾五万個、同用素材、航空機用火工兵器。（注　その後鋼材不足を理由として昭和十六年に爆弾製造施設は中止された。）

実施経過　昭和十四年土地選定、十六年建設着手、十八年十月一日開庁、十九年に大部分の施設完成




**第３図　多賀城海軍工廠用地図（『多賀城市史』2より複写）**

海軍工廠の組織は、総務部、会計部、医務部、製鋼部、機銃部、火工部の６部門と工員養成所で構成されていた。以下、生産部門に関して概要を述べる。

製鋼部は、主に弾頭や弾帯を製造していたが、敗戦間近には原料が不足していたため金属回収令によって回収された金属製品を溶鉱炉で溶かし材料にしていた。

機銃部では、20ミリ機銃、7.7ミリ機銃などの航空機銃を製造していた。多賀城海軍工廠設置は機銃生産を主としていたことが保科善四郎の証言から知ることができる（以下、『多賀城市史2』から引用）。

> 航空機用機銃の威力向上を目指していた海軍は、昭和十年、スイスのエリコン社の二〇ミリメートル機銃に着目した。その機銃の特徴は、弾丸の威力が格段に大きく、機銃そのものが軽量で、しかも反動が小さい点であった。国産化は十三年六月完成、この機銃は、試作を計画中の零戦に二挺ずつ装備することとして、生産を計画した。この国産化されたエリコン系二〇ミリメートル機銃は、九九式二十粍一号（二号）固定（旋回）機銃として制式化された。昭和十四年度から飛行機も増え、状況も窮迫をつげつつある下で急速に量産体制に入り、豊川、鈴鹿、そして多賀城に工廠建設ということになった。多賀城海軍工廠は、航空本部の直属工場で、主として機銃を量産するということでスタートした（将来は三〇ミリメートル機銃を製造する構想ももっていた）。しかし、多賀城の場合は、戦況が厳しくなった昭和十八年に大急ぎで建設したので、資材や工作機械も不足して量産体制にこぎつけるまでには至らなかった。

火工部は、焼夷爆弾や親子爆弾のほか、落下傘が装填されている照明弾や吊光弾など信号爆弾を主に製造していた。なお、昭和18年（1943）12月1日焼夷爆弾製造中に大爆発が起こっている。

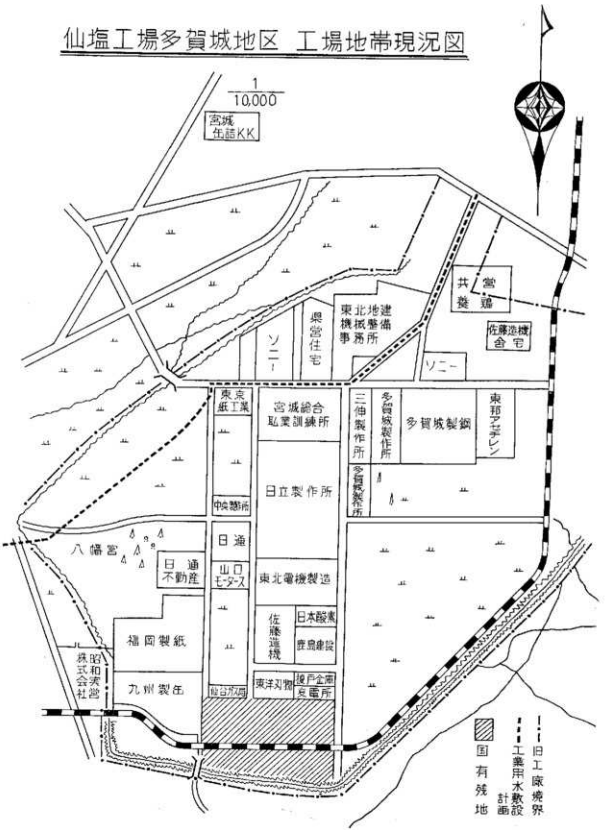
機銃発射場跡建物（昭和36年　東より）

### 5　機銃部跡地の変遷

昭和20年（1945）8月15日に終戦を迎えると、同年9月2日多賀城海軍工廠は、現状保持の状態で占領米軍の管理下に入り、9月16～26日に占領米軍第14軍団第11空挺師団第188連隊が、旧多賀城海軍工廠を駐屯地として進駐した。

在日米軍が撤退すると同時に、全ての用地が大蔵省に返還された。多賀城町は、昭和26年（1951）、従業員15名以上の工場に対し、優遇政策を打ち出すなど工廠跡地への工場誘致を進め、さらに宮城県も、昭和32年（1957）、水産商工労働部企画課が『旧軍工廠案内』を作成し、多賀城海軍工廠跡地をはじめとする、旧軍工廠遊休地域のうち、工場設置に好条件を備えている地域の紹介を行った。そのような中、昭和34年（1959）11月、機銃発射場跡建物を利用して、福岡製紙株式会社（株式会社王子チヨダコンテナーの前身）仙台工場が設立された。

機銃部跡航空写真（昭和36年　上が北）




第４図　多賀城海軍工廠跡地の利用（「1961年版多賀城町勢要覧」）

## 6　調査成果

今回の調査は、平成4年に取り壊された機銃発射場跡の弾道が通る部屋の痕跡を確認するために実施した。しかしながら、現況を確認すると、建物基礎や敲きが残っていたことから、現認できる基礎の範囲を確認するため測量調査を実施するとともに、発掘調査により建物基礎の検出や構造を明らかにすることとした。

### (1) 測量調査（第5図）

測量調査により判明したことについては、以下のとおりである。なお、機銃発射場跡に残る発射場部分の建物については、附章に記載されているのでそちらを参照されたい。

**①建物基礎**

約120 mにわたり弾道射屋の基礎を3列確認した。南壁－中壁間の間隔は心々で5.97 mであり、中壁－北壁間は5.90 mである。確認できる基礎上端の厚さは36～38cmであるが、建物西端から7.10 m東までは40cmと若干厚く、鉄筋が入っていることが確認できる。方向は南壁でみると東で6度37分48秒北に偏する。

**②敲き**

建物基礎を確認した範囲のほぼ全域で確認した。敲きの厚さは12cmほどであり、上面の標高は1.50 m前後である。直径3～5cmの玉砂利が混ざっていることが観察できる。

**③控え壁基礎**

控え壁の基礎を20箇所（№1～№21、№14は攪乱により欠損）で確認した。支え壁の間隔は南壁でみると東から心々で6.06 m、5.96 m、5.99 m、5.98 m、6.00 m、5.95 m、5.98 m、5.99 m、5.96 m、5.81 m、6.18 m、5.95 m、(6.0 m)、(6.0 m)、5.95 m、12.91 mであり、最も西の№17と西壁基礎中心までの間隔は12.94 mである。北壁は東より6.01 m、5.93 m、13.00 mであり、最も西の№21と西壁基礎中心までの間隔は12.88 mである。控え壁基礎の規模は完全に残っている№7で計測すると長さ64cm、幅36cmである。

### (2) 発掘調査（第7～9図）

**①層序**

今回の調査区で確認した層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　アスファルト舗装、砕石、造成時の盛土などで、厚さは10～30cmである。

Ⅱ層　黄褐色岩石ブロックを含む人為的に盛られた整地層である。1トレンチ南半部、2トレンチ南半部に分布している。

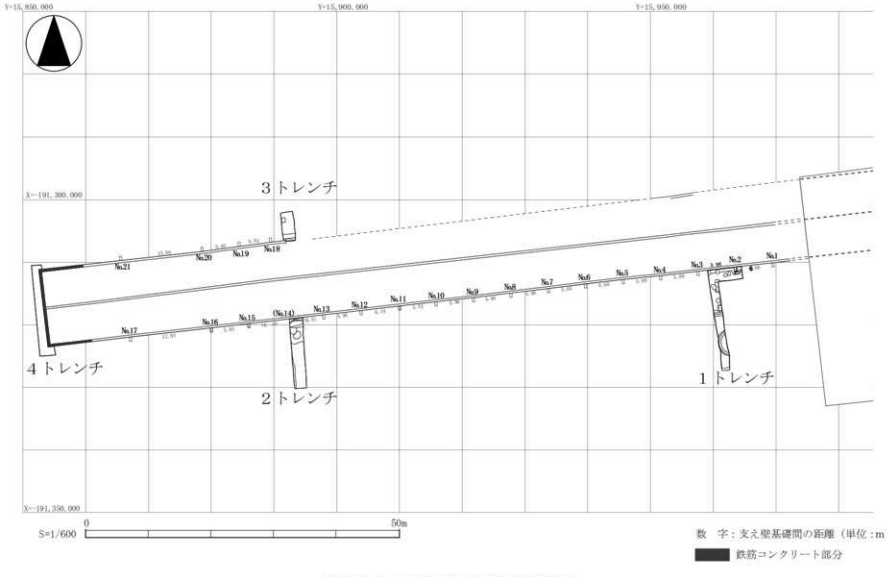
Ⅲ層　黒褐色砂質土で、海軍工廠建設時の基盤層である。層の厚さは20～30cmで、各トレンチ全域で確認している。

Ⅳ層　にぶい黄褐色砂で、各トレンチ全域において確認している。

### (3) 発見遺構と遺物

**①1トレンチ**

調査対象地で最も東側に設定した南北方向のトレンチで、機銃発射場建物跡基礎・基礎掘り方、土管、土壙などを発見している。以下、主な遺構について記載する。




**第５図　トレンチ配置と確認した建物基礎**

**機銃発射場建物跡南壁基礎・掘方**

トレンチの北端において、機銃発射場建物跡の基礎及び基礎掘方を5m確認した。基礎掘方は第Ⅲ層上面で検出し、掘方の幅は基礎南端より50～80cmである。掘方埋土は、基盤層である黒褐色土（第Ⅱ層）と黄燈色土（第Ⅲ層）のブロックで構成される人為的に埋め戻された土であり、木製の角材が1点出土している。

**土管**

トレンチ中央部において、直径24cmの土管及び埋設するための掘方、土管敷設用コンクリート敲きを約1.4m確認した。掘方の幅は0.92mであり、コンクリート敲きは0.46mである。表土から掘り込まれているコンクリート工作物と重複関係があり、それよりも古い。土管には「□中川L□」の文字が印字されている。

**ＳＫ001土壙**

トレンチ北端部の第Ⅱ層上面で確認したほぼ円形の土壙である。建物南壁基礎掘方と重複関係があり、それよりも新しい。規模は直径0.66m、深さ16cmである。埋土は、暗褐色砂質土である。遺物は「福岡製紙株式会社工具器具備品」と刻字された金属製タグや鉄釘、波板などが出土している。

**②2トレンチ**

1トレンチの西約60mの機銃発射場建物跡南壁基礎に接するように設定した南北方向のトレンチで、機銃発射場建物跡基礎・基礎掘方、土壙を発見した。

**機銃発射場建物跡南壁基礎・掘方**

トレンチ北端部の第Ⅲ層上面において、建物南壁基礎に沿うように建物基礎掘方を確認した。ＳＫ002土壙と重複関係があり、それよりも古い。掘方の幅は基礎南端より0.98～1.34mであり、深さは57cm以上である。掘方埋土は、基盤層である黒褐色砂質土（第Ⅲ層）ブロックとにぶい黄褐色砂（第Ⅳ層）で構成される人為的な埋土である。また、建物基礎構築後、掘方を埋め戻す前にコンクリートを流し込んでいる痕跡を確認している。

なお、基礎にはコンクリートを流し込むための枠板痕跡が残っていた。

**ＳＫ002土壙**

トレンチ北端部の第Ⅲ層上面で確認した不整楕円形の土壙である。機銃発射場建物跡基礎掘方と重複し、これよりも新しい。規模は、長軸1.2m以上、短軸1.2m、深さ20cmであり、断面形は皿状である。埋土は、黒褐色砂質土で炭化物を多量に含む。遺物は多量の鉄釘のほか、管状の金属製品が出土している。

**③3トレンチ**

2トレンチの北延長上の機銃発射場建物跡北壁基礎に接するように設定した南北方向のトレンチで、機銃発射場建物跡基礎・基礎掘方、土壙を発見した。

**機銃発射場建物跡北壁基礎・基礎掘方**

今回の調査で全容が確認できた唯一のものである。建物基礎は、幅96cm、厚さ28cmの基底部に厚さ85cmの基礎が立ち上がる。基礎の下には厚さ10cmの玉砂利が敷設されている。掘方の規模は、上幅1.91～1.98m、下幅1.10m、深さ1.02mである。埋土は、基盤層である黒褐色砂質土（第Ⅲ層）ブロックとにぶい黄褐色砂（第Ⅳ層）で構成される人為的な埋土である。

なお、基礎にはコンクリートを流し込むための枠板痕跡が残っていた。

④4トレンチ

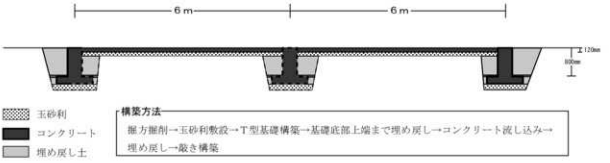
機銃発射場跡建物跡西端付近は、現況で基礎を確認できなかったことから、建物西端を確認するために設定した南北方向のトレンチである。第Ⅰ層を除去したところ、機銃発射場建物跡西端の鉄筋コンクリート製基礎を確認した。

## 7　まとめ

(1) 多賀城海軍工廠に関わる施設の調査をはじめて実施した。

(2) 平成4年に取り壊された機銃発射場建物の基礎は目視できないと想定していたが、現地を実見したところ、約120 mにわたり建物外壁・間仕切り・控え壁基礎、コンクリートの敲きを確認した。

(3) 以下のような建物基礎の構築方法を確認することができた。




**第6図　建物基礎構築方法模式図**

(4) 建物西端から7.10 m東までの外壁は、鉄筋コンクリート造りであることが判明した。残存する建物の状況や写真資料から、それ以外の部分は、石壁の基礎であることも確認し、西端付近は機銃発射場の着弾地点にあたることから頑強にしていたものと思われる。

(5) 今回の調査で確認した建物基礎は、建物調査（附章参照）と整合を図った結果、S3、S4の壁の基礎にあたることが判明した。

**註1**

多賀城海軍工廠の開庁について、『多賀城市史2　近世・近現代』では、「昭和十七年十月三十日、多賀城海軍工廠は横須賀鎮守府司令長官、豊田副武大将臨席のもとに開庁式を挙行した。」と記載されている。しかしながら、多賀城海軍工廠の開庁については「海軍工廠令」で知られるように昭和18年10月1日であり、昭和17年10月30日に開庁式が挙行されたという資料を確認することはできなかった。

なお、昭和18年10月30日に「多賀城海軍工廠竣工式」や「開廠奉告祭」が執り行われたことが鹽竈神社社務所日誌や「多賀城海軍工廠竣工式記念」写真から知ることができる。

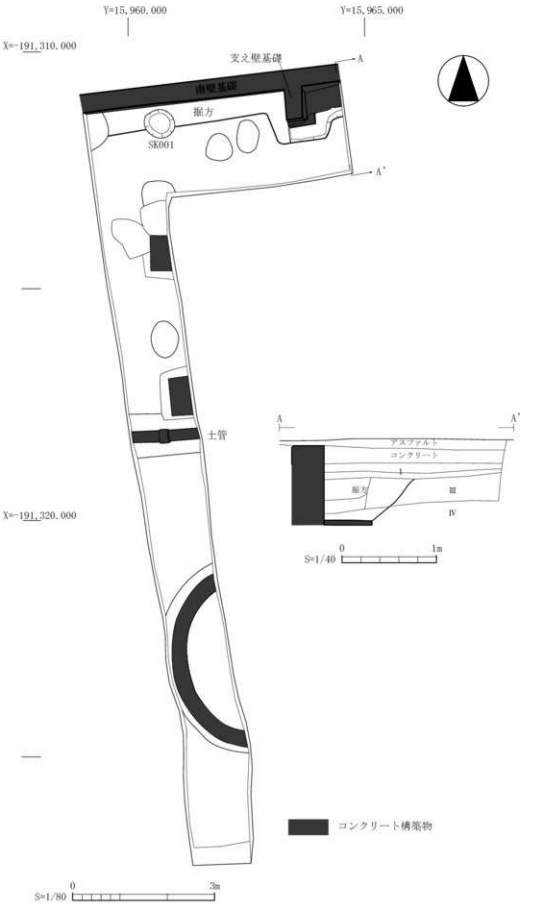
**【引用・参考文献】**

『戦史叢書　海軍軍戦備（2）―開戦以後』　防衛庁防衛研修所戦史室　1975

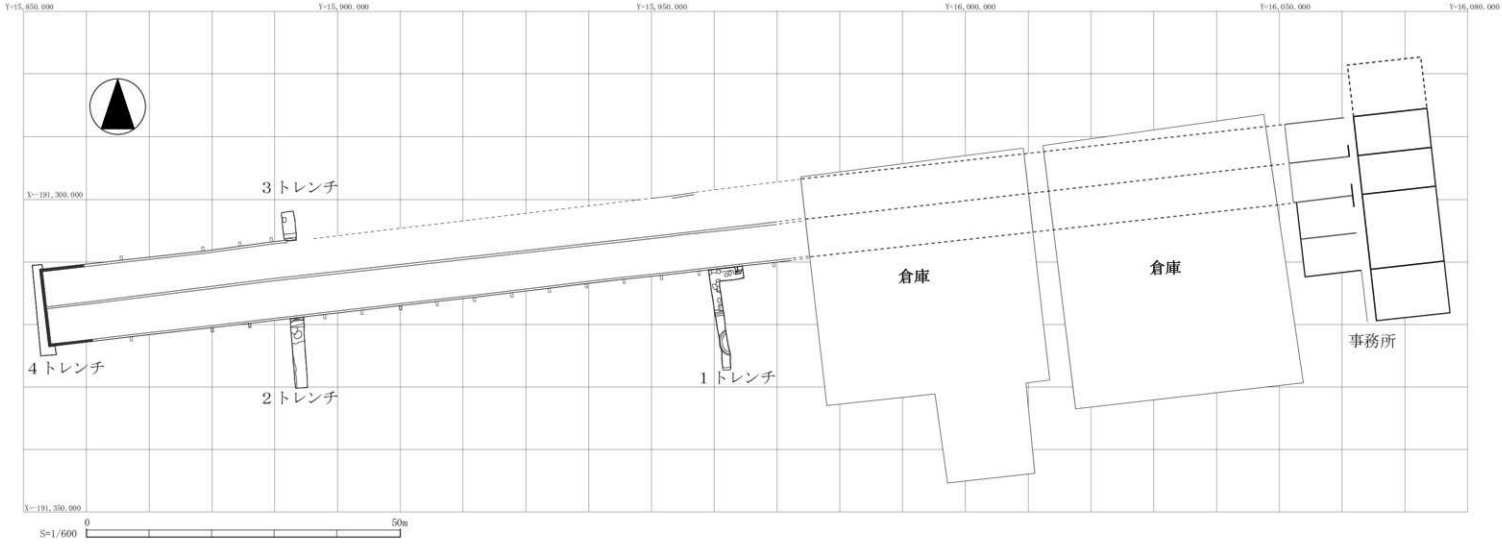
『多賀城市史　第5巻』　多賀城市史編纂委員会　1985

戸塚武比古「豊川海軍工廠設立からその米軍への引渡迄」『豊火第一号』豊火の会　1989

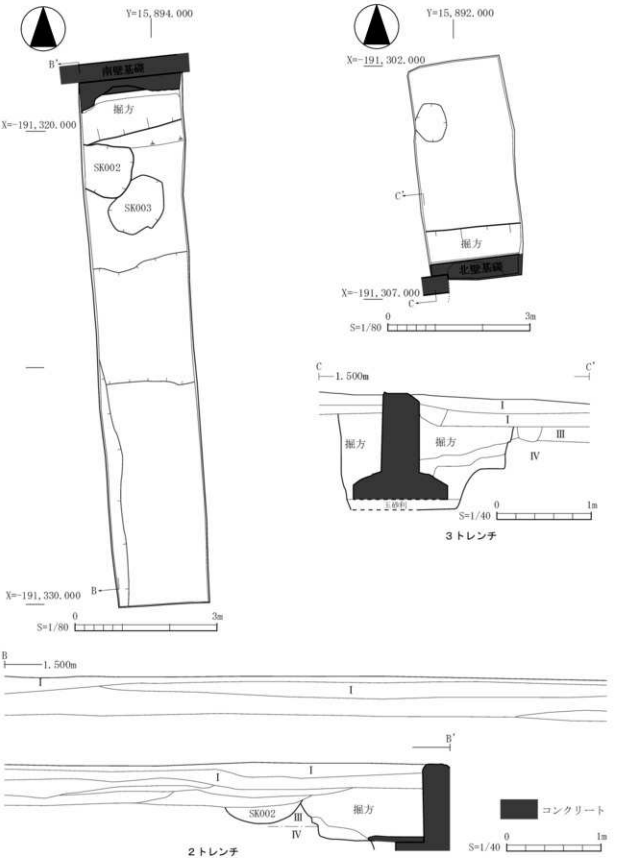
『多賀城市史　第2巻』　多賀城市史編纂委員会　1993




**第７図　１トレンチ平面図・断面図**


Y=15,850.000
Y=15,900.000
Y=15,950.000
Y=16,000.000
Y=16,050.000
Y=16,080.000
X=-191,300.000
X=-191,350.000
3トレンチ
4トレンチ
2トレンチ
1トレンチ
倉庫
倉庫
事務所
0
50m
S=1/600

**第８図　調査区全体図**




**第9図　2・3トレンチ平面図・断面図**

機銃部跡航空写真（昭和 22 年米軍撮影　○は機銃発射場跡）

写真図版 1

**調査前風景**（東より）

**調査前風景**（西より）

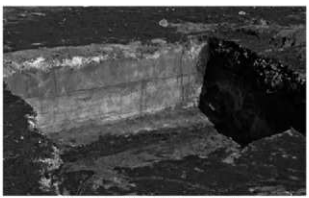
1トレンチ北端遺構検出状況（西より）

1トレンチ南半部遺構検出状況（北西より）

建物基礎掘方土層堆積状況（西より）

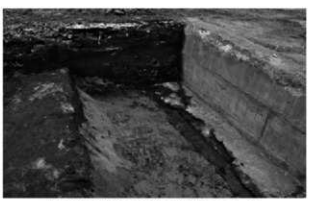
角材出土状況（建物基礎掘方　北より）

2トレンチ遺構検出状況（南より）



建物南壁基礎検出状況（南より）

SK 002・003 検出状況（南西より）



南壁基礎掘方土層堆積状況（東より）

3トレンチ遺構検出状況（北東より）

3トレンチ北壁基礎土層堆積状況（東より）

4トレンチ西壁基礎検出状況（北より）

西端部北壁鉄筋コンクリート基礎（北より）

西端部北壁鉄筋コンクリート基礎（北西より）

機銃発射場跡建物（南東より）

写真図版4

# 附章　旧多賀城海軍工廠の機銃発射場建物について

東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科　准教授　小山祐司

## 1　はじめに

宮城県内の近代建築遺産の中で、多賀城市の旧海軍工廠の建築物遺構は、ほとんどその存在自体知られていない状況にあった。

多賀城市では、近年、独自に海軍工廠関連遺産の調査を行ない、13棟の建物遺構が確認している。遺構は、陸上自衛隊多賀城駐屯地内に存在する、旧海軍工廠の火工部に属した石造建造物12棟と、多賀城市宮内の民間工場敷地内に存在する機銃部に属した旧機銃発射場1棟である。昨年の東日本大震災と大津波により、多賀城市街も多大な被害を被ったが、これら海軍工廠遺構も甚大な被害をうけた。陸上自衛隊多賀城駐屯地内の遺構建物は、地震による壁面損傷の被害がほとんどであり、その被害状況や建造物の調査は平成24年度に行われる予定である。本稿で報告する旧機銃発射場建物は、地震とともに、津波被害を受けており、かろうじて原型をとどめていた。当該建物は、工場地内の他の施設の復旧復興工事が急がれる中、取り壊しが決まった。そのため、多賀城市教育委員会の依頼を受け記録保存のための調査が行われたものである。実測調査は平成23年11月24日～26日と12月8日の4日間で行われた。(註1)

尚、平成23年12月末には、当該建物は全て取り壊されている。

海軍工廠時代の図面などの資料は数少なく、建物内の諸室の名称、用途などは、不明である。従って、今回の実測調査で判明した建築的な所見を中心に報告を行う。

## 2－1　多賀城海軍工廠の設立と建設の経緯

多賀城海軍工廠は、戦時下における軍需の増大と生産力拡充のために国内における海軍工廠の増設のため設立された。具体的には、航空機用機銃及び弾丸と航空機搭載用爆弾を製造するためであった。建設計画および施工管理に当たったのは横須賀海軍建築部（後に施設部に改称）の技術将官と技師を中心とする上部組織と多賀城の大代に設けられた多賀城地方施設事務所本部の下部組織であった。(註2)

また、建設作業に動員されたのは、建設職人や人夫及び徴用工（囚人、朝鮮労働者）であった。海軍建設協力会（大林組、鹿島組、井上工業、木田組、安藤組）が施設建設を中心に請け負い、菅原組や徴用工は、造成工事や鉄道工事に充てられた。(註3)

多賀城海軍工廠は、昭和17年7月より用地開削を始め、昭和18年10月1日に開庁し、翌昭和19年には施設のほとんどが完成していた。(註4)

## 2－2　多賀城海軍工廠施設の概要

多賀城海軍工廠の組織・機構は中谷地地区に設けられた総務部、会計部、医務部、(製鋼部)、機銃部と丸山地区の火工部と留ヶ谷地区の工員養成所に分かれている。(註5)

このうちの三つの製造部門の内、機銃部は航空機用機銃として七・七耗機銃、七・九耗機銃、二十耗機銃などの製造にあたり火工部は航空機用機銃弾丸と焼夷弾や照明弾や信号弾などの製造に任たった。製鋼

部は昭和18年に機銃部から独立した部門であり、弾頭や弾帯の製造に任たった。

また、これら諸施設の規模については、戦後の資料であるが、『多賀城海軍工廠引渡目録』（第二復員局残務処理部資料課）によると、

「一、施設全般

多賀城地区

敷地四、九六一、六〇〇平米

（内厚生地区一、〇五〇、四〇〇平米）

建物二、〇二四棟二二九、二九七平米

南地区（筆者、略記1から61の建物名称と構造・規模・記事が記される。機械工場などの金属加工を行う施設名称が多い。）

（中略）

<u>38 機銃發射場コンクリート木造平家一式</u>

（下線、筆者付加）

（中略）

北地区（筆者、略記1から76の建物名称と構造・規模・記事が記される。料薬配合場や弾丸工場や弾薬庫などの施設が多い。）

（中略）

付属施設

共済組合病院（筆者、略記1から14の建物名称と構造・規模・記事が記される。）

会議所（筆者、略記2件の建物名・構造・規模・記事が記される。）

（中略）

官舎（筆者、略記2件の建物名・構造・規模が記される。）

**図1 多賀穣海軍工廠建物配置図（多賀城市史第二巻）**

| 番号 | 名称 | 棟数 | 構造 | 数量 | (平米) | 記事 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 物資部及倉庫 | 1 | 木造平家 | 延約 | 4,000 | |
| 2 | 守衛詰所及哨所 | 5 | 木造平家 | 延約 | 100 | 五棟 |
| 3 | 札場 | 1 | 木造二階家 | 約 | 788 | |
| 4 | 原動工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,440 | |
| 5 | 第二自動車庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,100 | |
| 6 | 部品倉庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 190 | |
| 7 | 部写真事安所 | 1 | 鉄筋コンクリート上部木造平家 | 約 | 5 | |
| 8 | 第一消防車庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 402 | |
| 9 | 事務所 | 1 | 木造二階家 | 延約 | 3,300 | |
| 10 | 医務部 | 1 | 木造平家 | 約 | 412 | |
| 11 | 第一変電所 | 1 | 石造平家 | 約 | 600 | |
| 12 | 油庫 | 1 | 煉瓦造平家 | 約 | 100 | |
| 13 | 油庫 | 1 | 石造平家 | 約 | 400 | |
| 14 | 農耕用牛小舎 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,000 | |
| 15 | 自転車置場 | 1 | 木造平家 | 約 | 250 | |
| 16 | 配電所 | 1 | 木造平家 | 約 | 312 | |
| 17 | 第一電動車庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 460 | |
| 18 | 第六倉庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 2,430 | |
| 19 | 中央機器庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,640 | |
| 20 | 第五材料倉庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 2000 | |
| 21 | 機銃庫 | 1 | 木造平家 | 延約 | 1,460 | |
| 22 | 第一機械工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 6,580 | |
| 23 | 同附属手洗場及便所更衣所 | 1 | 木造平家 | 約 | 210 | |
| 24 | 第二機械工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 6,580 | |
| 25 | 同附属手洗場及便所更衣所 | 1 | 木造平家 | 延約 | 1,020 | |
| 26 | 汽罐場 | 1 | 煉瓦造平家 | 約 | 636 | |
| 27 | 同附属便所 | 1 | 木造平家 | 約 | 12 | |
| 28 | 工員会食場 | 1 | 木造平家 | 約 | 2,445 | |
| 29 | 熱処理工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 6,700 | 同付属家 約10坪含ム空爆ニヨリ屋根硝子破損セリ |
| 30 | 工具工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 6,500 | 疎開ノタメ解体中五〇%完了 |
| 31 | 同附属家 | 1 | 木造平家 | 約 | 210 | |
| 32 | 第三機械工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 3,380 | 空爆ニヨリ屋根硝子破損セリ |
| 33 | 同附属家 | 1 | 木造平家 | 約 | 105 | |
| 34 | 第二倉庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 2,430 | |
| 35 | 第一仕上工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 6,500 | 空爆ニヨリ屋根硝子破損セリ |
| 36 | 同附属家 | 1 | 木造平家 | 約 | 210 | |
| 37 | 検査場 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,100 | |
| 38 | 機銃発射場 | 1 | コンクリート木造平家 | 一式 | | |
| 39 | 弾薬包小出所 | 1 | 石造平家 | 約 | 20 | |
| 40 | 機関車庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 310 | 同付属家 10坪含ム |
| 41 | 金物格納置場 | 1 | 木造平家 | 約 | 600 | |
| 42 | 廃棄物及屑物焼却場 | 1 | 木造平家 一部石造平家 | 約 | 500 | |
| 43 | 第一材材工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,490 | |
| 44 | 製材工場 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,480 | |
| 45 | 木材乾燥場 | 1 | 木造平家 | 約 | 490 | |
| 46 | 油清浄場 | 1 | 石造平家 | 約 | 520 | |
| 47 | 材料倉庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,490 | |
| 48 | 第一燃料倉庫 | 1 | 石造平家 | 約 | 485 | 空爆ニ依リ半焼 |
| 49 | 鋼材置場 | 1 | 石造平家 | 約 | 970 | |
| 50 | 薬品庫 | 1 | 石造平家 | 約 | 490 | |
| 51 | 鍛冶工場 | 2 | 木造一部鉄骨平家 | 約 | 10,000 | 空爆ニ依リ一部破損セリ二棟 |
| 52 | 同附属手洗場及便所 | 1 | 木造平家 | 約 | 135 | |
| 53 | 汽罐場 | 1 | 木造平家 | 約 | 710 | |
| 54 | 同附属手洗場及便所 | 1 | 木造平家 | 約 | 20 | |
| 55 | 瓦斯発生場 | 1 | 鉄骨一部木造平家 | 一式 | | |
| 56 | 同附属家 | 1 | 木造平家 | 約 | 98 | |
| 57 | 第四倉庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,460 | |
| 58 | 第三倉庫 | 1 | 木造平家 | 約 | 1,460 | |
| 59 | 第一材料倉庫 | 1 | 木造平家一部二階家 | 約 | 1,370 | 便所手洗所共 |
| 60 | 第一物品納入所 | 1 | 木造平家一部二階家 | 約 | 1,320 | |
| 61 | 購買課材料課事務所 | 1 | 木造二階家 | 約 | 2,000 | 空爆ニ依リ破損セリ |

**表1 多賀城海軍工廠の建物（南地区のみ抄録）**

（中略）

工員寄宿舎（筆者、略記４件の建物名・構造・規模が記される。）

（中略）

工員養成所（筆者、略記３件の建物名・構造・規模記事が記される）（以下略）」

とあり、4,961,600 平方メートルの敷地に 2,024 棟の建造物が配置されていた。この棟数については、空爆などによる焼失や破損に関するの記事もあり、戦中時の棟数と考えられる。また、機銃部と製鋼部は南地区に火工部は北地区に配置されている（図１、表１参照）。今回調査対象となった、機銃発射場は機銃部に属する施設で南地区の「38 機銃發射場コンクリート木造平家一式」に相当する建物である。

### ３　機銃発射場の建物について

#### (1) 構造と規模

機銃発射場は、平家一部二階建ての建築物であり、構造は鉄筋コンクリート造、組積石造、木造の３種類の混構造体である。これらの床面積合計は 832.42㎡である（表２参照）。

鉄筋コンクリート造で構成されているのは、１階のＲＣ１、ＲＣ２、ＲＣ３、ＲＣ４の４室とその西側に設けられた通路部である。面積は 288.31㎡。

構造はラーメンであり、ＲＣ柱は、310 ㎜から 345 ㎜角の正方形で、ＲＣ梁の成は 250 ㎜。ＲＣ壁厚は、内壁が 144 ㎜、外壁は仕上げモルタルを含め 160 ㎜。これらの躯体部は、殆ど被害を受けていなかったが、開口部建具の殆どが流失していた。

南北方向のスパンが 5,935 ㎜から 6,039 ㎜であり、東西方向のスパンは 5,024 ㎜から 5,031 ㎜。屋根はＲＣスラブの陸屋根を載せている。床はコンクリート叩き。床天井高は 3,651 ㎜から 3,680 ㎜であった。通路部は現在南側が入り口開口とされているが、元は閉じられていたと考えられる。尚、通路部北端は、Ｓ４室の北側組積石造によって閉じられていたと復元をしている。ＲＣ１からＲＣ４の西側には、それぞれ発射口（上２眼、下１眼）と通路部への出入り口が設けられている（図５ＣＣ′断面展開図参照）。この出入り口の通路側上部には、たれ壁が作り出されている。ＲＣ１の通路側出入り口は改変されており、当初はＲＣ３に遺る開口部の形状をしていたと考えられる。ＲＣ４の通路側出入り口は現在２カ所設けられているが、北側の開口部は壁であったと考えられる。また、天井に設けられた換気口（又は、明かり窓）はＲＣ３、ＲＣ４のみに存在が確認された。

組積石造で構成されているのは、ＲＣ構造部の西側のＳ１、Ｓ２、Ｓ３、Ｓ４の４室である。この内、Ｓ３、Ｓ４は、さらに西側に 200 ｍほど延びていたことが、多賀城市教育委員会の発掘調査で判明した（図 10

**表２　機銃発射場面積表**

| 階 | 構造 | 諸室名 | 面積（㎡） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 一階 | RC造 | RC1，RC2 RC3 RC4 通路部 | 288.31 | |
| | 組積石造 | S1，S2 S3 S4 | 247.33 | |
| | 木造 | W１，W２ | 168.25 | 階段室を算出していない |
| | 一階面積小計 | | 703.89 | |
| 二階 | 木造 | W３，W５ | 128.53 | W４は後補のため省く |
| 面積合計 | | | 832.42 | |
| 復元一階 | 組積石造 | S3 S4の延伸部 | 2403.38 | |
| 復元面積合計 | | | 3235.80 | |

参照)。この形状は、図8の古写真とも符合する。

また、S1、S2部分外壁は、一部RC造モルタル仕上げにされているなど、改変があり当初の形状は不明である。発掘調査でも西側に延伸していることは確認できなかった。古写真でも、この部分の延伸は認められないので、S1、S2の規模は、ほぼ現状の通りと考えられる。面積は247.33㎡で、天井はRCスラブを載せた陸屋根である。RCスラブの厚さは、約135mm。床はコンクリート叩き。床と天井内法高は、3,625mm。石材1ピースの大きさは幅920mm×高さ250mm×厚さ300mmである。この石材の厚さがそのまま、組積石造内外壁の壁厚となる。S4北側外壁に控え壁が遺る。発掘調査によると、西側延伸部の壁にも控壁が約6m毎に設けられていた。換気口(または、明かり窓)はS2は東寄りに2個、西端に1個設けられている。S1の東端部分は、階段室などによる改築で現在失われているが、S2と同様に復元した。S3、S4も東側通路寄りに2個ずつ設けられているが、西端部分は存在が確認できない。古写真によると西側延伸部にも、不規則であるが、換気口が確認できる。

組積石造部の躯体は、被害を確認することが出来ない。開口部の建具などは、殆どが流失していた。

木造で構成されるのは、一階のW1、W2室と二階のW3、W4、W5室である。

一階木造部は、今回の津波により、W2は完全に破壊され、基礎部分が残るだけであり、W1室も外壁の殆どが破壊されていた。二階は、増改築を繰り返されており、創建当初の形状から、かなり改変されていたが、二階屋根組トラス形状から、W4が後補であり、W3部までが当初規模と考えられた。W1、W3の屋根形状は断面図に示すとおり木造トラスである。1階W1の壁下地の板材と2階W3の小屋組トラス材の一部に、「宮城縣木材株式会社」[6]と記されていた(図9)。W4部分からは、発見されていない。この会社は昭和17年9月設立、昭和18年11月に改組されており、このことから1階と2階のW3は創建当初のものであると確認された。小屋組みトラスのスパンは9,957mmであり、敷梁長さは、10,632mm。1階(W1)軒高は4,148mm。2階(W3)軒高は6,578mm。

また、現在の一階から昇る内階段は明らかに後補であり、W5室南辺の天井裏に当初の庇が発見されたことで、外階段が復元されると考えられた。これらの木造部分建物の形状は、図8の古写真と符合しており、今回報告する二階平面図は、ほぼ、創建期の形状を示していると考えられる。このとき、1階部木造部分の面積は168.25㎡で2階部分は128.53㎡であり、木造部面積合計は、296.78㎡。

**(2) 復元考察**

1階部は、鉄筋コンクリート造の4室と通路部を中心にしてその北端と南端に木造平家の建物を配置し、西に組積石造の建物を付す構成になっている。組積石造のS3とS4は西に約200m延びていた。通路部の北端と西端は、組積石造の壁で閉ざされていたと考えられる。従って建物1階内部には、W1もしくはW2から入ってR1またはR4に至る動線を持っていたと考えられる。2階はRC1、RC2スラブ上にW3が設けられ、1階通路上部スラブにW5が置かれ外階段が設けられていたと考えられる。この2階の外階段が南側に付すことを考えると、1階の主たる入り口は、W1に設けられていたと考えられる。

西側延伸部を含めた、創建期の建物の面積は、3,235.80㎡と考えられる。機銃部の諸施設の中でも規模の大きい建造物であった。また、鉄筋コンクリート構造を用いている施設は南地区では他に御写真奉安所(御真影奉安殿)だけであった。

旧海軍工廠関連の建造物遺構の中でも、当該機銃発射場は、唯一のものであった。また、鉄筋コンクリート造、組積石造、木造による混構造の建造物でもあり、当時の建築技術を伝える貴重な建造物であった。

**註**

1　筆者の他、東北工業大学安全安心生活デザイン学科三年生の小野智希、佐藤諒両君が、今回の実測調査及び実測図浄書に携わった。

2　多賀城市史第二巻第三章

3　同上

4　「多賀城海軍工廠」『戦後財政史執筆参考用内部資料』多賀城市史第五巻所収

5　「海軍工廠定員表」『戦後財政史執筆参考用内部資料』多賀城市史第五巻所収

6　「宮城縣木材株式会社」は昭和17年9月に設立された戦時統制会社であり、昭和18年11月には改組され、名称も「宮城縣地方木材株式会社」と変更された。

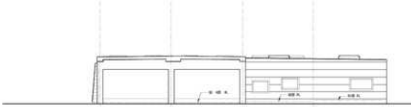


図2　西立平面図
（1階部分）

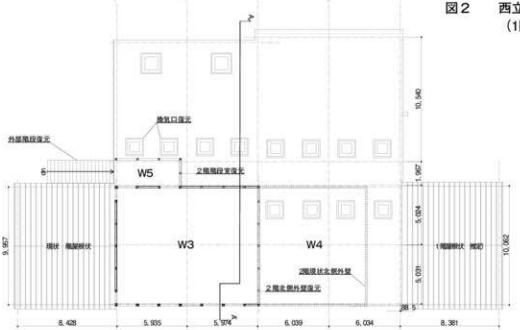



図3　2階平面図

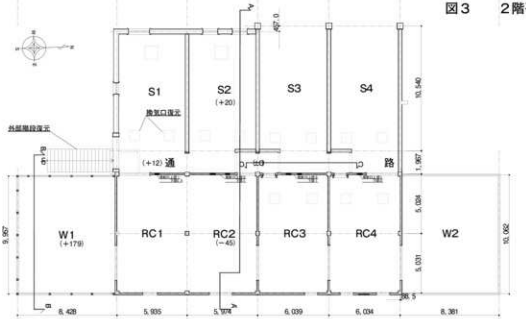



図4　1階平面図

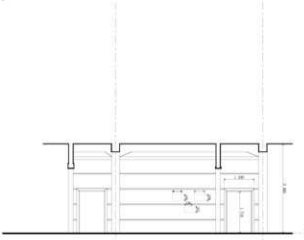



図5　CC'断面展開図

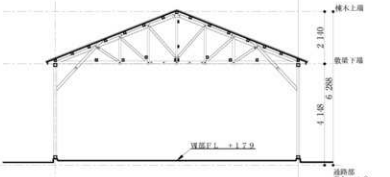



図6　BB'断面図

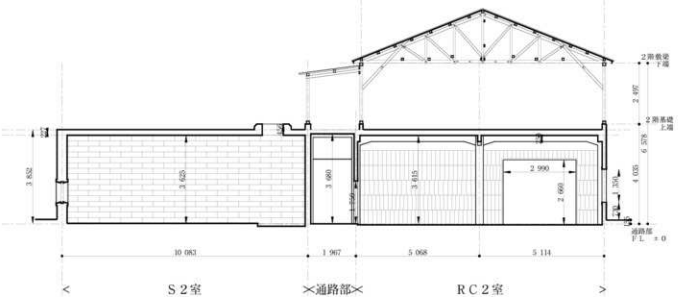



図7　AA'断面図

図8　昭和36年撮影古写真

図9　2階小屋組母屋材に記された墨書
「宮城懸木材株式会社」

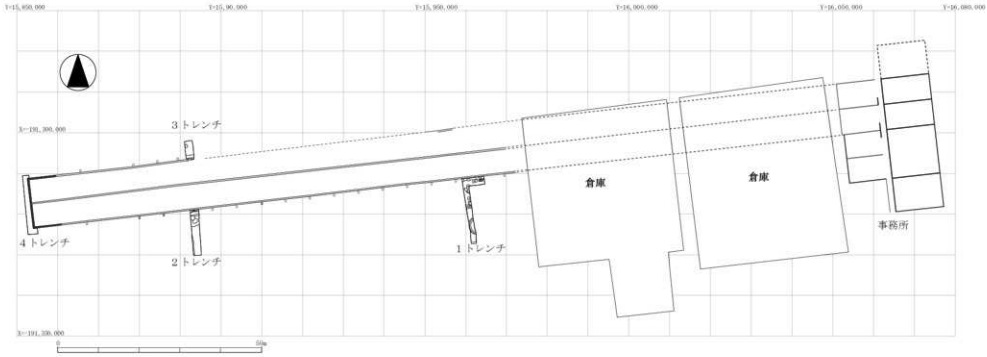



図10　機銃発射場跡発掘調査図（多賀城市教育委員会作成）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | たがじょうしないのいせき2 |
| 書名 | 多賀城市内の遺跡2 |
| 副書名 | 平成23年度発掘調査報告書 |
| シリーズ名 | 多賀城市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第108集 |
| 編著者名 | 武田健市、石川俊英、島田敬、相澤清利、村松稔、小原一成、鈴木孝行 |
| 編集機関 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター |
| 所在地 | 〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27－1　℡：022-368-0134 |
| 発行年月日 | 西暦2012年3月31日 |

| 所収遺跡（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 新田遺跡（にいだ）（第69次） | 宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）新田字後（にいだあざうしろ）11-4 | 042099 | 18012 | 38度30分00秒 | 140度96分14秒 | 20110509～20110523 | 64㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第70次） | 宮城県多賀城市新田字北関合22-1（にいだあざきたせきあい） | 042099 | 18012 | 38度29分29秒 | 140度96分38秒 | 20110510 | 4㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第71次） | 宮城県多賀城市新田字後35-1 | 042099 | 18012 | 38度29分94秒 | 140度96分05秒 | 20110602～20110615 | 22㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第72次） | 宮城県多賀城市新田字北278-3 | 042099 | 18012 | 38度29分55秒 | 140度96分18秒 | 20110630～20110726 | 34㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第73次） | 宮城県多賀城市新田字後129 | 042099 | 18012 | 38度29分80秒 | 140度95分83秒 | 20110707～20110723 | 105㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第74次） | 宮城県多賀城市新田字後22-1、22-3外 | 042099 | 18012 | 38度29分99秒 | 140度95分88秒 | 20110818 | 13㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第75次） | 宮城県多賀城市新田字北154-2 | 042099 | 18013 | 38度29分58秒 | 140度96分20秒 | 20110823～20110831 | 35㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第76次） | 宮城県多賀城市南宮字庚申227（なんぐうあざこうしん） | 042099 | 18013 | 38度30分14秒 | 140度96分53秒 | 20110907～20111004 | 54㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第77次） | 宮城県多賀城市新田字後1,1-1,5,6-1,4の一部、2の一部 | 042099 | 18013 | 38度29分74秒 | 140度96分17秒 | 20110901～20110913 | 104㎡ | 保育所建設 |
| 新田遺跡（第78次） | 宮城県多賀城市新田字後16-6 | 042099 | 18013 | 38度29分93秒 | 140度96分11秒 | 20110914～20110928 | 25㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第79次） | 宮城県多賀城市山王字南寿福寺2-1（さんのうあざみなみじゅふくじ） | 042099 | 18013 | 38度29分86秒 | 140度96分34秒 | 20111020～20111108 | 122㎡ | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第80次） | 宮城県多賀城市山王字北寿福寺4-2（さんのうあざきたじゅふくじ） | 042099 | 18008 | 38度29分94秒 | 140度96分28秒 | 20111130～20111214 | 57㎡ | 店舗兼個人住宅建設 |
| 新田遺跡（第81次） | 宮城県多賀城市新田字後89-5・148 | 042099 | 18008 | 38度29分87秒 | 140度95分98秒 | 20111208～20111222 | 70㎡ | 長屋住宅建設 |
| 山王遺跡（さんのう）（第89次） | 宮城県多賀城市山王字山王四区185-1外（さんのうあざさんのうよんく） | 042099 | 18018 | 38度29分55秒 | 140度97分54秒 | 20110630～20110716 | 8㎡ | 宅地造成 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 山王遺跡<br>（第90次） | 宮城県多賀城市<br>山王字山王二区131-6 | 042099 | 18018 | 38度<br>29分<br>74秒 | 140度<br>97分<br>36秒 | 20110727<br>～<br>20110826 | 32㎡ | 個人住宅<br>建設 |
| 山王遺跡<br>第91次調査 | 宮城県多賀城市<br>山王字山王二区131-7 | 042099 | 18018 | 38度<br>29分<br>73秒 | 140度<br>97分<br>36秒 | 20111012<br>～<br>20111026 | 42㎡ | 個人住宅<br>建設 |
| 山王遺跡<br>（第92次） | 宮城県多賀城市<br>山王字四区177-2外 | 042099 | 18002 | 38度<br>29分<br>58秒 | 140度<br>97分<br>67秒 | 20111129<br>～<br>20111208 | 42㎡ | 共同住宅<br>建設 |
| 山王遺跡<br>（第93次） | 宮城県多賀城市<br>山王字前田9番1、9番8 | 042099 | 18002 | 38度<br>29分<br>73秒 | 140度<br>97分<br>78秒 | 20111208<br>～<br>20111220 | 116㎡ | 賃貸住宅<br>建設 |
| 高崎遺跡<br>（第86次） | 宮城県多賀城市<br>高崎二丁目296-1、297-1 | 042099 | 18017 | 38度<br>29分<br>52秒 | 140度<br>99分<br>66秒 | 20110608<br>～<br>20110609 | 6㎡ | 個人住宅<br>建設 |
| 高崎遺跡<br>（第87次） | 宮城県多賀城市<br>高崎二丁目125-1 | 042099 | 18017 | 38度<br>29分<br>45秒 | 140度<br>99分<br>46秒 | 20110705<br>～<br>20110708 | 374㎡ | 宅地造成 |
| 高崎遺跡<br>（第88次） | 宮城県多賀城市<br>留ヶ谷一丁目88-2 | 042099 | 18017 | 38度<br>29分<br>89秒 | 141度<br>00分<br>52秒 | 20110705<br>～<br>20110827 | 314㎡ | 宅地造成 |
| 小沢原遺跡<br>（第18次） | 宮城県多賀城市<br>浮島二丁目80-9外 | 042099 | 18043 | 38度<br>30分<br>34秒 | 141度<br>00分<br>11秒 | 20110928 | 3㎡ | 個人住宅<br>建設 |
| 小沢原遺跡<br>（第19次） | 宮城県多賀城市<br>浮島二丁目102-10・11 | 042099 | 18037 | 38度<br>30分<br>37秒 | 140度<br>99分<br>87秒 | 20111012 | 3㎡ | 個人住宅<br>建設 |
| 大代貝塚<br>（第5次） | 宮城県多賀城市<br>大代五丁目54-53、54-6 | 042099 | 18020 | 38度<br>29分<br>05秒 | 141度<br>04分<br>28秒 | 20110412 | 9㎡ | 個人住宅<br>建設 |
| 高原遺跡<br>（第9次） | 宮城県多賀城市<br>浮島字高原33番5、202、203 | 042099 | 18021 | 38度<br>30分<br>67秒 | 140度<br>99分<br>95秒 | 20110421 | 21㎡ | 個人住宅<br>建設 |
| 大日南遺跡<br>（第10次） | 宮城県多賀城市<br>高橋四丁目20-12、20-24 | 042099 | 18004 | 38度<br>28分<br>90秒 | 140度<br>97分<br>90秒 | 20111116<br>～<br>20111129 | 88㎡ | 個人住宅<br>建設 |
| 西沢遺跡<br>（第21次） | 宮城県多賀城市<br>浮島字19番2、22番2 | 042099 | 18017 | 38度<br>30分<br>73秒 | 140度<br>99分<br>60秒 | 20110726<br>～<br>20110810 | 301㎡ | 集合住宅<br>建設 |
| 法性院遺跡<br>（第2次） | 宮城県多賀城市<br>浮島字高原176-1の一部 | 042099 | 18032 | 38度<br>30分<br>88秒 | 140度<br>99分<br>88秒 | 20110621 | 20㎡ | 共同住宅<br>建設 |
| 多賀城海軍工廠機銃部<br>機銃発射場跡の調査 | 宮城県多賀城市<br>宮内一丁目5 | 042099 | | 38度<br>27分<br>93秒 | 141度<br>01分<br>34秒 | 20111107<br>～<br>20111114 | 89㎡ | 文化財レス<br>キュー関連 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 新田遺跡<br>（第69次） | 集落・屋敷 | 中世 | 溝跡 | 無釉陶器・砥石・釘 | 屋敷を囲む区画溝 |
| 新田遺跡<br>（第70次） | 集落・屋敷 | | | | |
| 新田遺跡<br>（第71次） | 集落・屋敷 | 古代<br>中世 | 溝跡・小溝群 | 軒平瓦 | |
| 新田遺跡<br>（第72次） | 集落・屋敷 | 中世 | 溝跡 | 無釉陶器 | |
| 新田遺跡<br>（第73次） | 集落・屋敷 | 古墳・古代・中世 | 竪穴住居跡<br>小溝群 | 土師器・須恵器・無釉陶器・黒曜石製石器 | 古墳時代中期の焼成施設<br>中世の区画溝 |
| 新田遺跡<br>（第74次） | 集落・屋敷 | | | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 新田遺跡<br>（第 75 次） | 集落・屋敷 | 中世 | 溝跡 | | 屋敷を囲む区画溝 |
| 新田遺跡<br>（第 76 次） | 集落・屋敷 | 古代 | 河川跡・小溝群 | 土師器 | |
| 新田遺跡<br>（第 77 次） | 集落・屋敷 | | 柱穴 | 土器・寛永通宝 | |
| 新田遺跡<br>（第 78 次） | 集落・屋敷 | 古代<br>中世 | 溝状遺構 | 土師器・須恵器<br>土器片製円板 | |
| 新田遺跡<br>（第 79 次） | 集落・屋敷 | 中世 | 井戸跡・溝跡<br>掘立柱建物跡 | 無釉陶器 | |
| 新田遺跡<br>（第 80 次） | 集落・屋敷 | 古代<br>中世 | 井戸跡・溝跡<br>柱列跡 | 須恵器・円面硯<br>無釉陶器 | |
| 新田遺跡<br>（第 81 次） | 集落・屋敷 | 古代以降 | 溝跡 | | |
| 山王遺跡<br>（第 89 次） | 集落・都市 | 中世 | 溝跡 | | 屋敷を囲む区画溝 |
| 山王遺跡<br>（第 90 次） | 集落・都市 | 古墳 | 水田跡 | | 古墳時代前期の水田跡 |
| 山王遺跡<br>（第 91 次） | 集落・都市 | 古墳<br>古代 | 小溝群・水田跡 | | 古墳時代前期の水田跡 |
| 山王遺跡<br>（第 92 次） | 集落・都市 | 古代 | 溝跡・土壙 | 土師器 | |
| 山王遺跡<br>（第 93 次） | 集落・都市 | 古代・中世<br>近世 | 溝跡・土壙<br>柱穴 | | |
| 高崎遺跡<br>（第 86 次） | 集落・城館 | | | | |
| 高崎遺跡<br>（第 87 次） | 集落・城館 | 近世<br>近代 | 柱穴<br>溝跡 | 土師器 | |
| 高崎遺跡<br>（第 88 次） | 集落・城館 | 古代<br>近代 | 建物跡<br>地下施設 | | 多賀城海軍工廠関連施設カ |
| 小沢原遺跡<br>（第 18 次） | 集落 | | | | |
| 小沢原遺跡<br>（第 19 次） | 集落 | | | | |
| 大代貝塚<br>（第 5 次） | 貝塚 | 縄文 | 貝層 | | 貝塚の西端を確認 |
| 高原遺跡<br>（第 9 次） | 集落・城館 | | | | |
| 大日南遺跡<br>（第 10 次） | 集落 | 中世 | 柱穴<br>溝跡 | | |
| 西沢遺跡<br>（第 21 次） | 集落 | 古代<br>中世 | 竪穴住居跡<br>掘立柱建物跡 | | |
| 法性院遺跡<br>（第 2 次） | 散布地 | | | | |
| 多賀城海軍工廠機銃部<br>機銃発射場跡の調査 | | 近代 | 建物跡 | 金属製品・角材 | 機銃発射場の基礎を確認 |


| 要　約 |
|---|
| 新田遺跡第 69 次調査では、中世の溝跡を発見した。 |
| 新田遺跡第 70 次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 |
| 新田遺跡第 71 次調査では、平安時代の溝跡と畑跡を発見した。 |
| 新田遺跡第 72 次調査では、中世の溝跡を発見した。 |
| 新田遺跡第 73 次調査では、古墳時代の竪穴住居跡・畑跡・焼成施設、古代の畑跡、溝跡、中世の溝跡を発見した。 |
| 新田遺跡第 74 次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 |
| 新田遺跡第 75 次調査では、中世の可能性がある溝跡を発見した。 |
| 新田遺跡第 76 次調査では、古墳時代の河川跡、古代の畑跡、古代以降の溝跡を発見した。 |

| | |
|---|---|
| 要　約 | 新田遺跡第 77 次調査では、時期不明の柱穴を発見した。 |
| | 新田遺跡第 78 次調査では、奈良時代の溝状遺構を発見した。 |
| | 新田遺跡第 79 次調査では、中世の掘立柱建物跡・井戸跡、溝跡を発見した。 |
| | 新田遺跡第 80 次調査では、古代の性格不明遺構、中世の柱列跡･井戸跡、溝跡を発見した。 |
| | 新田遺跡第 81 次調査では、古代以降の溝跡を発見した。 |
| | 山王遺跡第 89 次調査では、中世の区画溝を発見した。 |
| | 山王遺跡第 90 次調査では、古墳時代前期の水田跡を発見した。 |
| | 山王遺跡第 91 次調査では、古墳時代前期の水田跡、古代の畑跡を発見した。 |
| | 山王遺跡第 92 次調査では、古代の溝跡・土壙を発見した。 |
| | 山王遺跡第 93 次調査では、古代の柱穴･溝跡･土壙、中･近世の柱穴･溝跡･土壙を発見した。 |
| | 高崎遺跡第 86 次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 |
| | 高崎遺跡第 87 次調査では、近世～近代の柱穴・溝跡・性格不明遺構を発見した。 |
| | 高崎遺跡第 88 次調査では、多賀城海軍工廠関連施設と推定される建物跡・地下施設を発見した。 |
| | 小沢原遺跡第 18 次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 |
| | 小沢原遺跡第 19 次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 |
| | 大代貝塚第 5 次調査では、縄文時代晩期の貝層を発見した。 |
| | 高原遺跡第 9 次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 |
| | 大日南遺跡第 10 次調査では、中世の溝跡を発見した。 |
| | 西沢遺跡第 21 次調査では、古代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡を発見した。 |
| | 法性院遺跡第 2 次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 |
| | 多賀城海軍工廠機銃部機銃発射場跡の調査では、機銃発射場の基礎を発見した。 |

多賀城市文化財調査報告書第108集
**多賀城市内の遺跡2**
―平成23年度発掘調査報告書―

平成24年3月31日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368-0134

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368-1141

印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町2番10号
電話（022）288-6123

VEGETABLE OIL INK